
東方表裏録

mag

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方表裏録

【Nコード】

N8635W

【作者名】

mag

【あらすじ】

幻想入りしてしまった男が幻想郷である能力に目覚めてしまう、彼は何を思い、日々を過ごしていくのか、異変にかかわったかわらなかったり、元の世界になんとかして帰ろうとする話。偶に原作のセリフを少し変えて使うことがあります。

表一回目（前書き）

自己満足の駄文ですがそれでもよろしければどうぞ。

表一回目

「彼女を助けて!!」

誰かの切羽詰まった声が聞こえる。

男はその声の原因を知っている。しかしそれは男には関係ないし、わざわざ自分の命を危険にさらしてまでかわるほど男はお人よしではないのでこの状況を俯瞰することにした。

……はずだった。

そう…男の意思とは無関係に体は動いてしまった。

人が一年間のうちに交通事故にあう確率は約0.9%、一生を80年と仮定した場合事故にあう確率は53%らしい。この数字が高いか低いかは人によって感じ方が違うだろう。問題なのは……

今日の前に迫っているトラックである。

トラックの運転手は長距離を運転してきたのか知らないがうつらうつらと船を漕いでおりこちらに気付く様子はない。

……いや、仮に気付いたとしてももう遅いだろう。

（目が覚めたら病院のベッドの上だといいが…これは死ぬだろうな。
…せめてもの救いは突き飛ばした女の子が助かることか…。）

男はそんなことを思いながら目をつむると意識が落ちるのを感じた。

「……不思議なこともあるわね。」

不可解なつぶやきとともに…。

表一回目（後書き）

この小説を見てくれ・・・どう思う？

すごく・・・短いです・・・。

裏一回目（前書き）

おそらく最初で最後のオリ妖怪。

裏一回目

ここは幻想郷のある森の奥深く、そこに二人の…いや二妖怪が話していた・

「ようこそ我が森へ、境界の妖怪。わざわざこんな辺鄙なところへ来てもらってすまんねえ。」

木の形をした妖怪がもう片方の妖怪に語りかける。

「要件は何？　こう見えて私昼寝するのに忙しいのよ。（訳…さっさとしろよ。おまえに構ってる暇なんかねえんだよ。）」

一見美人だが胡散臭そうな妖怪が答える。

「なあに簡単なことじゃよ。外に世界からちいさなおなごを連れてきてほしいのじゃ。」

その答えを聞いて境界の妖怪と呼ばれたモノが扇で口元を隠しながら言う。

「…どうして？　私の記憶が正しければこの前一人連れてきたはずだけど、人面樹さん？　（訳…ボケたかじじい？　人みたいな顔しやがって。）」

人面樹と呼ばれた妖怪はその人のような顔をゆがませた。

「それがのう主がこの前連れてきた男じゃが、外では自殺志願者というのかの？襲っても食べても何の反応もなくてつまらなかったわい。わしらは妖怪じゃからのう…。妖怪の賢者さんなら分かってもらえらとおもうのじゃが。（訳…もっと生きのいい人間連れてこい。賢い者なんだろうが、それぐらいわかれ。）」

「それが要件？ならもう帰るわね。外から連れてくる人間もその期間も決めてるの。自殺志願者、助からない遭難者、不慮の事故で死ぬのが確実な者。まあ他にもあるけどあなたには関係ないわ。（訳…いちいち文句いつてんじゃねえよ。こっちにはこっちの事情があるんだよ。）」

「ふむう。それなら仕方ないの。……ただ、もしかしたら偶然この森に迷い込んだ人里のおなごが偶然どこぞの妖怪に襲われてしまうかも知れんがそれも仕方のないことよ。（訳…要望を飲まないなら人里のおなごを襲うからな。）」

「そしたらあなたは偶然何者かに退治されるかもしれないけど、それも仕方のないことよね。（訳…やってみろよその前にお前を殺してやるから。）」

「わしが退治されてしまったら、この《あらゆる植物を操る程度の能力》で今現在人里に供給している野菜や果物がなくなってしまう

がそれでも退治されてしまうのかのう。(訳…やれるものならやってみろよ、困るのはそっちだろ。)」

境界の妖怪…八雲紫は少し何かを考えるそぶりを見せてから溜息をついた。

「…はあ。わかったわ、ただし今回だけにして頂戴。」

「さすが妖怪の賢者、話がわかるのう。ちいさなおなごは今回だけじゃ。」

(…人面樹はそろそろ切り捨てるべきかもしれないわね。)

(小さなおなごはの…)

「それじゃ外の世界から連れて来るわね。くれぐれも人里には…」

「大丈夫じゃ、わかっておる。生きのいいのを頼むぞ」

こうして森の奥での話し合いは終了した。

しかし、この妖怪たちはまだ知らない。この行動が幻想郷に新たな変化をもたらすことを…

裏一回目（後書き）

訳||エキサイト翻訳とでも思っといってください。

表二回目

男が目を覚ますと目の前にはさまざまな植物生い茂っていた。立ち上がり周りを見渡すと彼はおもむろにポケットから携帯電話と音楽プレイヤーを取り出し、右腕につけている腕時計の針が指している時間を比べた。

（日付は変わっておらず、すべてが13時を指している。ふむ…どれも壊れてはいない。携帯は県外か…。そして車に轢かれてから30分たっているのか。…いやちよつと待てよ。）

男は思い出す、気を失う『前』に起こったことを。

（…そう気を失う『前』に気を失うのを『感じた』んだ。怪我もしていない、トラックの衝撃も感じなかった。）

男は確認する、周囲の『状況』を。

（気を失った場所から30分で行ける範囲にこんな場所はない。現代の移動手段では…。森の奥深くみたいだが…周りに『自然に実っている果物』があるな。『苺、西瓜、蜜柑』ときたか。どれも食べごろみたいだな。）

男は受け入れる、『状況』からそれらの『事実』を。

（トラックには轢かれていなかった、だが『何か』が原因で気を失ってしまったこと。これが一つ目の『事実』。二つ目の事実、それは、今いる場所が『常識ではありえない世界』であること。なぜならこの目の前にある果物たち…これらは普通『同時』には実らないものたちだ。なのに、人の手が加えられた形跡もないのに実っている。…わかることはこれくらいだな、『何か』や『この世界』についてはいくらでも邪推はできるが今はそんな場合じゃない。大事なのはどんな事実でも受け入れ、そして…）

そして男は考える、『事実』から次に『すべきこと』を。

（見ず知らずの土地、いや世界で生き残るにはまず…。）

「やれやれ、妖怪の賢者め…、ちいさなおなごと言ったはずじゃがのう。」

表二回目（後書き）

作者は頭がよろしくないなので穴も多いと思いますがなにとぞご容赦を：o r z

裏二回目

Side 人面樹

妖怪が人間を襲っていたのは恐れが必要だったから…。

恐れがなければ妖怪は存在できない…。

それを知らなくとも本能で理解していた…。

恐れがなくなれば、ただの幻想…。

だから今、わしは幻想郷にいる…。

外の世界では木の模様が人の顔に見えるだけとなったのじゃから…。

すべてを受け入れる幻想郷…

ここでは消える心配はない、人間を襲う必要もない。

…現に人間を襲わない妖怪も知っておる。

そう…人間を襲わない…妖…怪…

……く、く、

ふっ、ふふ、

…ハハッハッ!!

笑いが止まらないの! 人間を襲わない? なぜ、ナゼ。なぜ? 何故!!

何故あんな楽しいことをやめてしまうのじゃ!?

あの恐怖に歪む顔!!

泣き叫ぶ声！

肉を裂き、骨を砕く感触、音。

これだけはやめられんのう。

…おや？ いつの間にかわしの森に何か入ってきておる。

動いてなかったから気づかんかったわい。境界の妖怪め、なかなか仕事早いじゃないか。

今度は楽しめるとよいがのう。

ちいさなおなごよ待っておれ、今わしが迎えに行くからの。

裏二回目（後書き）

人面樹の森は魔法の森ではありません。

次話は裏三回目になります。

裏三回目

Side 人面樹

確かわしの根の反応があったのはここらへんじゃったが…。

……見つけたがこれは…。

「やれやれ、妖怪の賢者め…、ちいさなおなごと言ったはずじゃがのう。」

そこにいたのはおなごでもなく、ちいさくもない成人した男だった。

「おぬしは前に殺した奴と違って楽しませてくれるか？ 外の世界から連れてこられた人間よ。」

すると男はやっと今の自分の状況を理解し始めたのか、今まで無表情だった顔が恐怖に染まり、後ずさりながら声にならない声をあげた。

「○△■×☆？」

人面樹は男の反応とは対照的に満面の笑みを浮かべる。

「いいのういいのう、その反応。わしはそれが見たかったんじゃ。」

「な、なんなんだよあんな!？」

妙に強がっておるがその強がりをはがしてやるのもまた一興。

「わしか? ふむ、知ったところで意味はないぞ。わしがおぬしを惨たらしく痛めつけた後、殺してしまうからの。」

「お、俺なんか食べてもおいしくないぞ。」

「食べるんじゃない。ただおぬしの反応を楽しむために殺すのじやよ。」

「ど、どうしたら助けてくれるだ…?」

「おぬし頭悪いのう…。最初から殺すと言うておろうに。」

「…っ!!」

…逃げようとしておるの。下半身に力が入っていつてるのがまる分
かりじゃ。

「ふ、ふざけ…!？」

その言葉を言い終わらないうちにツタで男の手足を縛る。

おお、見事に転倒したの。

その拍子に男の手からなにか落ちたのう、…いつのまに手に持っておったんじゃ？まあよい。

「■○☆☆△！ ■○☆☆△！」

拾ってはみたが、いったいなんなんじゃこれは？小さな板？が何かしゃべっておる。

「やめろ！彼女に触るんじゃない！！デッドツリーもそんなことを言うな！頼むから…。」

彼女？でっどつりー？…くくく、そうか、強がっていたのはそういうことか。ならこれを利用しない手はないのう。

「のう…おぬし、ずいぶんとこ奴にご執心みたいじゃの？さっきまでの強がりはどうした？」

そういつて板を持っているツタの力を強める。

「やめるんだ！！僕はどうなってもいい！！どんなにひどいことされたって構わないから彼女だけは傷つけないでくれ！」

ツタを必死に解こうとしながら男は懇願する。

「必死じゃのう。だがその行動はわしを喜ばせるだけじゃぞ。…これはわしの推測なのじゃがこの小さな板、おぬしの大切な人なのじやろ？でつどりーというのは彼女の名前。どうしてこのような姿になっておるのかは分からんが、事情があるのじやろ？そしてうまくしゃべれてないのはその姿のせい、違うか？」

男は何かに耐えるように小さく頷いた。

「…そうだ。よくわかったな…。」

「そこそこ長く生きておるからの。…でだ、今のままだとわしがおぬしらを殺して終わりなのじゃが…。」

もちろんそんなもったいないことはしない。

「……。頼む、彼女だけは…。」

「おぬしに助かる機会をやろう。」

「機…会…?」

「そう機会。おぬしら二人が助かる機会じゃ。」

「!!」

目に希望の光が戻ってきたの。くっくく。

「人里に行って子供を二人さらってこい。」

「そんなことできるわけじゃないか!!」

「できないなら二人ともここで死ぬだけじゃな。」

「…っく。どうしてあんた自身がいかないんだ？」

「ちょっとした理由があるんじゃないよ。」

「ちょっとした理由？」

「…どうでもよいことじゃ。それよりどうするのじゃ？ここでむぎむぎ殺されるのか？それともどんなことをしてでも生き残る道を選ぶのか？」

「…人里から子供を二人、攫ってくればいいんだな。だったら早く

人里への道を教えてくれ。」

「英断じゃな。人里へは実がなっていない木を辿って進んでいけばよい。半日も歩けば着くじやろう。」

「…彼女は連れていけないんだな。」

「人質代わりじゃよ。なあにちゃんと子供を攫ってくれば返そうぞ。期限三日じゃ、それまでに戻ってこなかったらわかるじやろ？」

「分かった。このツタを解いてくれ、時間がおしい。」

…ふっきたようじゃな。ツタは…これで外れたの。

「生きのいい子供を期待しておるぞ。」

「……。」

行きおったか…。

楽しみじゃの

子ども連れて来た瞬間に

この人質を殺すのが

裏三回目（後書き）

ご都合主義上等です

次話は主人公視点でこの場面をば…

表三回目

（見ず知らずの土地、いや世界で生き残るにはまず…。）

ガザガサッ

男の後ろから何かが這ってくる音が聞こえる。

「やれやれ、『妖怪の賢者』め…、『ちいさなおなご』と言ったはずじゃがのう。」

（『日本語』を話せるのか…ありがたいな。これで判断材料を増やすことができる。）

男が振り返るとそこには人間の顔の模様がある木の形をした何かが近寄ってきた。

（……こういう種族がたくさんいる世界なのか？しゃべって動かなければただの木なんだがな。人の顔に見える木なんて元の世界にたくさんあるし。）

男は観察する。これが自分にとって厄をもたらすのか、幸を呼ぶの

かを知るために。

「おぬしは『前に殺した奴』と違って『楽しませて』くれるか？『外の世界』から『連れてこられた』『人間』よ。」

（なるほど、どうやら自分は今命の危機にさらされているらしい。……だったら死なないための布石を投じておく必要があるな。）

男はあたかも状況を理解し始めて怯えるフリをする。相手の望む反応を、『楽しませて』あげるために震えた声で。

「What do you know our worlds？」

（訳…あんたは外の世界の何を知っているんだ？）

「いいのいいのう、その反応。わしはそれが見たかったんじや。」

（そういう反応をするのか…。だったらなんとかなるな、こっちの演技にも気づけてないようだし。）

人面樹が男は反応を楽しんでいる間に男は人面樹の反応を試す。

この一人と一妖怪の状況は表から見たならば妖怪側がイニシアティブをとっているように見えるだろうが、裏から見るとまるで違う。

「な、なんなんだよあんた！？」

男は人面樹を欺き、少しでも情報を得ようとしている。

「わしか？ふむ、知ったところで意味はないぞ。わしがおぬしを惨たらしく痛めつけた後、殺してしまうからの。」

（まだだ、まだ布石を投じ切っていない。）

「お、俺なんか食べてもおいしくないぞ。」

（もっと油断しろ。）

「食べるんじゃない。ただおぬしの反応を楽しむために殺すのじやよ。」

（もっと慢心しろ。）

「ど、どうしたら助けてくれるだ…？」

（もっと呆れろ。）

「おぬし頭悪いのう…。最初から殺すと言うておろうに。」

そしてあまりの男の理解の悪さに人面樹自身は気づいていないが気を抜いてしまった。

（……………このタイミングで。）

だから、彼が後ろで何かしているのに気付けなかった。

(…よし、これで準備は終わった。あとは下半身に力を入れ、あたかも逃げようとすることを気づかせ…。)

「…っ!!」

(拘束してくるのか?それともこの行動を指摘して自分の動揺のフリを楽しむか?)

男は確信していた、人面樹は逃げ出そうとしても自分を簡単には殺さないことを。これまで彼が引き出した会話によって。

「ふ、ふざけ…!?!」

(…ツタを操れるのか、いやあの果物もこいつが原因だとすると植物か?今考えることじゃないな。あとはこのボタンを押して無様に転ぶだけだ。)

無様に転び、手から落とす。

「You've got a mail! You've got a mail!」

携帯電話を

「やめろ！彼女に触るんじゃない！！デッドツリーもそんなことを言うな！頼むから…。」

男はあたかもそれが自分の大切な人であるかのように、その人が自分を庇おうとしてるかのようには話す。

「のう…おぬし、ずいぶんとこ奴にご執心みたいじゃの？さっきまでの強がりはどうした？」

そういつて人面樹は携帯電話を持っているツタの力を強める。

「やめるんだ！！僕はどうなってもいい！！どんなにひどいことされたって構わないから彼女だけは傷つけないでくれ！」

「必死じゃのう。だがその行動はわしを喜ばせるだけじゃぞ。…これはわしの推測なのじゃがこの小さな板、おぬしの大切な人なのじゃろ？でっどつりーというのは彼女の名前。どうしてこのような姿になっておるのかは分らんが、事情があるのじゃろ？そしてうまくしゃべれてないのはその姿のせい、違うか？」

（ミスリードにこれほど上手にかかると逆に怪しいが…。ダメだ、感情を顔に出すのはこの場面でもっともしてはいけないこと。）

「…そうだ。よくわかったな…。」

（逃げる算段がばれてるのならどのみち死ぬんだ。今はやるべきことをする。）

「そこそこ長く生きておるからの。…でだ、今のままだとわしがおぬしらを殺して終わりなのじゃが…。」

「……。頼む、彼女だけは…。」

（提示して来い。生き残る条件を、おまえがして欲しいことを。）

「おぬしに助かる機会をやろう。」

（『日本語』があって、『人間』を知っていて、『前にも殺した』ことがあるんだろう？。その言葉が本当ならこの世界にも人間かそれに準ずる者はいる。そして『ちいさなおなご』を殺したいんだろう？）

「機…会…？」

（なら、それ《携帯電話》を人質にして人間のいる場所を教え、攫ってくることを条件として突き付けろ）

「そう機会。おぬしら二人が助かる機会じゃ。」

「！！」

「人里に行って子供を二人さらってこい。」

（よし、人里があることが確認できた。死なない可能性も高くなった。）

「そんなことできるわけじゃないか!!」

（簡単に飲んじゃいけない。楽しませるために葛藤する人間を演じないとな。）

「できないなら二人ともここで死ぬだけじゃな。」

（まだ聞きたいこともある。）

「…つく。どうしてあんた自身がいかないんだ？」

「ちょっとした理由があるんじゃないよ。」

「ちょっとした理由？」

「…どうでもよいことじゃ。それよりどうするのじゃ？ここでむぎむぎ殺されるのか？それともどんなことをしてでも生き残る道を選ぶのか？」

（くくっ、つまり人里にはあんたを抑え込む抑止力があるわけか。それが分かれば十分だよ。）

「…人里から子供を二人、攫ってくればいいんだな。だったら早く人里への道を教えてくれ。」

「英断じゃな。人里へは実がなっていない木を辿って進んでいけばよい。半日も歩けば着くじやろう。」

（あんたは愚断だったな。せめて携帯電話のことをもう少し怪しむべきだった。まあ口八丁でごまかすがな。）

「…彼女は連れていけないんだな。」

「人質代わりじゃよ。なあにちゃんと子供を攫ってくれば返そうぞ。期限三日じゃ、それまでに戻ってこなかったらわかるじやろ？」

（三日…ね。時間の流れ方も同じみたいだな、空には雲も太陽もあるし。）

「分かった。このツタを解いてくれ、時間がおしい。」

（人里に行ってもっと情報を集めないといけないんだ。）

「生きのいい子供を期待しておろぞ。」

(……。)

「……。」

男は歩みだす。

想像もできない世界へ

ゆっくりだが着実に

(……なかなかおもしろい外来人を連れてきてしまったわね。)

表三回目（後書き）

文章力のなさや伏線の張り方の下手さに絶望する今日この頃。

dead tree 訳：枯れ木

表四回目

『黄昏』

人の姿が見分けにくく「誰そ彼」と尋ねるところから、夕方の薄暗い時間帯を指すようになった。

男が歩き続けてあたりはすっかり黄昏時、徐々に視界が悪くなり始めたので彼は適当な場所を見つけて今日はもう休むことにした。

彼の手には林檎が二つに梨が一つ。実がなっていない木の隣に見つけたので採っていたのだ。

…シャクツ、ムシヤムシヤ

（この林檎、みずみずしく、甘みもあってなかなかうまいな。外の世界のものよりかなり違うな。）

一泊する場所を見つけ木の下に座り込み、咀嚼しながらそんなことを思っていた。

「わたしのおなまえをおしりになりたいのでしょー♪でもいまおもいだせなくてかなしいのですー♪」

…あら、おいしそうな林檎。そこの通りすがりの人間さん、私わたくしにもおひとつ頂けるかしら？」

いきなり空間が裂け、男の目の前に上半身だけがその裂け目から出ている女性が現れた。

「…構いませんよ。『妖怪の賢者』さん。」

そう言ってもうひとつの林檎を差し出す。

「ふふふ…それが今の貴方にできるベストな返答よね。わたくしが妖怪の賢者ならいろいろと探りをいれることができるだろうし、そうでなくても妖怪の賢者についての情報を得られる可能性が高いものね。」

林檎を受け取り、妖しく微笑みながら男を見つめる。

（あの木の妖怪よりは賢いみたいだな。…それだけやっかいでもあるが。）

「妖怪の賢者について知りたがっていることを知っているんですね。（訳…つまりあんたは妖怪の賢者か、自分をこの世界に連れてきたことにかかわっているんだな）」

「ええ、私が妖怪の賢者、八雲紫よ。貴方をこの『幻想郷』に『連れてきてしまった』張本人。『境界の妖怪』とも呼ばれているわ。（訳…貴方も名乗りなさい。この世界の名前は幻想郷。あなたがこの世界に来てしまったのは事故でもあるのよ。）」

「境界の妖怪とは上手いこと言いますね。僕は山田太郎っていいます、ポジションはキャッチャー。もともとはあの少女を連れてくる

予定だったんですね。だったら僕は被害者なわけか。（訳…上半身だけが出ているのは空間の境界を操っているからか。名乗る気はない。事故ならとっとと元の世界に帰らせろ）」

「ドカベンさん、とでもお呼びしたらよいかしら？少女を助けようとするなんて立派でしたわよ。でも、この幻想郷の子供はどうでもいいのね。（訳…わたしは外に世界のことも英語も知っているわよ。この世界に來た原因はあなたにもある。人面樹との会話も聞いていたわよ。）」

「気軽に山田さんと呼んでください。八雲さんは外の子供はどうでもいいんですね。それにしても、あの人質を取った勘違いしているまぬけな妖怪は人面樹っていうのか。（訳…仲良くなれる関係じゃないだろ。おまえも人のこと言えない、お互い様だ。それにあんたならあの会話のホントの意味わかるだろ。子供を攫う気はない。）」

「そうねー、あれは最近調子に乗っているからもし子供を連れてこなかったら人里を襲っちゃうかもしれないわ。どうしましょう、困ったわー。この問題が解決できれば私に暇ができて、機嫌もよくなつて、しなくてもいいことをしちゃいそう。（訳…人面樹退治するのを手伝ったら返してやる。）」

「なんで人面樹をそのままにしているのですか？（人里の抑止力はあるたじゃないのか？明らかにあんたのほうが格上なんだから一人で解決できるだろ。）」

「山田さん、私はこの幻想郷が大好きなの、住んでいる人間も含めてね。そして人間が生きていくためには食料が必要な。私たち妖怪と違って。」

そういつて八雲紫は受け取った林檎を口に運び一口かじる。

「もちろん人里の人間も最低限自給自足できるレベルには達しているわ。だけど、それだけでは厳しいのよ。…色々。それは私の望む幻想郷ではないのよ。」

その言葉には確かにヒトへの思いが詰まっているのを感じた。

だからというわけではない。

ただ自分の世界に戻るために男は行動するだけだ。

「…それで僕は何をすればいいのですか？」

扇を広げ口元を隠しているのでもまだ妖しく笑っているのかは分からないが、発した言葉には明らかにこちらの反応を楽しんでいるようだった。

「人里から子供を攫ってきてくれないかしら？」

黄昏時、現代では一番誘拐にあいやすい時間帯でもある。

表四回目（後書き）

やっと原作キャラと絡めることができました。

八雲紫が登場時にうたっている歌は椎名林檎さんの「りんごのうた」です。

裏四回目（前書き）

誤字修正しました。

裏四回目

Side 八雲 紫

「人里から子供を攫ってきてくれないかしら？」

さて、この人間はどう反応するのかしら。

「つまり、手段ではなく理由が欲しいわけですね。」

……理解が早いのは助かるのだけど、つまらないわね。最初の作り笑顔からまったく表情が変わらないわね。

「そういうこと。人面樹自身の力は私には到底及ばないのだけど、幻想郷の管理者としては何の理由もなく退治するわけにはいかないのよ。」

「そこで僕が人里の子供を攫ってきて理由をつくるんですね。」

「貴方は子供を攫う。人面樹はその子供を殺そうとする。私はその瞬間に人面樹を殺す。貴方は元の世界に帰れる。単純でいいじゃない。」

本当はこういうのは巫女がすべきことなのだけど。あの子は事件が起こった後にしか動かないでしょうし……。

「…それじゃあ、人面樹と人里について教えてもらえますか？」

「まずは人面樹について教えるわ、能力は《あらゆる植物を操る程度の能力》よ。」

「…能力？」

「そう、『程度の能力』。この幻想郷では少数ではあるけれど人、妖怪問わず能力をもっているモノもいるわ。人面樹もそう。」

「人面樹を退治しなかったのはその能力が惜しかったからですね。それで人里へ幻想郷じゃ育てにくい野菜や果物を提供していた。…本当に退治してもいいんですか？」

「このままじゃメリットよりデメリットのほうが大きいよ。それに私の能力を使えば外の世界から持ってこれなくもないわ。めんどくさいけど。」

「さっきの人里への思いはどうしたんですか…。まあ、どうでもいいですけど。そういえばこの森を支配しているのは人面樹でいいんですか？」

「あら、どうしてそう思うのかしら？」

「さんざん歩いて生き物の姿はおろか気配すら感じませんし、30分『も』気絶していたのに何もされてなかったの。」

「30分『しか』気絶していなかったのに、の間違いじゃないかし

ら？」

「僕がいた場所から30分『しか』経っていないなにここ、幻想郷でしたっけ？にいる。しかし30分『も』気絶していて命が危険にさらされているのに何もなかった。これが一応の根拠です。あと、憶測ですが人面樹は森に侵入されたとき、それは動いているモノしか感知できない。僕が起きるまで姿を現さなかった理由がこれです。ついでに音も感知できないじゃないですかね？それとも八雲さんの能力で遮断しているのかな？」

さりげなく私の能力の『範囲』ついてに探りを入れてくるあたり油断ならないわね。まあ能力自体の見当はついてるんでしょうけど。

「私の能力は使っていないわよ。人面樹は根でしか感知できないの、そして森全体にその根を張り巡らしているわ。」

「：分かりました。人里について教えてください。」

「人里は電気も通ってないし、みんな着物を着ているわ。明治で時代は止まってると思うてくれていいわよ。」

「子供たちがたくさんいる場所がありますか？」

「上白沢慧音が寺子屋を開いているわね。」

「その上白沢さんってのはどんな人物なんですか？」

「少し頑固で石頭。授業はあんまりいい評価ではないけれど、里の

みんなから信頼されてるわ。なんだかんだいって子供たちにも好かれてるし。」

……無表情になったわね。何を考えているのかしら、ここまで感情が読めない人間も珍しいわ。

「……………もう充分です。また三日後に会いましょう。」

「この世界、幻想郷について聞かなくていいのかしら？」

「どうせすぐに元の世界に戻るんです。常識が通じない世界。それが分かっていれば問題ないです。」

……興味がない、言ってくれるわね。その言葉後悔するかもしれないわよ。

彼と私が一口かじった林檎が目に入る。それをバスケットボールのようにくるくる回す。

「願わくばこの林檎が禁断の果実にならないことを祈るわ。アダムさん。」

「せいぜい誘惑に負けないようにしますよ。イヴさん。」

…ホント面白いわね、だけど…

「そうねえ……貴方に足りないものは、表情かしら？ 仲良くなるための。」

「どうでしょうね。Bad Apple^{ロクデナシ}ですから。」

そして、私はスキマに入り、彼と別れた。最後の言葉、聞こえたかは分からない。

幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ。

裏四回目（後書き）

林檎の実の花言葉 誘惑 好物

表五回目（前書き）

少し修正。

表五回目

(……帰れるめどはついたが、めんどくさいことになってきたな。)

男の口から自然とため息が漏れる。周りはすっかり闇に包まれており、腕につけている時計の針は数字の八を指していた。

(…寝るか。今日はいろんなことがありすぎた。朝早く起きて出発すれば、昼ごろには人里に着くだろう。)

幻想郷は全てを受け入れる。

…か随分と意味深な言葉を残して行っただな。

一口だけ齧った林檎を放り投げ、男は目を瞑り寝転がる。

(…自分はどこか抜けているな。いくら似ていても違う世界の食べ物を簡単に口にしてしまうなんて。おそらく、何か体に影響が出る可能性があるんだろうな。)

境界の妖怪が自分をアダムと呼んだのはそういうことだろう。さらに気にかかるのが、

『程度の能力』

この言葉を聞いてから頭に何か引っかかっている。

忘れ物をしているような。

かゆい手ところに届かないような。

そんな感覚だ。

……正確には人面樹に襲われてからあつた感覚がより強くなったと言ったほうが正しいな。

男はそんなことを思いながら眠りについた。

なぜなら、人面樹がこの森を支配していて、自分を襲わないとわかってからである。

「……………いさ。」

日の光が男の顔にあたり、しばらくして彼は昔の夢から目を覚ます。

（……………6時、いい時間だな。出発するか。）

立ち上がり、一度大きく伸びをして歩き始める。

右手には梨を持ったまま。

（やっと森を抜けたか。…あれが人里か。）

約6時間ほど歩き続け、男は人面樹の森を抜けた。

その先には草原が広がっており、堀と門のようなものが見える。

（…大体歩いて30分くらいで着きそうだな。つまり30分もあれば人面樹の森に子供を連れていけるわけか、ありがたいな。）

彼は自分の服装に少し気を遣って人里へ向かって歩き続けた。

そして、門と門番らしき人間が目映る位置にくと必死に走り始めた。

「……た、助けてくれ！！ば、化け物に殺される！」

表五回目（後書き）

主人公に分かりやすいフラグがたちました。

誤字修正しました。

表裏一度目（前書き）

「表裏」と題がつくときは主人公の過去編です。

表裏一度目

……この世界に来てこの夢は付きまとうのか。

真っ白のただ広い空間に男はいる。

そして彼の目の前には…

父に母、幼いころの『ボク』にまだ兄がいる。

兄が何か絵を描いてそれを両親に見せると褒められていた。

ボクはそれを見て、本当は積み木で遊びたかったけど兄がしていた事を『見よう見まね』でやってみる。

するとどうだろう、家族はみんなすごいと褒めてくれた。

ただ単純に嬉しかったのを覚えている。

場面は飛ぶ。

今度は小学生低学年の『僕』だ。

兄は色んな才能に恵まれていた、勉学、芸術、運動、天才と言っても良いかもしれない。

僕は模倣^{マネ}する才能にだけがあった、ただそれだけ。

だけどそれで十分だった、目の前にはこれ以上ないお手本がいたのだから。

クラスの人気者にはなれた。

けれど僕はまだ大切なことに気づけていない。

表裏一度目（後書き）

実の所主人公の過去編はほぼ書き終わっています。問題はそれをいつ、どれくらい明かすかなんですが、2章があまりにもひどかったのでここに追加しました。ホント小説を書くのって難しい…。

裏五回目（前書き）

誤字修正しました

裏五回目

S i d e 門番

幻想郷の人里は塀に囲まれており、東西南北四つの門が設置されている。

北に続くは妖怪の山

西に行けば魔法の森

南の奥深くには迷いの竹林

東を尋ねれば博麗神社

人里の人間たちは危険区域の境界を理解しており、一般的にそれらの場所を越えようとする者は少ない。

そして人里は妖怪の賢者に保護されているので危険が迫ることはまずない。

ゆえに配備されている門番たちもあまり気を張って警備しておらず、ゆっくりとした時を過ごしていた。

「……今日も人里は平和だなあ。午の刻（12時）を知らせる鐘も鳴ったし昼飯の時間にするか。」

南の門番をしている男は風呂敷から最愛の妻が作ってくれた弁当を取り出す。

「そういえば、明後日は俺の誕生日か：娘二人が何かこそそと話し合っていたな。」

おそらく、自分を祝う準備をしているのだろうと思うと自然と笑みがこぼれる。

「ふふっ、しかし驚くのは娘たちだろうな。何せその日弟か妹がでることを知るのだからな。」

妻と話して決めていたことだ。

「今頃、二人とも寺子屋で上白沢先生にしごかれているだろう。：昔の俺がそうだったように。」

箸を進めながら子供時代を思い出す。

「今となっではいい思い出だが、先生の頭突きは本当に痛かった：。」

竹の水筒にいれている水を飲み、弁当の残りも平らげる。

「：うし、それじゃあ午後の仕事も頑張りますか。今日も人面樹の森の立ち入り許可日じゃなかったな。だったら人の出入りは少ないな。」

人里には2週間に一度、ここから見える人面樹の森に立ち入ることが
できる日がある。もちろん、行く人、人数は決めておりそれを監
視するのも門番の仕事でもある。

「前に一度だけ食べた、まんごーっという果物はおいしかった。機
会があればまた食べたいが難しいだろうな。」

俺は肩を落とし再び、門に戻った。

すると、そこに見知らぬ男が必至の形相で走ってきた。

「……た、助けてくれ!!ば、化け物に殺される!」

(人里の人間じゃない!?)

「だ、誰だ貴様は、人に化けた妖怪か!?!」

そう言って、手に持っていたやりを突き付ける。

すると男は腰を抜かしたのか後ろに尻もちをつき必死に弁解する。

「違う!!俺は化け物から逃げてきたんだ。」

よく見ると男はあまり見ない格好をしているが、所々汗の跡や泥が
付いており、転んだのか膝も擦りむいているようだった。

「…あんだ、まさか外来人か？その格好、妖怪のことも知らないみたいだし。」

「外来人？妖怪？なんだよそれ。ってかここはどこだよ！？いったい何が起きたって言うんだよ！」

男はあたりを挙動不審に見回し、怯えているようだった。

「…疑ってしまってますまない。もう大丈夫だから落ち着くんのだ。」

（生きている外来人は初めて見たな。）

「…そ、そうだ上白沢ってやつがここにいるんだろ！？会わせてくれ。」

「先生に、何故？」

「妖怪の賢者ってやつに言われたんだ。そいつが俺を元の世界に戻してくれるのを手伝ってくれるって。」

……妖怪の賢者。会ったことはないがこの里を保護している妖怪か。

「分かった。彼女は寺子屋にいるから、ひとまずそこに行こう。ちようど昼飯の時間で授業も行っていないだろうし。」

「あ、ありがとう。ほんと俺、何が何だかわからなくて、どうしようもなくて…」

混乱するなというほうが無理だと俺は思う。

「何、気にするな。困った時はお互い様だ。」

こうして俺はこの名前も知らぬ男を寺子屋に連れていくことになった。

後になって思い返してみてもこの判断が正しかったのかは分からない。

表六回目

Side 上白沢 慧音

寺子屋には人里の子供たちが多く集まっていた。

子供たちにはそれぞれ一つずつ机が与えられており、みんな畳の上で正座したり胡坐を組んだりして授業を聞いている。

「……であるから、太郎君が結果的に食べた蜜柑の個数は3と6分の1個となるわけだ。」

私は片手に教科書とチョークを持ち黒板を使って算数の授業を進める。

カーン カーン カーン

「む、もうこんな時刻か、それじゃみんなお昼ご飯にしようか。」

すると今までつまらなそうに私の授業を聞いていた子供たちは一瞬で元気を取り戻し騒ぎ始めた。

「やっと終わったー。」

「今の問題分かった？」

「ええと、今のはね…」

「あ、国語の教科書忘れちった。」

「一緒にご飯食べようぜ。」

まったく現金な奴らだな。

「午後からは国語の勉強するからなー。教科書忘れた奴は家に取りに帰れよー。あと、分からない問題があるなら先生に直接聞いてもいいんだぞー。」

「先生に質問に行くこんな問題も分からないのかって、頭突きされるから嫌。」

「頭突きした方が忘れないだろ？」

お昼の時間は大体二つのグループに分かれる。

一度家に帰って家族と一緒にご飯を食べる組。

弁当を作ってきてもらって友達と一緒にご飯を食べる組。

「…さて、私も食べようかな。」

教卓の上を片づけ用意していた弁当箱をその上に置く。

「けーね先生、一緒にご飯たべよ！」

「……たべよ？」

二人の少女、正確には姉妹がそばに寄ってきた。

この寺子屋の生徒、美希と真希だ。

「もちろんそれは構わないが…。珍しいな、おまえたち二人はいつも家に帰ってご飯を食べていたはずだが？」

「今日は特別！実は先生に相談したいことがあるの！」

「…あるの。」

元気がいいのが姉の美希、いつも姉の後ろにいるのが妹の真希だ。

「相談？なんだ？…」

「明後日がお父さんの誕生日なの！」

「…誕生日なの。」

ふふっ、二人ともまるで自分の誕生日のように喜んでいるな。

「ほほう、それはめでたいな。何を贈るんだ？」

「何贈ればいいか分かんなかったからお母さんに相談した！」

「……相談した。」

「「そしたら」」

なにやら、がっかりしているが…

「…なんて言われたんだ？」

「貴方達がいっぱいいっぱい考えて、たくさんたくさん気持ちが籠
つていればお父さんなんでも喜ぶわよって言われた！」

「…言われた。」

…なるほどな。

「お母さんの言うとおりだな。」

「でね、私たちいっぱい考えた！」

「…考えた。」

「ふむ、それで？」

「…だから、たくさんたくさん気持ちが籠ったお手紙書くことに
した！」

「相談したのはけーね先生にお手紙書くの手伝って欲しいからなの
！」

「…手伝って欲しい。」

「そういうことなら大歓迎だ。さっそく今日の授業が終わった後手
伝おう。幸いにして手紙を書く道具はたくさんあるからな。」

「ホント！？ありがとう！！けーね先生。」

「……ありがとう。」

子供というのは本当に素直でかわいいな。私も欲しくなってしまうな。

……まあそんな相手はいないが。

「……よし、相談も終わったことだしご飯を食べるか！」

「「うん！」」

「それじゃ、手を合わせて……」

「「「いただきます。」」」

そして、私たちが弁当に手をつけようとした時、寺子屋の戸が勢い良く開いた。

「先生！上白沢先生はいますか！？」

戸をあけたのは先ほど話題にでてきた父親だった。

「なんだ騒々しい。また昔みたいに頭突きを喰らいたいのか？」

「そ、それはご勘弁を……。実は先生に会わせたい人がいまして。」

「会わせたい人？それは急を用するのか？見ての通り私とお前の娘たちは今食事中なんだが…」

「美希！真希！ちゃんと勉強しているか？って今はそれどころじゃない。おい、あんた入ってきてくれ。」

すると父親の後ろから見知らぬ男が現れた。

「この方があんたが会いたがっていた上白沢慧音先生だ。」

父親が勝手に紹介を始める。私はいまいち状況が呑み込めていないのだが…

男は突然私に近づき両肩を掴み、思いっきり前後に振り始めた。

「おまえが上白沢か！早く俺を元の世界に戻してくれ！！」

「ちょ、待て、なんのことだか、わけ、が分からんぞ。」

「なんでもいいから、早く！」

男はそれでも私の肩を振り続けた。

……イラッ

私は両腕で男の頭を固定し…

「いい加減に…しろ!!」

ガゴッ!

頭突きをした。

表六回目（後書き）

明治初期に黒板は全国に広がったそうで…この小説では普通に使っていることにしました。

裏六回目

門番に連れられて寺子屋に到着した。

「あんたはそこで待っていてくれ、いるとは思うが一応先生がいるか確認してくるから。」

そう言って彼は中に入っていく。

待っている間に町の様子を観察してみる。

八雲紫が言っていた通りほとんどの人が着物を着ているがそれ以外は普通だな。中には少し変わっている格好をしている者もいるが…。

（……あきらかに人間じゃないモノも歩いているな。）

おそらく、妖怪であろう。数は少ないが人間と話しているモノもいる。

（この幻想郷なら昔話に出てくるいろんな妖怪のいそうだな。）

男はこの幻想郷について少し考えを巡らせる。

八雲紫には暗に幻想郷に興味はないと言ったが、実はそんなことはない。

情報は多いに越したことはないのだから。

ただ、少し知る必要があったのだ。彼女が自分を裏切らないかを…。

結果、興味がないという反応をすると彼女はほんのわずかだが苛立ちを見せたのだ。

（ああいう性格をしているものが自分に気づかれるぐらい感情を表したんだ。）

彼女自身も言っていたがよっぽどこの幻想郷を大切にしているのだろう。

そのことを確認できただけで良しとした。

彼女は自分を裏切らない、男はそう判断した。

そんなことを考えていると寺小屋の中から声が聞こえた。

「……って今はそれどころじゃない。おい、あんた入ってきてくれ。」

呼ばれたので寺子屋の中に入るとそこにはたくさんの子供たちがご飯を食べていた。

その子供たちの訝しんでいる視線を受けながら男は門番と大人の女性、子供が二人いるところまで歩いていく。

「この方があんたが会いたがっていた上白沢慧音先生だ。」

門番から紹介された女性は、変わった帽子を被っており、薄い青みがかかった髪はストレートで、腰に届くかというところまで伸びている。顔は整っており質問すればほとんどの男女が美人と答えるだ

ろう。

「おまえが上白沢か！早く俺を元の世界に戻してくれ！！」
かなり切羽詰まっている様子で相手の肩を掴み揺さぶる。

「ちょ、待て、なんのことだか、わけ、が分からんぞ。」

（ああ、門番はまだ何も説明してなかったのか。）

「なんでもいいから、早く！」

（それでも貴方の性格を少しでも知りたいのでやめません。）

揺さぶるのをやめない所以她は男の顔を固定し：

「いい加減に…しろ！！」

ガコッ！

頭突きを喰らわした。

（っ痛うう…。なるほど、なかなか気の強い女性だことで…。あと
思っていたより石頭だったな。）

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

彼女の発した声はとてもやさしく、力強かった。

頭を固定したままこっちの瞳をしっかりと見つめ尋ねてくる。

（…多分だがいい先生なんだろうな。子供に好かれ、信頼されているわけだ。）

「…んん！！大変失礼いたしました。私は通武手つぱてと申します。貴方が上白沢慧音さんでよろしいでしょうか？」

慧音は男の豹変ぶりに呆れつつ会話を続ける。

「いまさら取り繕っても遅いと思うが…まあいい。私が上白沢慧音だがいったい何の用だ？通武手、おまえの恰好を見たところ随分焦ってここまで来たようだが…。変わった恰好もしているし、何者だ？」

（そりゃこの格好はそう見えるようにわざと汚したものだし。）

すると、今まで事態を見守っていた門番が、

「それが先生、彼はどうも『外来人』みたいで…。」

（『外来人』、外の世界から来た人間のことなんだろうな。）

「なんだと！？しかし生きているぞ。何故だ？」

（門番も驚いていたが、どうやら境界の妖怪は外の世界で死ぬのが確実な人間を連れてきているらしいな。連れてくる理由までは…推

測の域をでないが、おそらくそういうことなのだろう。」

「おそらく人面樹の森を抜けてきたんでしょうけど。詳しいことは彼に聞いてみないと。…がそろそろ私は門に戻らないといけません。あとは頼みましたよ先生。」

「いきなり連れてきて、いきなり帰るとは…理由が仕事ではなかったら頭突きをしているところだ。」

「…はは。それじゃあな、美希に真希。いい子にしてるんだぞ。」

「バイバイ『お父さん』。お仕事がんばってね」

「…がんばって。」

「門番さん、ありがとうございます。」

「お前さんが元の世界に戻れることを祈ってるよ。何か困ったことがあったら家に来い、少しは世話してやる。あと俺の名前は門番さんじゃなくて真悟だ。覚えておけ。」

そういつて真悟は寺子屋から出ていった。

「やれやれ、『昔はいつも授業中にイタズラする』悪ガキだったのに、いつの間にか大人になって…。」

慧音は一つ溜息をつく。

「おっと感傷に浸っている場合じゃないな、話を聞かせてもらえ

か？」

男はやっと自分の話を聞いてくれるようになったのが嬉しかったのか話します。

「……説明いたしましょう。私は車に轢かれ気を失いました。気がつくとも見知らぬ森にいました。右も左もわからずその森をさまよっているといきなり、しゃべる木が私の目の前に現れたのです！！しかもそいつは私を殺そうとしてきたのです。私は怖くて怖くて必死に逃げました。……だけど転んでしまい木の化け物に捕まってしまったのです。絶体絶命の私！もはやこれまでかと思われたその時！！」

ずいぶんと劇チックに男が語る。

「その時？」

突然、恍惚とした表情になり、話を続ける。

「美しい女性がどこからともなく姿を現したのです。彼女は木の化け物と何か話しているようでした。するとどうでしょう？話が終わると木の化け物は森の中に消えて行きました。そう彼女が私を助けてくれたのです！！」

まだまだ続ける。

「そして彼女は私に言ったのです。『私は妖怪の賢者。この森を抜けるには実がなっていない木に沿って進みなさい。森を出たら人里が見えます。そこに上白沢慧音という人物がいるから彼女を頼りなさい。きつと貴方を助けてくれるでしょう』と。私は女神の言葉に

従い森を抜けることができました。森を抜け少し気分が高揚した状態で門番さんに会ってしまったのです。そしてそのままこの寺子屋に……。勘違いしないでほしいのは本当の私はあんな人間ではないのです!!」

一気にしゃべり終わり男が軽く息を切らしていると……慧音がものすごくやさしい目で彼を見つめ……

「そうかそうか、怖かったな。つらかったな。いくら大人でもいきなりそんなことが起きれば戸惑うよな……」

「ちがっ! 私は!!……っ!」

男をやさしく抱きしめ、頭を撫でる。

「……大丈夫。無理しなくていいんだ。ちゃんと私がおまえを元の世界に帰してやるからな。」

慧音が初対面の男にこのような行動をしたのには理由がある。

「おまえはまるでちいさな子供だ、必死に強がって……、自分が弱いのを認めたくなくて……、だけど頼れる相手もいなくて……。」

……それは人間が好きなこと。もともと人間だった彼女にとってこれは当たり前のことだ。

「私は……。俺は……。ボクは……。」

特に子供が好きな彼女にとって、頼られるのは大歓迎なのだ。

それなのに目の前には自分を頼ろうとしない子供のような大人がいる。

八雲紫を女神とすることで信じられるものを作り、自我を保とうとする大人。

慧音から見たらそれはとてもとても脆く、今にも泣き出しそうな子供だった。

「貴方を…信じてもいいんですか？」

だから、自然と手を差し伸べてしまう。

「ああ、もちろん！」

今にも泣き出しそうな男の顔を見つめ、笑顔で返す。

男も笑顔になり慧音を見つめ返す。

「…だが、2日ほど用事があるから待ってくれないか？もちろん泊る場所は用意するし、人里は安全だから妖怪に襲われることもない。」

その言葉を聞き、再び泣きそうになる男。

「よ、用事って…？」

「それは私たちよ、泣き虫なお兄さん!!」

今まであまり話の内容がよく分からなくて黙っていた少女達だった

が、自身に関係のある話になったのでしゃべりだす。

「明後日が彼女たちの父親の誕生日なんだ。その誕生日の贈り物に手紙を送ることにしていて、私はそれを手伝うことになっているんだ。」

「そうなのよ！だからお兄さんのお願いは後！」

「…後なの。」

男は一瞬無表情になった。しかし、その場にいたものは誰も気づかず、男は笑顔を浮かべる。

「……分かったよ。僕も君たちのお父さんにはお世話になったし何か手伝えることがあるか探してみるよ。」

（……準備を終えるまでもう少しだ。）

裏六回目（後書き）

通武手：センスのなさにむしろ爆笑。
もちろん偽名です。

表七回目

Side 真希

お父さんが知らない男の人を連れてきた。

その人はなんだか難しい話をけーね先生としている。

「それは私たちよ、泣き虫なお兄さん!!」

お姉ちゃんが話に割り込んだ。

「明後日が彼女たちの父親の誕生日なんだ。その誕生日の贈り物に手紙を送ることにしていて、私はそれを手伝うことになっているんだ。」

「そうなのよ! だからお兄さんの願いは後!」

「…後なの。」

だから、知らない人としゃべるのは怖いけど私もお姉ちゃんの後が続く。

私はいつもお姉ちゃんの後ろ。そこが一番安心するから。

「……分かったよ。僕も君たちのお父さんにはお世話になったし何か手伝えることがあるか探してみるよ。」

男の人は私たちの方を見て、やさしく微笑む。よかった、なんだかいい人そう。

「さて、それじゃあ話もまとまったことだし食事を済ませてしまおう。早くしないと昼休みが終わってしまおう。」

けーね先生が私たちに言う。

「通武手、おまえはどうする？ なんだったら私の弁当を分けてやるが？」

すると、つぶてさんは横に首を振った。

「遠慮するな。幻想郷に来てから何も食べてないのだから？」

「確かにそうなんですけど、今は食欲よりも眠気の方が強くて…。」

つぶてさんは申し訳なさそうしている。

「む、そうか。だったらあそこの部屋で休むがよい。あの部屋は私がちょっとした作業をするのに使っている部屋でな。授業に使ういろいろな資料や道具、簡単な寝具が置いてあるから、使ってくれて構わないぞ。」

けーね先生はこの部屋の右奥にある戸を指さす。

「ありがとうございます。そうさせてもらいます。」

そういつて彼は部屋の中に入って行った。けーね先生は少し心配そうに彼を見ている。

…むう。

「けーね先生、はやくご飯たべよ！」

「……たべよ。」

お姉ちゃんが私の気持ちを代弁してくれる。

「おお、そうだったな。急いで食べないと。それじゃ改めて、いただきます。」

「「いただきます！」」

こうして私たちはやっとお弁当を食べ始めた。

S i d e o u t

S i d e 美希

お父さんの誕生はもう明日！！

昨日はあれから急いでおべんとーを食べて、午後の授業もちゃんと受けたわ、…ちよっと寝ちゃったけど。

そして待ちに待った放課後！

けーね先生にお父さんへのお手紙の書き方を教えてもらったわ！

「…まだ完成してないけど、明日は寺子屋はお休み。必ず今日中に書き終えてみせるわ！」

「……あー美希？ 気合いを入れるのはいいことだが、それは放課後まで取っておこうな？」

「……………あ。」

「…お姉ちゃん。」

どうやら昨日のことを思い返しているうちに私は声を出してしまっていたらしい。

まだ授業中なのに…。

まわりの友達がクスクスと笑いだす。

……は、恥ずかしい。

そんなことは少しも気に留めずけーね先生は授業を再開した。

カーン、カーン、カーン

私がそうやく悶えるのをやめた頃、定時をしらせる鐘の音が響いた。

「よし、今日の授業はここまで。各自帰る用意ができたら帰ってよし。」

先生がその言葉を言い終わらないうちにみんな帰る支度を始める。

「宿題はさつき黒板に書いたところだからな。忘れるなよ。もし、忘れたら頭突きだ。」

帰る準備ができた子供たちに注意を促している先生。

私と真希はせっせと手紙を書くための準備をする。

けーね先生はみんなが何か忘れ物をしていないか教室を見回っている。

「…どうやら忘れ物はないらしいな。美希、真希、準備はできてる

か？」

「うん！大丈夫だよ！！」

「……大丈夫。」

「それじゃ、昨日の続きから行くか。」

けーね先生が私たちの机の前に座る。

……あれ？そういえば……

「けーね先生、あの男の人、つぶてはどうしたの？」

昨日、あの部屋に入ってから一度も姿を見てないわ。

「大人を呼び捨てにするのは感心しないな。」

「……いいのよ、あんななさない顔するのは大人とは呼ばないわ。」

「やれやれ、彼のつらさはまだおまえたちには分からんか……。私が昨日お前たちの手伝いをし終わった後、様子を見に行ったら熟睡していたから、おにぎりと今日はここに泊っていいという旨を書いた手紙をおいて、私は家に帰ったぞ。」

（本当は起きていて、もとの世界に帰る方法について教えたら、少し一人になって考えたいとお願いされたからなんだが。わざわざ言う必要はないだろう。）

「それでいつも通り朝、寺子屋に行ったら『人里を見て回ってきます、夜には戻りますと』いう手紙が置いてあった。」

けーね先生はなんだかすごく不満で不安そうな顔をしている。

（私を信じると言ったのに…もっと頼ればいいのに…。…心配してしまっじゃないか。）

その表情を見て私はなんだかけーね先生がアイツに取られちゃった気がして…

「あんな情けない奴、人里を出てきつと今頃妖怪に食べられちゃてるわよ。けーね先生！そんなことより早く手紙の書き方教えて？」

ガゴッ

そんなことを言った瞬間頭突きされた。

「言っって良いことと悪いことがある。授業でも教えたよな？」

先生の笑顔が怖い…。

「う、ごめんなさい…。」

「分かればよろしい。……それじゃ手紙を書こうか！」

そういつて急に張り切りだしたけーね先生。なんでなんだろう？

まっ、いつか。お父さんへの手紙を今日中に書かないといけないし、私も頑張らなくちゃ。

私たちは手紙を書き出した。

……ここはこう書いて

……あ、字を間違えちゃった

……。

………よし。

「できたー!!」

「……できた。」

私を書き終わると同時に真希も書き終わったらしい。

「二人ともよく頑張ったな。」

そういつて先生が私たち二人の頭を撫でてくれる。

「お父さん、喜んでくれるかな？」

少し不安になって尋ねてしまう。

「もちろんだとも、私が保障しよう。」

「…そっか、えへへへ。」

「…えへへ。」

私も真希も嬉しくなってつい笑ってしまう。

「二人とも嬉しいのは分かるが、もうこんな時間だ。遅くなりすぎるとご両親が心配する。片づけは私がやっておくから早く帰りなさい。」

外を見てみるとあたりはすっかり暗くなっていた。

「うん、分かった！けーね先生、手伝ってくれて本当にありがとうございました！」

「…ありがとうございました。」

「なに、また困ったことがあったら遠慮なく言ってこい。手伝える範囲で手伝ってやる。」

「大好きだよ！先生！」

「…私も大好き。」

すると、けーね先生は少し照れくさかったのか顔を背けつつ手を振ってくれた。

「…私もだよ。気をつけてな。」

「ばいばい、先生！」

「…ばいばい。」

懷に大事な手紙をしまって、私たちは寺子屋を出た。

「お父さんには絶対に見つかっちゃだめだよ！真希！」

「…お姉ちゃんも。」

…トンッ

そんな会話を暗い道中していたせいで人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい。」

「…いや構わないよ。こっちも考え事をしていたしお互い様だ。」

ぶつかった相手は情けない男、つぶてだった。

表七回目（後書き）

幼女逃げて、超逃げて

裏七回目

日はまだ昇っておらず、人里には朝霧がかかっていた。

故に出歩く人影は少なく、里は静けさを保っている。

そんな中、男は南門の壁に寄りかかり、昨夜の慧音との会話を思い返していた。

「…博麗神社？」

「そう『博麗神社』。ここから東にある神社だ。外の世界と幻想郷の境目に存在していて、『博麗大結界』を管理している『巫女』がいる。彼女に頼めばおそらくお前を外の世界に帰してくれるだろう。」

「そこに行くには、どれくらいの時間が掛かるんですか？」

「普通に歩いていけば2日だな。急げばもう少し早くつくだろうが…。」

「2日ですか。…その巫女ってどんな人なんですか？」

「現巫女は博麗霊夢という名前だ。私も直接は会ったことはないが、話に聞く限りでは『裏表のない性格』だそうだ。」

「……すみません。少し考えたい事があるので一人にしてくれませんか？」

男は申し訳なさそうに慧音にお願いする。

「それは構わないが、あまり考えすぎるなよ。明日、美希と真希の手伝いが終わって、その次の日に私がおまえを博麗神社に連れて行ってやるから。きつとすぐに外の世界に帰れるさ。」

「ありがとうございます。今日はここに泊っても大丈夫なんですか？」

「部屋を荒さなければな。…もし散らかしたら、分かるだろう？」

慧音は自身の額を指さして笑う。

「…来た時よりも美しくしときます。」

「いい心がけだ。…それじゃあ私は家に帰るからな。私の家は寺子屋のすぐ裏だ。何かあったら遠慮なく訪ねて来い。……っと思うだ、食欲があるならこれを食べ。」

彼女は何か葉でつまれたものを男に渡そうとする。

「……これは？」

明らかに手のひらサイズはあろうかいという丸い物体に少々戸惑う男。

「おにぎりだ！少々不格好だがなかなかおいしいと自負している。」

彼は少し驚いた様子だったが片膝をつき、それを仰々しく受け取った。

「…有り難く頂戴致します。こんな美人の手料理が食べられるなんて、この世界も捨てたものじゃないですね。」

彼の言葉に少々呆れた慧音だったが同時に安心もしたようだった。

「…軽口を叩く元気がでてきたならもう大丈夫だな、おやすみ」

そう言って慧音は寺子屋から出ていった。

「ええ、おやすみなさい。」

彼女が出ていくのを確認すると男は葉に包まれたおにぎりには手をつけずに『仕舞った』。

（これで選択肢が増えたわけだが…）

1つはこのまま八雲紫の提案に乗り、子供を人里から攫う。

2つ目は一人で博麗神社まで行き、元の世界に戻してもらうように頼む。

最後は上白沢と一緒に博麗神社まで行き、彼女に事の成り行きをまかせる。

どの選択肢にもメリット、デメリットが存在しているな…。

最初の選択肢、メリットはもちろん、成功すれば確実に元の世界に帰ることができる。デメリットは子供を攫うという危険を冒さなければならぬということ。

二つ目の選択肢、メリットは子供を攫わなくていいということ。しかし、デメリットが大きい。まず、一人で博麗神社に着くことができるかどうか。そして、仮に着くことができたとしても元の世界に帰れる保証は無い。日数の関係上、八雲紫にはバレずに神社に着くことができるが…。

最後の選択肢、子供を攫わなくていいし、おそらく上白沢についていけば安全に博麗神社に着けるだろうし、元の世界へ帰れるように協力してくれるだろう。だがデメリットの方が問題だ、この選択肢は八雲紫に確実にバレてしまう。…がそれは大したデメリットじゃない、一番の問題は…。

男がそんなことを考えていると門の方が騒がしくなってきた。

「夜勤お疲れ様、交代の時間だ。」

「ふーやっとか、久しぶりに入ったが眠くてたまらん。」

「ははは、そう言うな。みんな経験してることだ。」

どうやら門番が交代の時刻になったらしい。

男は身に着けている腕時計を見る。

（午前8時ちょい過ぎ…8時が交代の時間とみていいな。…知りた
い事も知ることができたし人里を見て回るか。）

そして彼は門番に気づかれないように立ち去った。

（日も完全に昇って、人里にも活気が出てきたな。）

男が里を回り始めて、5時間が経とうとしていた。

その成果は、おおよその幻想郷の地形…

魔法の森、妖怪の山、迷いの竹林、太陽の畑、そして香霖堂

これらの場所とそれらを人里の人間がどのように認識しているか、

だった。

（帰るのに役に立ちそうな情報はなかったな。）

（……………。）

彼は疲れたのかどこか休める場所を探して、人通りの少ない道を進んでいく。

角を曲がり、完全に人気『ひとけは』ない場所で立ち止まり、振り返る。

「確か、約束のデートは明日のはずでしたが？」

裏七回目（後書き）

慧音が霊夢と会っていないのはまだ永夜抄が起きてないからです。

表八回目

Side 八雲 紫

「確か、約束のデートは明日のはずでしたが？（訳…なんの用だよ）」

「つれないわねえ。そんな部活のOB、しかも3個上の人が現れたような表情をしなくてもいいじゃない。」

「用があるから現れたんですよ？（訳…さっさと用をすませろ）」
せっかちな人ね。まあわざとなんでしようけど。

「貴方にいくつか注意しておこうと思って。」

「博麗神社のことですか？（訳…あの先生に関わらせた時点気付いてただろ？別の帰る方法を提示してあんたどうしたいんだ？）」

「それは別にいいわ。（別にどうもしないわ。貴方は博麗神社には行く選択はしないもの。）」

…私のこの言葉にどう反応してくれるのかしら？

「……………何故ですか？（訳…どうして、その選択はしないと？）」

ふふ、少しはいい表情するじゃない、そっちの方が素敵よ。

……本当は貴方の考えることが読めなかったけど、今の発言で博麗神社に行かない確信が持てたわ。

ついでに……いやこっち方が本命かしら？

見えたわよ、貴方の人間性がね♪

「それはね。貴方が良くも悪くも利己的で、普通、人が持っている人間味を持っていないって、『さっき』分かったからよ。」

「……ああ、なるほど。あの言葉はカマをかけたわけですか。それじゃ、参考までにそのワケを教えてくださいますか？」

そう言って彼は目をつむり私の話に耳を傾ける。

「そうねえ、まず一人で博麗神社に行く選択肢はないわ。」

「どうしてですか？」

「貴方が一番優先しているのは外の世界に帰れること、その次にある程度の安全。だから、両方不確定なこの選択肢は一番に除外されるわ。」

「…確かに僕は一番初めにその選択肢を除外しました。」

「次に上白沢慧音と一緒に博麗神社に行くという選択肢ね。」

「これには安全性もあって、元も世界に帰れる確率も高いですよ？」

「そうかしら。その選択は2つの不安要素を持っているわよ。」

「一つは私との約束を破ってしまうこと。まあ、貴方はこの選択をする場合気にしないでしようけど。なぜなら…」

彼が私の会話を割り込む。

「もう一つの不安要素、それによって八雲さんの目的は達成されま
すからね。…ホントいい性格してますよ。」

私の目的、『理由』を作ること。そして…

「もう一つの不安要素、それは…。」

「『人面樹』」

彼と私の口から同じ音が発せられる。

「もし、僕が約束の日なくても子供を連れてこなかったら、まず間違
いなくあの妖怪は人里を襲いにくるでしょうね。直接会話をし
てそう感じましたね。」

億劫そうに彼は説明を続ける。

「八雲さんにとっては『理由』ができるから、問題はないんでしょ
うけど…。」

「貴方にとっては問題しかないわね。人里が襲われたら、貴方自身
に危険が及ぶし、上白沢慧音は貴方を博霊神社連れていくどころじ
やなくなるもの。さらにあの妖怪が貴方との取引を里の人間にばら
す可能性も高いね。」

「そうなたら僕は人里を追い出されるでしょうね。博霊神社にも
一人で行くことになる。…いや下手したら妖怪に突き出されるかも
知れないな。」

はあー、と一つため息をついて彼は肩をすくめる。

「どうやら、八雲さんは僕が思っていたより賢く、自分が思ってい
たより僕自身は馬鹿らしい。…だから貴方は博霊神社の情報につい
て、特に知られないようにする必要はなかったんですね。」

妖怪の賢者という二つ名に恥じないですね、と男は付け加える。

「それで、どうして人間味が無いなんて言うんですか？そんなこと
言うと泣いちゃいますよ？」

…目に涙を浮かべて今にも泣きだしそうだわ。彼のことをよく知ら
ないならまず騙されるわね。

「私は今まで幾人もの人間を外の世界から連れてきたわ。その中で
この幻想郷の人里に己の知恵、行動、判断で生きたまま辿り着くこ
とができたのはこの数百年で貴方だけよ。（訳…普通の人間は妖怪

に出会って何もできずに殺されてるわ。」

「ただ死ぬのが怖くて必死になってただけですよ。（訳…それは生物として当たり前のことと運が良かっただけ。）」

「…それだけじゃないわ。安全な人里に着いて、別の帰れる方法があるのに、それに飛びつかず冷静にそのメリット、デメリットを考えて行動したわね。（訳…命の安全が分かれば気を抜くのが普通の生物よ。そして深く考えず安易な選択をしてしまうのが平凡な人間。）」

私はまだ話を続ける。

「さらに言えば、子供を攫わないという選択肢も一見するとあったのにそれを選択せず、攫うことになんの戸惑いも躊躇いもない。これで人間味があるというほうが可笑しいわ。」

あら、また無表情になったわ。…その表情がさまになっているのはそうやって外の世界で生きてきたからかしら？

「一言、負け犬の遠吠えをさせてもらうならば…貴方ほど胡散臭い女性には会ったことはない。（確かに人間味はないみたいだが、あんたも人のこと言えないだろ。）」

「ひどいわ、私ほど素直な女性はいないというのに…おおよ。」

袖を使って涙を拭う振りをする。

「で、だいぶ話が逸れましたが八雲さんが最初に言っていた注意しておくことって何ですか？」

「貴方が人間味のないヒトって分かったから、ほとんど意味はなくなったけど一応しておくわ。」

「つまり、人面樹が子供たちに何をしてもし殺そうとする以外、八雲さんは何もしない。だから、僕自身が殺されようとしている、若しくは何か酷いことをされている少女たちを助けたいのなら、自力でなんとかしろってことですね。」

……………。

「…前もそうだったけれど、理解が早いわね。とても助かるのだけど…何かしら、若干いらっとするわね。」

「言いたいことは言わないと、イライラするのはお肌に悪いですよ。まあ同じことを二度も聞く気は僕にはないですけど。」

「あら、じゃあ最後に一つだけ聞かせてもらおうわ。」

「好きな女性のタイプは胡散臭くない人ですよ？」

「……私が話しかける前に『どうやって』私の存在に気付いたの？」

すると彼は少し考える様子を見せ、右手の人差し指を顎に置き答えた。

「ひ・み・つ♪」

……お肌が悪くなりそうだわ。

裏八回目

八雲紫にちょっとした仕返しをしてから、かなりの時間が経過した。

人里はすっかり闇に包まれ、人気『も』なくなった。

そんな中、男は寺子屋の少し離れたところから少女たちが出てくるのを待っている。

（…確か明日が父親の誕生日で、そのために手紙を書いてるんだっ
たな。）

もう暫くして、嬉しそうな顔をした美希と真希が寺子屋から出てきた。

二人は何かしゃべりながら家に帰っていく。男がいることには気づいていないようだった。

目的の二人の様子を見て彼は予定していた行動を始めた。

…トンッ

「あ、ごめんなさい。」

美希がぶつかった相手に申し訳なさそうに謝る。

「…いや構わないよ。こっちも考え事をしていたしお互い様だ。」

美希と男の目が合う。すると、美希はぶつかった相手が誰か分かり態度を一変させる。

「なんだあんただったの、謝って損したわ。」

彼女のそんな態度に別段気を悪くした様子もなく男は質問する。

「こんな時間まで寺子屋にいたのか。お父さんへの手紙は書き終わったのかい？」

姉は胸を張り答える。

「あつたりまえよ!!」

妹は小さく頷く。

「……書けたよ。」

それを聞いて男は優しく微笑んだ後、少し困った様子を見せる。

「それは良かった。…僕も世話になった君たちのお父さんに何か送りたいんだが、あいにくこんなものしか持っていないんだ。」

そう言って彼はいつのまにか手に持っていた梨を彼女らに見せた。

「…これ！？赤くない林檎じゃない！！何処でこんな貴重なもの持ってるのよ！」

「……赤くない林檎だ。」

少女たちはかなり驚いている。

「これはそんなに珍しいものなのかい？人里に来る途中の森で手に入れたんだが。」

「あんた、人面樹の森を通って来たの？よく生きてここまで来れたわね。」

「…人面樹の森、危ないよ。」

「…その森で一晩過ごしたけど危険なことはなかったよ？」

彼はなんでもないことのように答え、その言葉を聞いて美希は何か考え込んでいる。

「…ねえ、あんた、まngoって果物知ってる？」

「マンゴーね。それも人面樹の森？だっけ、そこで見かけたよ。それがどうかしたのかい？」

「お父さん、それを食べたがってた。でも、なかなか手に入らないから残念そうだった。」

「それはいいことを聞いた！さっそく明日の朝、それを取ってきて君のお父さんに贈ろう。きっと喜んでくれるはずだ。」

男は満面の笑みを浮かべ、美希に情報を教えてくれた礼を述べる。

「さすがに贈り物が手紙『だけ』だったら、物足りなかっただろうしね。教えてくれてありがとう。」

「な！？そんなことないわよ！お父さんは手紙でも喜んでくれるもん！！」

「…喜んでくれる！」

彼女たちは反論する。

「確かに手紙『も』喜んでくれると思うよ？…だけどマンゴーを贈れば『もっと』喜んでくれるだろうね。」

男は『もっと』の部分強調して言った。

「それは…そうだろうけど…。」

「君たちも、一緒に来るかい？」

やさしく、甘く、落ち着きのある声で囁く。

「…人面樹の森には勝手に行っちゃいけないことになってるの。」

「大丈夫、お兄さんにいい考えがあるんだ。それを使えば誰にも気づかれずに里をでて、森に行くことができるよ。」

（無事に帰れる保証はしないけど…。）

「…………でも。」

「お父さんも娘の君たちが、自分のためにすることなんだからきつと許してくれるよ。むしろ褒めてくれるんじゃないかな。」

その言葉が決定的となり美希はその提案に乗る。

「…分かったわ、私も一緒に行く。」

「…お姉ちゃん!？」

真希は驚く。姉はお転婆で怒られることもあったが、それは故意じ

やなかったし悪気もなかった。なのに今、悪いことと自覚して行動しようとしている。

「真希ちゃん是一緒に来ないのかな？」

「…わ、私は…。」

彼女は戸惑う、姉の変化に、果たしていつも通りについて行っているのか…。

「…真希ちゃんはお姉ちゃんのこと『頼りにならない』と思っているのかな？ だったらしょうがないね、僕たち二人だけで果物を取ってくるよ。残念だけどその場合、果物を贈れるのも『僕たちだけ』になっちゃうけど仕方ないね。」

さっきまでとは違って彼の言葉にどこか冷たさが混じる。

「…お姉ちゃん頼りにならないかな？ 真希…。」

いつも自分に付いてくる妹が渋っている。そのことが姉を不安にさせ、美希は男の言葉を真に受けてしまう。

妹は姉の不安な表情を見て、焦る。大好きな姉にそんな風に思われたくない、思ってたほしくない。そして、もし一緒に行かなかった時、自分一人だけのけものされて、贈り物をできない姿を想像してしまう。

「…行く。…私も一緒に連れて行って。」

だから、この選択はある意味当然と言える。

「二人とも家族思いだね。…それじゃ明日の辰の刻（午前8時）に、南門の少し手前にある井戸に集合してくれるかな？」

「辰の刻に南門の井戸に集合…、分かったわ。」

真希も首を縦に振る。

「くれぐれもお父さん、お母さんに見つからないようにね。」

それじゃ、また明日。男はそう言って手を振りながら寺子屋に帰って行った。

「お姉ちゃん、ホントに大丈夫なの？」

「大丈夫よ、あんな情けない奴でも大丈夫だったんだもの。」

姉妹は明日のことに一抹の不安を覚えながらも、家路に着いた。

寺子屋に帰ると部屋の真ん中に、正座をして待っている上白沢慧音がいた。

表？ 回目

Side 上白沢 慧音

……寺子屋の戸が開き通武手こぶてが帰ってきた。

「おかえり……。」

私は今どんな表情をしているのだろうか……。

「た、ただ今戻りました。」

彼が無事に帰ってきてくれたことによる安堵の表情か……

「飯はどうする？」

頼られなかった自分の不甲斐なさに対する怒りの表情か……

「えっと、もう外で済ませてきました。」

「……済ませた？ おまえ、幻想郷のお金を持っていたのか？」

今日は一緒に私の家で食べようと思っていたのだが……

「いえ、持ってませんけど。人里を回っている途中偶然、門番の真悟に会って、そばを奢ってもらいました。」

通武手は嬉しそうな表情をしている。

真悟、ね。随分仲良くなったみたいだな。

「…そうか、良かったな、真悟『は』頼れる人で。（訳…私はどうやら頼るに値しないらしい。）」

自分でも分かるくらい言葉に棘を感じる。

「ど、どうしたんですか上白沢さん？ なんだか怒っているような…。」

私の様子がおかしいと彼も感じたのだろう。

「別に怒ってなどいない。」

心配そうにこちらを見ている。

「…そうですか。あ、それでそばを食べたあとなんですけど、『真悟』に色々案内してもらったんです。とても楽しかったですよ。『上白沢さん』も言いましたけど、あの人は『とっても頼りがいがある』って『いい人ですよ。ね。』」

おそらく話題を何か振ろうとしたのだろうが、今の私にとってそれは火に油を注ぐようなものだった。

「…そんなに、…そんなにアイツがいいなら…。」

自然と声が震える。

「か、上白沢さん？」

…どうしてアイツのことは名前で呼んで、私のことは慧音と呼ばないのか。

「博麗神社には真悟に連れて行ってもらえ！！そっちの方がおまえも良いんだろ！？」

こんなに大きな声を出したのは妹紅を本気で叱って以来だ…。

これじゃ、どっちが大人か子供か分かったものじゃない…。

「…何か嫌なことでもあったんですか？」

優しく彼は問いかける。

分かってる、分かってるんだ。これは自分自身の未熟さのせいだっ
てことぐらい。だから、そんな目で私を見るな…。自責の念で押し
潰されてしまう…。

「体調が良くないなら、家に帰ってゆっくり休んでください。…博
麗神社の件は明日のお昼以降にでもゆっくり決めましょう。」

そう言って彼は私に手を伸ばし、起き上がらせようとする。

……バシッ

なのに、私はその手を払いのけてしまった。

「…あ。ち、違うんだ、今は、その…。」

「大丈夫ですよ、僕がいけないんです。ちょっと馴れ馴れしかったですね。」

つぶては少し悲しそうな顔で、私が払いのけてしまった手を後ろに回した。

「「……。」」

互いに気まずくなり、この場の空気が重くなる。

「あーっと、それじゃ申し訳ないですが今日も僕は奥の部屋で休ませてもらいますね。」

おやすみなさい、そう言って彼は奥へと歩いて行った。

そして、私は一人ポツンと取り残されてしまう。

「何をやっているんだ、私は…。」

勝手に嫉妬して、勝手に傷つき傷つけた。

…だけど、このままじゃいけない。

……よし、落ち込むのはここまでだ。

「明日、ちゃんと謝ろう。博麗神社にも私が連れていく、そして必ずアイツを元の世界に帰らせてやる。」

私は立ち上がり、奥の部屋の戸を一瞥して決意を固め、自分の家へと戻って行った。

翌日、私はまた寺子屋で手紙を見つけた。

『上白沢さんへ 短い間でしたがお世話になりました。あれから自分で考えて、やっぱり先生には迷惑をかけられないと感じました。博麗神社には一人で行くことにします。幻想郷では貴重なものと聞き、喜んでもらえればと思います。これを置いて行きます。お礼とお詫びになることを……。 つぶて』

その手紙の上には梨の花と実がひとつ置いてあった。

表？回目（後書き）

梨の礫^{りゅう}…まるつきり音沙汰のないこと

つまり、まあこれ以降連絡が取れないことを主人公は暗喩している。

…ごめんなしい、これが作者の伏線の限界

ちなみに梨の花言葉は「博愛」「愛情」

自分的には慧音に合っているんじゃないかと。

裏？ 回目

辰の刻（午前8時） 南門

男は少女たちが来るのを待っていた。

（…さすがに3日間何も飲まず食べずは少しきついものがあるな。）

軽いめまいを振り払うために頭を左右に振る。

彼が昨日、慧音と微妙な関係になったのもわざとだった。門番などに会ってなどいないし、そばも食べていない。

その理由が一人で博麗神社に行くふりをするため、これで彼女は男を追ってきたとしてもそれはこの南門ではなく東門に向かうからだ。

そして、彼はできるだけ幻想郷の食べ物をお口にしたいなかった。

（…どんな影響が出るかわからないからな。それにしても、朝からご苦労なことです。）

彼は妖怪の賢者がいるのを『感じて』いる。

（…ちょっと面倒になったが、まあバレないだろう。）

「…私たちより早く来るなんてなかなかいい心がけじゃない。おはよう。」

「…おはようございます。」

いつの間にか、少女たちが男の目の前に来ていた。

「おはよう、ちょうどいい時間に来てくれたね。」

互いに朝の挨拶かわしていると門番の交代の時間になったようだった。

「夜勤おつかれさま。交代の時間だ、もう帰っていいぞ。」

「お疲れ様です。それじゃ自分は帰らせていただきます。」

交代が終わり、もう一人の門番が帰っていく。

男はそれを確認すると少女たちにお願する。

「美希ちゃんに真希ちゃん、あの今、門を守っている人に話しかけてくれないかな？」

「な!?! そんなことしたら、すぐに家に帰らされるわ!?!」

「……帰らないといけなくなる。」

「大丈夫。その辺はちゃんと考えているから。」

その言葉に彼女たちは渋々門番に話しかけに行く。

「××さん、おはようございます。」

「…おはようございます。」

話しかけられた門番は驚いた様子だった。

「あれ？真悟さんとかの娘さんたちじゃないか。どうしたんだい、こんな朝早くに？今日は真悟さんの誕生日だからお仕事は休みののは知ってるだろうし…。」

「それは、えっと…、ちょっと用事があつて…。」

「用事？いったい何か…ん？」

門番が美希に事情を聞こうとすると誰かが自分の左肩を叩くのを感じ、振り向く。

彼が意識を保っていたのはそこまでだった。

男は門番が振りむくのに合わせて顎の先端に右ストレートをいれた

からだ。

彼の脳はまるでピンボールのように揺れ、振動衝突を繰り返し典型的な脳震盪の状態を作りだした。

さらに、通武手は彼が足から崩れたのでその落ちる重力を利用し左アッパーを下顎へ…。

すでに意識は分断されていた、だがダメ押しのアッパーによって彼はさらに遠い世界へと旅立った。

この間、1秒にも満たない。

人影の少ない朝の人里、この光景を見られることはなかった。

「…つと。こんなもんかな？」

少女たちが茫然としている間に男は門番を門に立つように固定させる。

特に話しかけなければ、彼が気絶していることに気づくのは難しいだろう。

「あ、あんた何してるのよ!？」

美希は硬直から復活して、詰問する。

「何って? 見ての通りだけど…。ああ君達が話しかけたことなら門

番は覚えていないと思うよ。それぐらい良い感じに入っただから。」

「…そういう問題じゃなくて。」

「……？それよりも、早く森に向かおう。四半刻（30分）もすれば着くからね。」

（…なんだか少し不気味だわ。）

ここで美希は初めて疑問を感じた。果たして、この男を信用してもいいのだろうか？と。

…だが、もう遅い。

彼らは人面樹の森へと向かい始めた。

裏？回目（後書き）

まあ、バキですね。∴というかチルノ出したかったorz

表十回目

Side 真希

里を出発してだいたい半刻（1時間）経ったと思う。

私たちは今、お兄さんと一緒に人面樹の森を歩いている。

森はとても静かで、小鳥の囀り（さえずり）さえ聞こえてこない。

まるで生き物が私たち以外いないようだった。

ザッ：ザッ：

唯一聞こえてくるのは私達の足音だけ。

太陽の光も大部分が木の葉に遮られていて、辺りは朝とは思えないほど薄暗い。

「ねえ、まだ着かないの？」

お姉ちゃんがつぶてさんに尋ねる。

「うーん確かここら辺だったと思うんだけど…。」

そう言って茂みの奥にどんどん進んでいくお兄さん、私は着いて行くので精一杯だ。

「……お！？ あったあった。美希ちゃんに真希ちゃん早くこっちに
おいで。」

彼はおいでおいでと手を振っている。

「つたく、ホントに見つけたんでしょうね…。」

お姉ちゃんはそちらに歩き始め、私も後に続く。

うつそうとした草木を抜けると、少し開けた場所に出た。

そこにはお兄さん、お姉さん、そして……

「ようこそ、お嬢さん方、我が森へ。」

人面樹がいた。

「惨たらしく殺される覚悟はできておるかの？」

「え？…ど、どうして？」

お姉ちゃんは驚いている。もちろん、私もだ。

「…ひ、人里の人間は襲っちゃいけないのよ！」

泣きそうになりながらお姉ちゃんは反論する。

「それは人里の中での話、規則を守れぬ人間には関係のないことよ。」

こ、怖いよ…

「ちゃんと決めておったじゃろう？この森に入っているいい日を…。主らはそれを破った。」

「それはコイツが大丈夫だって言うから！？」

「おお、そうじゃった。おぬしもご苦労じゃったな。よく人里から子供を二人、それもおなごを連れてきてくれたな。」

人面樹は明らかにお兄さんのほうに向かってその言葉を吐く。そし

て私達は詰問する。

「どういうことなの!？」

「…どういことですか？」

すると、お兄さんはひどく狼狽し始めた。

「そ、それは…。」

「こやつはのワシと取引しておったのじゃ。自分と大切な者の命とを引き換えに人里から子供を攫ってくるという取引をな。」

「や、やめろ…言うんじゃない…。」

ショックだった…。まさかお兄さんがそんなことをしてたなんて…。

「…優しい人だと思っていたのに。」

「…最低ね。」

私達の言葉に肩を震わし始めたお兄さん。

「……………るさい。…うるさい。うるさい!うるさい!うるさいんだよ!お前らに俺の気持ちの何が分かるっていうんだ!」

「…ひっ。」

「な、何よ!?!」

突然の大きな声に委縮してしまう私達。

「おい、人面樹!早くこのガキどもを殺してしまえよ!?!」

そして彼女を返してくれ…

小さく呟いたお兄さんの顔はすごく辛そうだった。

「そうじゃのう、じゃが一体『どれ』から手をつけたものか…」
こちらを見て厭らしく笑っている。

「…よし、決めた。まずはこやつから殺すかの。」

そう言って、人面樹は蔓を操って、何か小さな箱を取り出した。

「おい!?!ちょっと待て!約束が違うじゃないか!?!」

「約束?そんなものは破るためにあるに決まっておろう。なあに、

おぬしは世話になったからな一番最後に殺してやる。その方が絶望を感じることが出来るじゃろ？」

「そ、そんな…。それじゃいったい何のために僕は…」

お兄さんは膝をつき、項垂れる。

「…真希、アイツらの注意がそれている今のうちに逃げるわよ。」

お姉ちゃんがいつの間にか私の隣の来ていて、小声で提案する。

「…お姉ちゃん。…分かった、それじゃ。1、2の3で逃げよう。」

私も小声で返す。

「1。」

人面樹はまだこちらに気づいていない。

「2の。」

下半身に力を入れ、『地面を蹴る』準備をする。

「「3……!?!」」

私達が地面を蹴った瞬間、天地が逆転した。

「おやおや、逃げようとするなんて困ったお嬢さん達じゃ。」

「な!?! そんな... いったいなんで...。」

「...気づいてなかったはずなのに。」

蔓で空中にぶら下げられてしまった私達。

「さあてなんじやろうなあ? ...それよりも、困った子にはお仕置きが必要じゃのう。」

「!?!? ...この、下ろしなさいよ!!!」

お姉ちゃんが暴れている。私もなんとかして蔓を外そうと必死だ。

その拍子に...

.....ポトツ

お父さんへの大事な手紙が懷から落ちてしまった。

裏十回目

Side 人面樹

「そ、そんな…。それじゃいったい何のために僕は…」

くく、その絶望した顔が見たかったのじゃ。

大切な者は返ってこず、人としても地に落ちた。

これを絶望と言わず何と呼ぶ？

…おや？ おやおやおや？

どうやら気づかぬうちに獲物が逃げだそうとしておるの。

しかし、ワシの森で地に足が着いている限りそれは不可能。森全体に張ってある根がそれを許さない。

おなごたちが地面に力を入れ蹴った瞬間、蔓で空中に吊り下げる。

「おやおや、逃げようとするなんて困ったお嬢さん達じゃ。」

「な！？ そんな… いったいなんで…。」

「…気づいてなかったはずなのに。」

「さあてなんじやろうなあ？…それよりも、困った子にはお仕置きが必要じゃのう。」

「!?!?…この、下ろしなさいよ!!」

暴れても無駄じゃ、それはそう簡単には切れぬ。まして子供なら尚更じの。

…ポトツ

それでも抵抗をやめぬ二人の懷から何かが落ちた。

「あ!?!」

「…あ。」

ワシはそれをツタで拾った。

「これは一体何かの？」

「返してよ!それはお父さんへの大事な手紙なの!勝手に触らないで!」

「……返して。」

……ふむ。

「お主ら、今の状況を分かっておるかの?ワシは今からお主らを殺

そうとしておる。手紙など気にしている場合じゃないかの？」

「うるさいわね！ 私達はあんたなんかに殺されるつもりはないわ！」

「…お家に帰る。」

声が若干震えておる。

「気の強い娘たちじゃの。気に入った！ 機会をくれたやろう。」

「…機会？」

「そう、お家に帰れる機会じゃ。…なあに簡単なことをすればいいのじゃ。」

「…何をすればいいの？」

「互いに殺し合え。生き残った方を里に帰してやる。手紙も返してやるぞ。」

そう言って、地面に下ろしてやる。

「な!?! そんなことできるわけないでしょ!?!」

「…絶対にしない。」

頭に血が上っていたのか少々足元が覚束おぼつかないがはっきりと拒絶する彼女ら。

まあ、当然の反応じゃな。……だが

「しないなら、今すぐワシがお主らを殺すだけじゃ。…そう考えると一人帰してやるワシって優しいの。」

「「……。」」

おなごたちは顔を見合わせる。……せいぜいじっくり考えるがよい。

「手紙は2つとも返してやろう。それが父親への最後の言葉…泣けてくるの。」

人面樹の言葉が聞こえているのかいないのか、少女らはしばらく無言だった。

「真希…。」

「お姉ちゃん…。」

彼女らは何かを決心したようで人面樹の方を見る。

「どうやら覚悟はできたようじゃな。それじゃあ、これを使って殺し合うのじゃ。」

ワシは能力で3尺（1m弱）の木の杭を2本生成し、おなごたちの前の突き立てる。

しかし、少女たちはその場から動こうとしない。

「…どうした？早くそれを手に取るのじゃ。そうしないと殺し合えないじゃろ？」

「「……しない。」」

「…？何か言ったかの？」

「「私達は殺し合ったりしない!!」」

力強く少女たちは答える。

「……………本当にそれで良いのか？このままじゃ二人ともワシに殺さ

れるだけじゃぞ？」

「それでも！私達はあなたの言うことなんて聞かない！！」

その声に震えはもうない。

……その目、つまらんのう。

「…そうか、なら仕方ないの。」

…ワシはもっと楽しみたいのじゃ。

「その男にお主らを殺してもらおうか。」

…そのためには何でも利用するぞ？

「……………」

男は無表情で人面樹を見ている。

人面樹はそれを絶望のあまり何も感じなくなったと判断した。

「どうしたのじゃ？殺さぬなら殺してしまうぞ？」

そう言って、人質である『モノ』を男の目の前にぶら下げる。

「惨たらしく殺してくれたら、今度こそお主らを助けよう。約束じや。」

「……………」

その言葉を聞いて男は少女たちの方にゆっくり歩いて行く。

「…な、何よ！あんたなんか怖くないんだから！！」

「……………」

「…お、お兄さん？」

「…。」

男は無言のまま彼女らの前に刺さっている杭を1本引き抜く。

「ふふふ、なかなか素直じゃな。せいぜいワシを満足させてくれ。」

とうとう美希と真希の所に辿りつく。

「おぬしはどっちから殺すのじゃ？姉か妹か？どっちじゃ？」

おお、杭を振りかぶって……

……地面に突き刺した？

次の瞬間、人面樹は四方を『木々』に囲まれ、視界を塞がれた。

表十一回目

人間も妖怪も思い通りに動かすのは難しい…。

男はそんなことを考えながら少女たちに近づく。

（せっかく、彼女らを殺そうとする状況に誘導したのに…。）

はぁ…と内心溜息を吐きながら、刺さっている杭を引き抜いた。

（別に人面樹自体はどうとでもなるんだが…。…問題は姿を現していないがこちらを観察している八雲紫。）

確実にアレ（人面樹）を殺すことができる場面を窺^{うかが}っているのと、こっちがどう行動するかを楽しんでいるんだろうな…。

確かにその状況を作ることができる。…だが後で確実に『面倒なこと』になる。

男は考える。なんとかして『妖怪の賢者』に『バレず』に済む方法を…。

（……………ダメだ、腹が減って頭が回らない。）

……仕方ない、か。

手に持っている杭の『感触』を確かめ、振りかぶり…

…ザクッ！！

地面に突き刺し、『能力』を発動させる。

人面樹の周りに木々を『生やし』、視界を塞ぐ。さらにツタを『操り』少しの間だけが相手の動きを封じる。

「なに！？これはワシの！！」

男はそんな言葉は気にも留めず少女たちの額に手を触れ、意識と無意識の『境界を操り』気を失わせる。

そして、彼女らを両脇に抱え、その場を離れる。

もちろんこのままでは人面樹には彼らの居場所が知られたままだ。

そうならないために、彼は先ほど生やした木々の『根』を半径数百メートルに張り巡らせ『動かす』。

（これで八雲紫を動かすための第一段階が終わった。…けど、彼女にはどんな『能力』かだいたい知られてしまっただろうな。）

『植物を操り』

『境界を操った』

そう、彼が使った能力それは……

『あらゆる能力を模倣^{マネ}する程度^{程度}の能力^{能力}』

表十一回目（後書き）

改行でごまかせないほど短い…。連投しますかね。
能力について詳しい事は次話で明かします。

裏十二回目（前書き）

今日2話目の投稿です。読む順番にご注意を。少し修正。

裏十一回目

男が『違和感』を感じたのは人面樹に襲われた時。

『違和感』は林檎を一口齧ったら『疑問』に変わった。

その『疑問』は八雲紫と話して『確信』となり：

人面樹の森で一夜を明かし人里に向かう途中、『確信』の『核心』が彼の頭の中に浮かび上がった。

『あらゆる能力を模倣する程度の能力』

さらにその能力を使う条件が入ってくる。

？ 相手の能力の『名前』を知らなければ使えない。

？ ？を満たしたうえで、自身がその能力を『五感』等（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、e t c…）で感じなければならない。その機会が多ければ多いほど能力は使えるようになる。但し、最大で相手の限界の6割となる。

？ 相手の『許可』をもらえれば限界値は8割となる。

？ 能力は『同時』に3つまでしか使うことはできない。

？ 相手を自身の手で『殺した』場合限界値はなくなり、同等もしくはそれ以上の能力を発揮できる。

(……俺にはお似合いの能力かもな。)

男は試しに八雲紫が使っていた『境界を操る程度の能力』で空間を裂こうとする。

空間は見事に裂け、彼女がしていたようにそれで移動しようとする。

……が右手は弾かれ持っていた梨だけが空間に呑み込まれてしまった。

(さすがに『視覚』だけじゃ使えないか……。幻想郷に気絶させられて、連れてこられたのは痛かったな。……『物』は自由に出入り

させることはできるみたいだな。」

何度か梨を空間に出入りさせ確認する。

（あと確認したいのは人面樹の『あらゆる植物を操る程度の能力』がどれくらい使えるかだが、この森で使ったらバレルから無理だな。視覚、味覚、触覚で感じているからかなり使えるとは思うが……。）

ここでできることはもう無い、そう判断して男は再び人里に向けて歩き出した。

彼は人里に着くとさらに、相手が能力を使っていると自分もそれに気づくことができると、八雲紫が現れたことで分かった。

また、慧音に梨の花を生成し贈ることで人面樹の能力も使えることを確認した。

人里から人面樹の森に出発する時、門番の意識と無意識の境界を操ることにより能力で自分がされたことならそれが能力の中でも難しい事でも、ある程度簡単にできることも試した。

そして、現在…

「なんじゃ、抵抗せぬのか？殺してしまうぞ？」

男は四肢を拘束され、杭を突き付けられていた。

裏十一回目（後書き）

視覚と触覚が襲われた時、味覚が林檎を食べた時。意識と無意識は最初、外の世界から連れてこられた時。

表十二回目

Side 人面樹

…能力持ちか、やってくれたの。

人面樹は自分を拘束しているを引き千切る。

どうやら、ワシと同じような能力みたいじゃが、その『質』はワシの方が上じやの。

「この森でワシから逃げられると思うてか？…森に張ってある根を感知すれば……」

……なんじゃこれは？何故こんなに動くものがある？

森には男が張り巡らした根が動いていた。

人面樹は少しの間混乱してしまい、目の前に生えてきた木々が原因だということに気づいたのはしばらく時間が経った後だった。

「……っち。これが原因か!？」

人面樹の能力で彼が生やした木々は一瞬く間に枯れ木になり根は動かなくなった。

何も動くものはないの…。

……じゃがどんなに急いだとしても森をでるまでには至っていまい。

「いつまで動かないで耐えることができるかの？せいぜい追われる恐怖に怯え、ワシから逃げようとしたことを後悔するがよい。」

そう言ってゆっくりと森を散策し始める人面樹。



……見つけた。

僅かだが動いたな？

一瞬だが油断したな？

それが命取りじゃ。

ワシが動きを感知した場所に行くと二人のおなごが一本の木にもたれかかっていた。

気絶しておるのか？それに男の姿が見えぬ…。

…だとしたら、これはワシをおびき出すための罠じゃろうな。

おなごらは囹の可能性が高いの。

逃げることはできないと理解して、ワシを退治しようとするなど片腹痛いがの。

……まあ、乗ってやろではないか。お主の能力の質じゃたかが知れておるがな。

人面樹は少女たちに近づく、そして彼女たちに触れようとした瞬間…

ドスッ！

「ぬ!？」

彼女たちがもたれかかっていた木から杭が飛び出し人面樹を貫いた。

…なるほど、なるほど。

だが、これ（杭）で貫いたとしてもワシを殺そうとするのは無理じやな。

軟弱な策は自身の身を滅ぼすぞ？

ワシが逆におぬしをおびき出してやろうぞ。

「ゴホッ！ゴフッ！…ゆ、油断してしまった。まさか、人間にワシがやられるなんて…。」

人面樹がその言葉を吐いて動かなくなった振りをする、男がその木から飛び降りてきた。

「……やった…のか？………た、助かったー！！」

…ふふふ

「残念だが現実是非情じゃ。」

「!？」

ワシは男が何か言う前に、荊^{いはら}で四肢を拘束し空中にぶら下げる。

男自身の体重で荊は彼の肌に食い込み、出血し始める。

「どうじゃ？なかなか痛いじゃろ？」

男は顔を少し歪ませながらも人面樹に尋ねる。

「何故生きてるんだ？確かに貫いたはずなのに…。」

くくく、そう思うのは当然じゃろうて。

「それはの、ここがワシの森だからじゃ。ワシがここで地に根を張っている限り…。」

ワシは最後まで言わず、体に刺さっている杭を引き抜く。

「空けた穴が…。」

男が空けた風穴は見る見るうちに塞がっていった。

「そういうわけじゃ。つまり、この森にいる限りワシは死ぬことはない。」

ガツクリと項垂れておるの。

「ところでお主よ、ワシはやられたことはやり返さないと気が済まないのじゃ…。」

「…それは一体？」

「こういうことじゃ。」

ワシは杭を生成して、男の心臓に突き付ける。

しかし、男は俯いたまま何の反応も示さない。

「なんじゃ、抵抗せぬのか？殺してしまうぞ？」

抵抗しても殺すだけじゃがの…。

「…もう遅いだろうが、一つ忠告しておこう。今の自分には生かすだけの価値があることを理解しておいたほうがいいぞ。」

男はまるで、明日の天気の話でもするかのように話し始めた。

「何を言っておる。おぬしはおなごらを連れてきた時点で生かす価値は無くなったぞ？」

彼は構わず話し続ける。

「それと生き物が生理現象以外で、油断が大きくなる時は知ってい

るか？」

拘束している荊の力を強めるがそれでも反応がない。

「やれやれ、恐怖で気が狂ったかの？」

：そんなものを甚振^{いたぶ}っても面白くないわい。

「ああ…最後に…」

「もうよい…さっさと死ね。」

人面樹はつまらなそうに杭を振りかぶり男の心臓に突き立てようとした。

「…が！？は！？…な、なんじゃこ、れ…は！？」

しかしそれは叶わず、人面樹は体の上半分が切り『離され』…

「最後に…やられたらことはやり返す。それは僕も同じです。八雲さん貴方もそうでしょ？」

荊で上半分を拘束され、『空中』にぶら下げられていた。

「…そうね。それについては同意見だわ。」

裏十二回目

S i d e 八雲 紫

何かの能力には目覚めているだろうとは思っていたけど…

八雲紫は男が植物を操り、子供たちを気絶させ移動するのを見ていた。

……私や人面樹の能力を真似て使うことができる能力。

境界を使って移動しないところを見ると何かしらの制限があるみたいだけど…。

確かにそれでも私に知られるワケにはいかなかったでしょうね。

だってそんな便利な能力が使えるなら私は貴方を式にして、外の世界には帰してあげないもの。

貴方も利用されるのが分かってたから隠してたんでしょ？

それなのに能力を使ってしまった。何故かしら？彼ならあの状況でも口八丁で切り抜けられたでしょうに…。

私は疑問に思いながらも少女を両脇に抱えて走っている彼の後について行った。

少し開けた場所で彼は止まり、木を一本生やすと少女らを降ろし、その木に登ってしまった。

そんなあからさまな罠を張ってしまつてどうするの？いくら人面樹が愚かと言つてもそれじゃ気づかれるわよ…。

八雲紫も彼の行動に少し戸惑っていた。

暫く経つて人面樹が現れ、彼女らに触れようとする。

ドスッ！

「ゴホッ！ゴフッ！…ゆ、油断してしまつた。まさか、人間にワシがやられるなんて…。」

…見事に杭が貫いたわね。だけど、その下手くそな演技…死んでない？

「……やった…のか？………た、助かったー！！」

なのに彼は人面樹の前に姿を現す。今度こそ殺されるわよ？

「残念だが現実是非情じゃ。」

案の定、捕まる彼。荊で拘束されてるからかなり痛いでしょうに…。

「どうじゃ？なかなか痛いじゃろ？」

彼の顔が少し歪む。

……………。

「何故生きてるんだ？確かに貫いたはずなのに…。」

……それは私も気になるわね。普通は死ぬか少なくとも重症の怪我だったはずよ。

「それはの、ここがワシの森だからじゃ。ワシがここで地に根を張っている限り…。」

「空けた穴が…。」

…治っていくわ。

「そういうわけじゃ。つまり、この森にいる限りワシは死ぬことはない。」

…項垂れているのは演技なのよね？

「ところでお主よ、ワシはやられたことはやり返さないと気が済まないのじゃが…。」

だけど、貴方はいったい何が目的なの？

「…それは一体？」

私に何をさせたいの？

「こういうことじゃ。」

…心臓に杭を突き付けられてる男。

「なんじゃ、抵抗せぬのか？殺してしまうぞ？」

……………私は同情で貴方を助けたりしないわよ？

「…もう遅いだろうが、一つ忠告しておこう。今の自分には『生かすだけの価値』があることを理解しておいたほうがいいぞ。」

……………なるほど、そういうことね♪

「何を言っておる。おぬしはおなごらを迎えてきた時点で生かす価値は無くなったぞ？」

つまり、人面樹にとってでは無く私にとってはあるのね。

「それと生き物が生理現象以外で、油断が大きくなる時は知っているか？」

「やれやれ、恐怖で気が狂ったかの？」

それは自分が有利な立場にいると思っている時。

獲物を殺そうとする時。

今の貴方（人面樹）って分かっていないのね。

「ああ…最後に…」

だから、彼はこの状況を造った。私は、子供でこれが起きることを望んでいたのだけど…。

彼を生かす理由ができたから。

…いいわ。少しくらいなら利用されてあげましょう。

「もうよい…さつさと死ね。」

アレ（人面樹）が杭を振りかぶった瞬間、能力を使い…

「…が！？は！？…な、なんじゃこ、れ…は！？」

『空間』を裂く。

すかさず彼はアレが再生できないように、荊で『空中』に吊り下げる。

「最後に…やられたらことはやり返す。それは僕も同じです。八雲さん貴方もそうでしょ？」

それは、今ぶら下がっているアレに言ってるのかしら？

「…そうね。それについては同意見だわ。」

それとも、アレを殺すために貴方を利用した私に言ったのかしら？

表十三回目（前書き）

序章のエピローグ的なもの。ちょっと時間が飛んでますが気にしないでください。ちゃんと戻りますので。

表十三回目

S i d e 上白沢 慧音

彼が里からいなくなって三日が過ぎた。

あれから私は手紙を見つけた後、東門へ急いだ。

しかし、東の門番に聞くと誰も通ってないという。

だから、人里中を探し回った。それでも見つからなかった。

彼を探している途中、お昼頃に美希と真希の両親と会った。

何故か凄く焦っているようだったので事情を聞いてみた。

娘たちが家からいなくなったらしい。

気づいたのは朝食に呼ぶ時で、それから人里を探し回っていたらしい。

寺子屋に来ていないかと聞かれた。

朝はいなかったがもう一度見てくると伝え、私は寺子屋に戻った。

彼も戻って来ているかもしれないと思った。

そこにいたのは美希と真希。

そして、妖怪の賢者だけだった。

そこで私は思い知らされた。

私は彼のことを何も知らなかったことを…

「……！？美希！真希！しっかりしろ！」

寺子屋に帰ってくるとそこにはぐったり倒れている彼女たちがいた。

「今、医者を呼んでくるからな！」

「その必要はないわ。ただ気を失っているだけだもの。」

私が里の医者を呼びに行こうとしたら、突然声をかけられた。

振りかえるとそこには見知らぬ女性が立っていた。

「誰だお前！この子達にいったい何をした！？」

「私はこの子たちをここに運んだ『だけ』よ。感謝されこそすれど、恨まれる覚えは無いわ。」

胡散臭い雰囲気彼女は私の怒気を気にすることもなく言う。

「運んだ？彼女らはいったい何処にいたんだ？」

「人面樹の森。」

「な！？どうしてそんな危険な所に…。」

その言葉に彼女は失笑し、私を小馬鹿にする。

「『何も』知らないってのは本当に滑稽ね。」

私は若干いらつく。

「…どうのことだ？教えろ。」

ふう…っと八雲紫はため息を吐き、慧音の側に寄り、耳元で囁く。

「別に構わないけど、それは毒林檎かも知れないわよ？」

「…：毒を食らわば皿までだ。」

私の返事を聞き彼女は話し始める。

その内容は信じられない、いや、信じたくないものだった。

「通武手が美希と真希を騙して森に連れていった?」

…どうやって?

「そう、お父さんの誕生日に珍しい果物を贈るっていう餌を吊り下げてね。」

…何のために?

「さらに言うなら、彼は自身の利益のために彼女らを人面樹に捧げたわよ?」

…自身の利益。

「嘘を言うな!それならどうして美希と真希は生きている!」

そうだ、彼女らが生きているならきつと彼は途中で改心して…

「それは私が『助けた』から。そうしなければこの子達は人面樹に殺されていたでしょうね。」

そんな…。

…ならどうしてお前はそんなことを知っている。

「……お前は一体何者だ?」

「八雲紫。人里を保護している妖怪って言ったほうが分かりやすい

かしら？」

「存在しているのは知っていたがお前がそうなのか…。私は…」

私が何か言う前に言葉をかぶせてくる八雲紫。

「上白沢慧音。寺子屋の教師。半人半獣。幻想郷の歴史を編纂しているのよね。」

「知っているのならそれでいい、一応の礼節を通そうと思ったただけだ。それよりも聞きたいのは…。」

…声が出てこない。

「彼のことでしょ？その表情を見る限り想像はついてるでしょうけど。」

表情？今、私はどんな表情をしている？

「通武手、という人物はもうこの幻想郷にはいないわ。言わなくても分かるだろうけど私は彼を外の世界に帰していないし、博麗神社にも行っていないわ。そして私は幻想郷に害なすものを助けるほどお人よしではないわ。…『人』ではないけれど。」

…美希と真希はここにいて、彼はいない。それはつまり…。

彼は死んだ、ということだ…

いや、正確には……

それを理解した瞬間私は八雲紫の胸倉を掴む。

「どうして彼を見殺しにした!! お前なら助けることだってできただろう!？」

「あら? どうしてそう思うの?」

「この子達は助けることはできたんだ! どうして彼は助けなかった!？」

「:言ったでしょう? 幻想郷に害なすものを助けるほどお人よしじゃないって。:彼は何をしたの?」

自己の利益のために人里から子供を騙して攫ったのよ?

「そ、それは……。だけど彼にも事情があったはずだ!」

しどろもどろになりながら反論する慧音。

「それは何? 知らないでしょ? ……結局のところ貴女は『何も』彼のことを知らなかったの。」

その言葉が私の胸に突き刺さる。

「……………」

黙っていると彼女は人差し指で私の頬をそっと撫でる。

「だから、別に貴女が泣く必要なんてないのよ。」

「え? ……あれ?」

言われて初めて気づく、どうやら私は泣いているらしい。

「美女に涙は映えるけれど、貴女のそれにはどんな意味が込められているのかしら?」

彼が死んだことに対する悲しみか、それとも彼を理解してやれなかった悔しさか…

ポロポロと、とめどなく溢れてくるそれを止める術を、私は知らない。

「……それじゃあ、私はもう行くわ。そろそろこの子達も目が覚めるだろうし。そして、これは彼女たちへのお詫び。」

八雲紫は手紙を二枚と山盛りの果物をスキマから取り出し、その中に入っていく。

「ああ、そうそう最後に一つだけ彼から伝言を頼まれていたわ。」

すでにスキマの中にいる彼女は振りかえり、それを慧音に伝える。

「……おにぎり、歪^{こわ}だったけどおいしかったって。」

確かに伝えたわよ、そう言って紫はスキマを閉じた。

……ゴソゴソ

「……あれ？けーね先生？どうして？」

「……………けーね先生？」

どうやら、美希と真希が目を覚ましたようだ。

それから二人に事情を聞いてみたが、やっぱり八雲紫の言っていたことは事実だった。

彼女らが言うには彼も何か辛そうな様子を見せていたらしい。

真悟はとんだ誕生日になってしまったとぼやいていたが娘の無事が確認できて安心したようだ、彼については何も言わなかった。

人里にとってはちょっとした事件でも、私にとってはかなりきついものだった。

そして私は里のみんなが思うほど強くない…

だから、この毒林檎（歴史）を食べる（隠す）ことにした。

表十三回目（後書き）

慧音が再び出てくるのはだいぶ後になると思います。ちなみに紫は慧音との会話の中で1か所だけ嘘、というか矛盾している個所があります。答えは次話のあとがきで。

裏十二回目（前書き）

時間軸は裏十二回目に戻ります。

裏十三回目

Side 八雲 紫

「…そうね。それについては同意見だわ。」

私が姿を現すと人面樹が驚きの表情を見せる。

「…遅かったじゃないですか八雲さん。危うく殺されるところでしたよ。」

男は自分に巻き付いている荊を解きながら私に言う。

「どういうことじゃ!? 妖怪の…がっ!」

人面樹が言い終わらないうちに彼は何かを絞るような動作をする。

その動作に合わせてソレを縛っている荊がきつくなっていた。

「何勝手にしゃべってるんですか?」

明らかに自分を見下した発言に怒るソレ。

「貴様! 調子に乗るのも…ぐっは!」

「…へえ、妖怪にも血は流れてるんですね、初めて知りました。貴方も自分の立場を知りましたか?」

さらに荊を引き絞る彼。

「……………」

「分かってくれたようで幸いです。質問があるなら1つだけどうぞ。」

悔しさを顔を歪めながらもソレは私に聞いてくる。

「これは一体どういうことじゃ？妖怪の賢者よ。」

「どうって…見ての通りよ♪（訳…貴方はもう用済みの。）」

「……今なら人間10人で許してやるぞ。」

「…貴方はもう用済みの。直接言わせないで頂戴、めんどくさいから。」

「何故じゃ！？それは幻想郷にとって悪いことじゃぞ！？……ぬ！…！」

「質問は1つだけって言ったはずなんですがねえ。まあいいか、それよりも人面樹さん貴方このままだと僕か八雲さんに殺されますが抵抗しないんですか？まあ抵抗しても殺すんですが…。」

「…お主。」

「って言いたいところなんですけど、一度だけ機会を与えましょう。なあに簡単なことですよ。貴方が使っている能力、それを模倣^{マネ}する許可を僕にください。そしたら、助けてあげますよ？約束です。ただ、くれなかったら…分かりますよね？」

…なるほど。制限を解除するためには相手の許可が必要なのね。

「私『は』殺さないであげるわ。」

八雲紫の言葉が決め手になったのか、人面樹は仕方なく男の要望に応える。

「…分かった。お主はワシの能力を使っても構わん。」

「ありがとうございます。……それじゃあ、これでお前を

殺せる。」

彼はさらにソレの姿が見えなくなるほど荊を巻き付けていく。

「……や、約束と違…。」

とうとう人面樹は荊でしゃべれなくなるほどになった。

「…約束？ ああ…貴方にとってそれは破るモノなんでしょう？（訳…自分だけ守る道理はないよ。）」

ソレに男の言葉が聞こえているかどうかは定かではなかった。

「聞いてます?…まあいいか。」

私はスキマから傘を取り出し、差す。

「それじゃ、人面樹さん、さようなら。」

彼は両手を前に出し、思いっきり握った。

……バシユ、ブシヤ、ビチャ

辺りにソレの血が飛び散る。

「……汚い花火ね。」

「漫画でなくリアルでそのセリフを聞くことになるとはびっくりです。…でも八雲さん、貴女はまだマシですよ、傘なんていつの間に差したんですか?」

返り血で血塗れになった彼は振りかえり、私と向き合う。

やっぱり無表情ね。

「ついさっき。…それよりも貴女を外の世界に帰す約束だけど、…
言わなくても分かるわよね？」

「ちゃんとやってください。じゃないと分かりません。愛の告白な
ら言葉にしないと伝わりませんよ？」

……ただ単に認めたくないのかしら？

それとも私をおちよくるため？

「今の貴方を見て愛を囁こうとは思わないわよ。……いいわ、それ
ならはつきり言ってあげましょう。」

貴方をこの森の新しい主あるじにしますわ

「もちろん、拒否権はないわ。外の世界にも帰してあげない。その

ために私は貴方を助けたんだもの。」

それは貴方も分かっていたはずよ？

「…まあ、そうなるでしょうね。分かりました。」

「随分あっさりしてるわね。それでいいのかしら？」

「能力を使った時点でそうなるだろうとは思っていましたが、そういう風に貴女を動かしたのも僕自身です。それに、あくまで『今』はそれを飲むだけです。（訳…いつかは外の世界に戻ります。）」

「あらそう、ならいいわ。私はせいぜい貴方が死なないようにするだけだわ。人間の寿命は短いもの。（訳…貴方を私の式にせずとこの幻想郷に留まらせてあげるわ。）」

一人と一妖怪の間に穏やかではない雰囲気が漂う。

暫くの間見つめあったあと…

「やめましかうか。今何をするわけでもないですし。」

「やめましよう。直ぐに何をするわけじゃないもの。」

その空気は緩和した。

「ところでいくつか質問があるのだけれど…。」

ちょっとした興味本位だから、絶対に知りたいとは思わないけれど。

「なんででしょうか？好みの女性のタイプは答えましたし…。スリーサイズ以外ならお答えしますよ。」

…何時ぞやの彼の妙な仕草を思い出してしまったわ。

「名前、教えてくれないかしら？」

少し考えているわね…

「…九十九^{つくも}白^{はく}。気安く名前で呼ばないでくださいね。」

…また本名かどうか分かりづらい名前なこと。

「なら九十九^{つくも}って呼ばせてもらうわ。次の質問だけねど…」

「その前に、貴女の仲間？部下？を呼んだらどうです？」

…気づいていたのね。どうしてかしら？

「木一本でも結構な根を伸ばせるものです。さっきの剣呑な雰囲気の中でほんの僅かですが動きましたよ？何に化けているかは知りませんが。」

…藍には後でお仕置が必要ね。

「そう、伝えおくわ。でも紹介するのは無理ね。彼女、絶世の美女だから貴方の目が釘付けになっちゃうわ。そんなことになったら私、

嫉妬して彼女を殺しちゃうかも…。」

「やれやれ、モテる男はつらいですね。次の質問は何ですか？（つまり『能力』持ちだから下手に会わせたくないと。）」

「九十九は一度里にもどるのかしら？（訳…事情をすべて彼女らに話すのかしら？）」

「残念ですけど、僕には頭突きされる趣味は無いですね。この子達は八雲さんが連れ帰ってください。（訳…事情も説明しませんし、戻りません。僕は死んだことにしてください。）」

「次の質問…：貴方は本当に『外の世界に帰るためだけ』に私との約束（子供を攫う）をしたの？」

「…どういことですか？」

「…：人面樹は、遅かれ早かれ人里を襲っていたわ。そして、貴方はそれを退治した。（訳…見方を変えれば、貴方は人里を救ったことになるのよ。）」

「…：結局のところ、それは事実の捉え方次第。貴女がそう思えばそうなるし、思わなければ違うんでしょう。」

「…でもこの場合、捉え方によって九十九の評価が180度変わるわよ。それでもいいの？」

片方は自分のために子供を騙し攫う最低な人間。

もう片方は自らを命の危険にさらし、外の世界に帰れるチャンスを

潰して、私に知られたくないことをバラしてでも子供を救い、人里を守った英雄。

「僕はどっちでもいいですよ。…だけどそう言われると、まるでコインの表と裏みたいです。」

「……表裏者な貴方にはこの結末がお似合いかもしれないわね。」

「……」

私の皮肉に、くくくと彼は楽しそうに笑っている。その笑顔が本物かどうかは私には分からない。

「……」

私だけは彼の事を少しは分かっていたつもりだったけれど、違ったみたいね。

「そういえば、八雲さんにいくつか頼みがあったんです。」

ほんの少しの間笑った後、彼は私に言う。

「……ここに住む家なら明日、鬼を呼んで造らせてあげるわよ。」

「鬼もいるんですね、この幻想郷には。…実はこの娘たちを帰す時に一緒に持って行って欲しいモノがあるんです。」

「いいわよ、3つまでなら叶えてあげる。でもどうしてかしら？」

「何、ちょっとした『お礼』ですよ。……………これらを届けてください。」

そういつて血で汚れないように『ツタを使って』渡されたものは…手紙が2枚と山盛りの果物。

「果物は貴方の能力として、手紙はいつ回収したの？」

「ついさっき。」

ウインクしながら答える彼。

私はそれには反応しないでスキマ開き収納する。

「…であと2つまでならいいんですね？」

「私が叶えられる範囲でならね。シェンロンより狭いわよ。（訳…外の世界に帰してくれとかはダメよ。）」

「それでも大丈夫です。ハンカチを持っているなら貸してくれませんか？水も出せるなら有り難いです。」

「……………叶えてあげましょう。はい、どうぞ。」

その頼みに疑問を感じながらもポケットからハンカチを取り出し渡す。水をスキマから流し続ける。

「ありがとうございます。ハンカチは洗って返しますね。」

彼は水で両手の血を丹念に洗い落とし、ハンカチで拭く。

「川ならこの森にも通っているから場所を教えてあげるわよ。手だけ洗っても意味ないでしょう？」

いえ、そういうことじゃないんです。と彼は言い、スキマを開き何かを取り出した。

……やっぱりスキマ、使えるのね。

「いただきます。」

「……それは…食べ物なの？」

九十九は両手を合わせ取り出したものを『手を使って』食べ始めた。

「歪ですけど、オニギリらしいですよ？美女お手製の。」

「……そう、わざわざそれを食べるために2つ目の頼みごとを使うなんて、優しいのね。」

……私の言葉が耳に入っていないのだろうか。彼は一心不乱に手のひらサイズのオニギリらしきものを頬張っている。

…お腹がすいていただけかしら。

「…ふう、ごちそうさま。」

食べ終わったわね。

「……………それで3つ目の頼み事はどうするの？取っておくことはできないわよ。」

「いえ、もう決めてあります。」

「何かしら？」

「…彼女、『慧音』先生に、歪だけとおいしかったと伝えてください。」

……………。

「本当にそれでいいのね？」

「ええ、構いません。わざわざありがとうございます、『八雲さん』。」

「この森の新しい主になってくれるんだもの、それくらいお安い御用よ。」

……………だけど少し意地悪したくなったわ。

「それじゃ、質問の続きだけど、悔いはある？私は貴方を『最低な人間』にするけれど。（訳…あの先生には貴方は子供を騙して攫ったって伝えておくわ。）」

九十九は特に気にもしないで答える。

「さあ？杭なら沢山造れますがね。そんなものあったってしょうがないでしょうし。」

「：今の幻想郷にはいないけど、吸血鬼が来たときにでも取っておいたら？」

「ニンニクも用意しておきましょうかね。：まだ何か質問はありますか？」

「これが最後の質問。：貴方に取って『約束』って何かしら？アレ（人面樹）にとっては破るモノだったみたいだけど。」

「……………そうですね。基本約束なんてあまりしない性質なんで、コロコロ変わりますがこの場合約束なんて：。」

バラし、バラされるモノだったみたいですな。

約束^{つづ}た束^{たば}はいつかはそうなります。

僕は人面樹の取引を子供にバラされ、八雲さんに能力がバレ、最終的に人面樹を僕が殺^{バラ}しました。

「……………そう、それじゃ私はこの子達を人里に連れていくわね。く

だらない質問に答えてくれてありがとう。」

「いえいえ、どうやら家を造ってくれるそうで、これくらいなんでもない事ですよ。そんな貴女にこれを贈らせてもらいます。」

スキマに入った私に彼が渡したものの、それは1本の白い薔薇だった。

「どういう意味を込めてこれを渡したかは分からないけれど、有り難く受け取っておくわ。：九十九 白、最後に私からも貴方に一言：。」

幻想郷へ、ようこそ

裏十三回目（後書き）

表意者…うらおもてのある者。うそつき。

約める…細く小さくしてまとめる。

白い薔薇の花言葉…尊敬、私はあなたにふさわしい（主人公は紫に幻想郷の管理者として「尊敬」しているから贈ったのか、敵対する相手として「ふさわしい」から贈ったのか、はたまた別の意味で贈ったのか、それは彼のみぞ知っているんでしょうね。花「束」でなく1本しか贈らなかったのはその意味を「バラ」しませんという彼なりのシャレも利かせています。）

前話の会話の矛盾…八雲紫は子供を運んだ『だけ』と言っているの
以後で『助けた』と言っている。

以下、作者のどうでもいい文が続きます。興味の無い方はじゃんじ
ゃん飛ばしてください。

幻想入り 完了

長かったです。自分でもかなり驚いています。まさか主人公の能力
を出すのに20話掛かるなんてアホかと…。そして、序章を終わら
そうと頑張った結果がこの長さだよ！…でも、やっと…やっと終わ
りましたよ。これで主人公を自由に動かせる。原作キャラとたくさ
ん関われる！あらすじに書いたことが書けますよ！！次話は分かり
やすいと思いますが萃香が出てきます。

さらにどうでもいいことを続けます。

オリジナルキャラの美希、真希の名前ですがこれは「木」に関連し
て幹、薪だったりしました。単純ですな…。人面樹もそうですね。
そして、分かりやすく重要だった「林檎」。これを食べたことによ
って主人公は能力に気づくきっかけとなったり、慧音が食べること
でこの章の終りを迎えたりしました。実のところ13回目の表と裏
どちらを先に投稿しようか迷ったんですが、こちらの方が前話を見
返していただけると面白いかなと思いましたが。ちなみに林檎

の花の花言葉には「名声」「評判」「選択」なんてのもあります。それらを知ってこの章を思い出して頂けるとより面白みが出てき・・・たらいいなあ。最後に禁断の果実っていうのは必ずしも林檎を指すわけではありません。地域によって違うみたいですね。林檎は主に西欧です。他の場所や宗教ではブドウだったりイチジクだったり色々あるそうで。

長い後書き失礼しました。ここまで読んでくださった皆様に感謝を。

表十四回目

男、いや、九十九 白がこの森の主になって最初にしたこと、それは森の中心で『根』を上書きすることだった。

人面樹が死んだことによって彼はその能力（あらゆる植物を操る程度の能力）を完璧に模倣できるようになった。

しかし、死ぬ以前に人面樹が使っていたものが使えるわけではなかった。

だから、彼は新たにこの森を支配する必要があった。それが『根』の上書き。

それは能力を手にしてすぐの彼には少々キツイものがあり、その作業が終了したのは夜が明け、太陽が昇り始めた頃だった。

（…………もう朝か。確かここからすぐの所に川が流れていたな。いい加減この血を洗い流そう。）

根を張ることで森の地形を理解し、侵入者にも察知できるようになった九十九だが、その顔には疲労が窺える。

彼が血を洗い流さなかった理由は、一種のマーキング。この森の新たな主は自分だという証明だった。

（まあ、妖怪にそれが通じるかどうかは知らないけど…。）

数分歩き、川にたどりつくると彼は服も脱がずにそのまま飛び込む。

（気持ちいいな、疲れが吹き飛ぶ。）

やっと血を洗い流すことができ、暫くの間ただ何も考えず川に浮かんでいると：

「最近の外の人間は、服を着たまま川に飛び込むのが流行っているのかい？」

声が聞こえたほうへ体を向けると、川の岸边に一人の少女が立っていた。

「最近の幻想郷の少女は頭に角をつけるが流行っているのかな？」

「そんなワケないさ。」

「そんなわけないよ。」

九十九は川から出るとその少女に近寄る。

「初めまして、九十九って呼んでください。かわいらしい鬼さん。水も滴る良い男とは自分のことです。」

文字通り水を滴らせている彼は彼女の視線まで膝を曲げ、挨拶をする。

「初めまして、紫から話は聞いてるようだね。私は伊吹萃香、これでも数百年以上は生きてる鬼だよ。いい男ならこっちもいけるんだろ？」

右手に持っている瓢箪ひょうたんを軽く上げる萃香。

「鬼が飲んでいるお酒ですか。興味が無いと言ったら嘘になります
が、今の私にはそのお酒を飲む場所も提供できないんですよ。（訳…
家造ってから飲もうか。）」

「せっかちなねえ。早い男は嫌われるよ？ 私は嘘をつく『人間』
が嫌いけどね。」

「ほほう、過去に何か悪い人間に引っ掛かったんですね？ 気が変わ
りました、その話を肴に飲みましょう。（訳…嫌なことを思い出し
たくないなら、さっさと家を作ってください。）」

「…嫌味な人間だ。仲良くなれそうにないね。まったく造ればいい
んでしょ造れば。」

「ありがとうございます。それじゃ造ってほしい場所に案内します
ね。…つとその前に一つだけ質問をしてもいいですか？」

「なにかなあ？」

「どうやってこの森に来たんですか？（訳…感知できなかったって
ことは何か能力を使って来たんですね？ どんな能力を使ったんで
すか？）」

「それはね、秘密だよ。何故かしらないけど、紫から言われてる
んだ。あんたに能力を教えちゃいけないって。そう約束しちゃった
からね、それを破ると嘘ついたことになっちゃう。鬼は嘘を嫌うの
さ。」

「なら仕方ないですが…やれやれ、女性の嫉妬は怖いですね。」

九十九は歩き始める。

一方萃香は彼の言葉を聞き、呆れながらも付いて行く。

「…嫉妬ね。まあ、どうとうろがあなたの自由だけどき。」

…ビチャ

「今日もいい天気ですねー。」

「そうだね。」

何気ない会話をし始める、一人と一鬼。

…ベチャ

「良い天気と言えば、この幻想郷の天気ってどうなってるんです？」

「…さあ？よくは知らないね。」

…グチャ、グチャ

「そうですか、でも雨とか四季とかはあるんですよね？」

「……ああ、あるね。」

…ビチャベチャグチャ

「それとですね…。」

「水が滴りすぎだよ！あんたさっきから気持ち悪くないのかい！？」

「実は…めっちゃくちや気持ち悪いです。脱いでも良いですか？つてか脱ぎます。」

そう言って服に手をかける九十九、その様子を見て萃香は…

「やめろ！見たくもないものを見せようとするな！！まったくしょうがないね…。」

彼の服に手を触れる。すると一瞬で服から『水蒸気』がでて乾いてしまった。

「おお！？すごいですね。わざわざありがとうございます…。…つと、ちやうど家を造ってほしい場所にも着きましたよ。」

立ち止まる二人、そこにはただ木々が生い茂っているだけだった。

「ここでもいいのかい？材料は…足りなくなることはないか…。」

どんな建物がいいか希望があるならなるべく叶えてやるけど？と萃香は尋ねる。

「そうですねえー、一人で暮らしますしそこまで広くなくてもいいんですが…どうせ建ててもらうなら、一階建ての屋根裏付き、ベランダ付きの3LDKでお願いします。あ、あとお風呂は室内と露天の二つで！暖炉もあるとさらに嬉しいです。」

「3LDKってのはよくわからないけど、あんたが思いのほか図々

しいのは分かったよ。」

「えっとですね、3LDKってのは…。」

いきなり説明をし始めた彼に戸惑いながらも萃香は耳を傾ける。

「……ってのが3LDKです。造れますかね？」

「うーん。まあ大丈夫だろう。さっそく造り始めようか。」

「どれくらいで完成するんですか？あまりに長くかかるようなら寝ることだけができる家を先に造った方がいいんじゃない？」

彼の疑問は尤もで普通外の世界では家を造るのはそれなりの時間を有する…

しかし、常識が通じないのがこの幻想郷。

「半日もあればできるよ。」

「…半日ですか。それはすごいですね。仲間でも呼ぶんですか？」

「いんや、こうするのさ。」

萃香は目を瞑ると集中し始めた。

一瞬彼女は白い光に包まれる。

光がとけると、そこには何十、何百、という小さな鬼がいた。

「あとは紫から貸してもらったこの大工用具を使えば…神社だって一日で修復できるんじゃないかな？」

ノコギリ 鋸、金槌、鉋、鑿、さしがね、などを持ち始める彼女たち。

「それじゃあ、みんなかかれー」

「「「おおー。」「」」

本体らしき萃香からの号令で一斉に動き始めるチビ萃香。

しかし、かわいらしい外見とは裏腹に樹木をバキバキ折ったり、抜いたりしている。

それらの樹木は流れ作業で道具を持っている萃香達に運ばれ、きれいな角材にされる。

「これは本当に半日で終わりそうだな。」

最初は半信半疑だった九十九も目の前の光景に納得する。

（あとは…どうやって能力を知るかだなあ。）

表十四回目（後書き）

L リビング

D ダイニング

K キッチン

3LDKはその三つのほかにさらに別の部屋が3つある家の事。

裏十四回目

Side 伊吹 萃香

家を造り始めてから半日。太陽は半分ほど顔を隠し、辺りを茜色に染めている。

「「できたー。」」

木々しか生い茂っていなかったその場所には見事な一軒家建っていた。

「おおー！素晴らしいですね。要望にも応えてもらったみたいで本当にありがとうございます。」

拍手をして私に頭を下げる九十九。

「なあに、ちゃんと紫からそれなりのお礼をもらうから気にしなくてもいいよ。」

「お礼？」

「そそ、外の世界のお酒をいくつかね。」

「なるほど、そういう事でしたか。」

九十九は納得がいったという顔をして頷く。

「だけど、やっぱり少し申し訳なく感じますね。」

「そう？……ならちよつとした勝負をしないかい？」

……最初会ったときから気にはなってたんだよ。

「勝負？ いったいどんな内容でしょう？」

…服に付いた血に匂い。

「単純なケンカさ。どっちかが負けを認めたらそこで終了。」

それってこの森の主の血だろ？ …いや、だったかな？

「鬼と喧嘩ですか…。別に私はあまり強くないから楽しくないですよ？」

「強くない？ 嘘はついちゃいけないよ。その『血と匂い』、あんた、この森の主を倒して新たな主になったんだろ？」

じゃないと紫がこの森に家を建てるのを認めるわけがない。

「倒せたのは八雲さんの協力のお蔭なんですがね。…鬼ってのはケンカが好きなんですか？」

「酒と同じくらいに好きだね。…でどうする？」

「そうですねー。私が勝ったら何か良い事あります？」

…コイツは面白い。

「人間が鬼に勝てると？ ははは！ 笑わせてくれるね。…いいよ、もしあんたが勝ったら私の能力を教えてあげる。」

「いいんですか？ 負けたら貴女が嫌っている嘘を吐いたことになりそうです…。」

「それだけ勝つ自信があるってこと。…ちなみにあんたが負けたら今夜は一晩中私の酒に付き合ってもらうからね。それでもいいかい？」

「それはきつそうだ。…でもまあその勝負受けましょう！」

「いいね！ その意気込み、嫌いじゃないよ。…それを買って、ハンデをあげる。」

「……ハンデ？」

「一つは分身を出さない。本体は私だけ。もう一つは『この森』で戦ってあげる。」

「……結構なハンデをありがとうございます。多分ですけど、『勝負』には負けませんよ？」

彼の無表情になった顔を見て、私は少し興奮する。

それがあんたの素顔かな？

「その自信、大いに結構。…それじゃ、せっかく造った家を壊しちゃなんだし。さっきの川の岸辺まで移動しようか。」

…久しぶりにケンカを楽しめそうだ。

「それもそうですね。」

私は移動し始める。彼も私の後続く。

その最中、ふと私は物思いにふける。

いつからだろうか、人間を嫌っていたのは。

いつ知ったのだろうか、人間は必ず嘘を吐く生き物だと。

いつ以来だろうか、こんなに人間と話したのは。

いつもそうだ、私は人間に騙されてきた。

「…伊吹さん、つきましたよ。」

「…え？ ああ、そうね。それじゃ始めようか。」

考えるのは後、今はこのケンカを楽しむとしよう。

私達は互いに向き合う。

「『百』鬼夜行にならずとも、私は一鬼当『千』なり！…鬼のケンカを受けたこと、後悔してももう遅い！」

私が『らしい』前口上を言うと彼も乗ってきてくれた。

「百に一つ足りぬとも、そこには白星のみが輝く。この森は我の領域、勝てると思うな！」

ワクワクが止まらないね。

「いざ！」

「尋常に！」

「勝負！！！」

裏十四回目（後書き）

前口上の時の作者の厨二臭さが異常ですね。：いやまあ、そういうの大好きなんですけどね。

「百」―「一」〓白 多分説明しなくても大丈夫でしょうが念のため。

白星…相撲の星取表で勝ちを表す白丸。転じて勝負などに勝つこと、手柄などをたてることなどをいう。
誤字修正しました。

表十五回目

S i d e 伊吹 萃香

「「勝負!」」

九十九と私の声が重なる。

彼は私の目を真っ直ぐ見つめている。

その瞳は私の何を見ているのか…

それとも何も見ていない?

…まあなんでもいいさ。

私を楽しませてくれるなら何でもね。

「どうしたの? 掛かって来ないならこっちk…!?!」

萃香がそのセリフを言い終わらないうちに彼女足元からツタが生え、
両腕両足を拘束する。

「……まさか、こんな物で私を捕えたつもりなのかい? 鬼を舐めて
るね。」

ブチブチとツタをまるで紙のように引き千切りながら彼女は九十九

に近づく。

「やれやれ、鬼ってのは力の強い種族らしい…。（その力の強さは能力と関係ないのか…。）」

「それじゃあ…こんなのはどうです？」

彼は能力で今度は荊を巻きつけようとする。

「…っと、危ないもの使ってくるね。傷が残ったらどうしてくれるんだい。」

だが、萃香はそれをなんなく避け、彼に接近する。

「そうなたらちゃんと責任は取りますよ。相手はどんな鬼がいいんですか？…というか、この幻想郷に貴女以外に鬼はいるんですか？」

九十九はその場から全く動かない。

「一応いるよ。まあ、会えないだろうけど。…っと今度は木を生やしてどうするんだい？（訳…その木を使って、私にどう対抗するんだい？）」

萃香の足元から次々と生えてくる樹木。

「自然はあって困るものじゃないですよ。」

まあ、素直に答えるとは思っちゃいないよ。

だけどさすがに…私が目の前にいて、拳を構えているのに…。

まるで、世間話をするかのように落ち着いているのは鬼の怒りを買ったよ？

「避けなくていいのかい？結構本気で殴るよ。」

「外の世界と比べて幻想郷ってのは自然が一杯あるみたいですけどね。」

…挑発なんだろうけど。

彼女は思いつき振りかぶり、その拳を彼の腹に殴りつける。

グシャッ！

萃香の拳が九十九の体を突き抜ける。

突き抜けた場所からは大量の血が噴き出し、内臓は破裂し数分もしないうちに彼は絶命する。

…はずだった。

「あんた、本当に人間かい？」

だが、男の体からは何も出ず、ただ萃香の右腕が貫いているだけだった。…そして

彼の『体』から出た先ほどとは比べ物にならないくらいの、何百、何千本の『根』が彼女の体に巻き、その上にさらにそれと同じ量の蔓が彼女を覆い尽くす。

「僕ほど人間らしい人間はいないですよ？…こんなことができるのは『今』だけです。」

「…よく言うよ。だけど、こんなもの幾ら数を増やしたって…。」

意味ないよ、そう言って、同じようにその拘束を解こうとする彼女…だが、動かない。いや、動けない。

「貴女がどれだけ力持ちだろうと、さすがにこの森全部は持ち上げられないみたいです。」

「…どういう意味かな？」

「貴女を捕えているその根、それは森全体に広がっていて、繋がってもあります。」

なるほど、動けないわけだね。しかも…

「それで根自体を千切られないように体に拳を貫かせて、その上蔓で補助を施したと…ったくめんどくさい事をしてくれるね。」

「『この場所』で戦うのを許したのは貴女ですよ。負けを認めてくれます?…じゃないと…。」

九十九は左手に杭を生成し、萃香の心臓に突き付ける。

「…やれるものならやってごらん?」

涼しい顔の私に疑問を感じながらも彼は…

「そこまで余裕があるのは何か秘密があるんでしょうが…。」

それもまた面白いですね。

そう小さく呟くと何の躊躇もなくそれを突き刺した。

「……『分裂』はしないって言ってましたけど?」

分身は出さないって言ったんだよ。

『霧状』になって拘束を抜けた私を見て九十九は呆れた表情をする。

「つまり、その霧が貴女本人でもあるということですか…。確かにその状態で移動されたら感知できませんね。最初、いきなり僕の前

に現れることができたのはそういうタネでしたか。」

そそ、使う気はなかったんだけど、思いのほか追い詰められちゃったからね。九十九、あんた誇っていいわよ。鬼の拳を受け、私をこの状態にしたんだ。

だけど、こうなった私に物理的な攻撃は効かないよ。どうする？

「それはこっちにも言えます。ずっとそのままなんですか？その状態じゃ貴女自身も攻撃ができないでしょ。」

…その通りだね。

だから、もちろん戻るよ。

「但し、今度は大きくなってね！」

私は密度を操り自分の体を大きくする。

「うわぁー、ざっと見た感じで10m以上ありますね。」

彼が私を見上げている。

呆れた表情はどこへやら…こっちをただじっと見つめている。

「これでさっきと同じようには行かないよ。」

「なるほど、その大きさは拘束するのに時間が掛かりますね。その間に反撃されたら再び捕えるのは無理ですね。」

はあく、とため息を吐いて分かりやすく肩を落とす九十九。

「この『ケンカ』、僕の負けですね。」

「諦めるのが早いね。…少しくらい抵抗しないの?」

「無駄なことはしない主義なんですよ。」

全然悔しそうじゃないね。

「私の能力が知りたいみたいだったけど、それはもういいかい?」

ちよつとだけ挑発してみる。多分意味ないけど、さっきの仕返した。

「ああ、それはもういいですよ。」

…やっぱり意味がないみたいね。

「…どうして?」

でも…なんだか嫌な予感がする。

「『密度を操る程度の能力』。それが貴女の能力だって分かりましたから。」

裏十五回目（前書き）

少し修正。

裏十五回目

「『密度を操る程度の能力』。それが貴女的能力だって分かりましたから。」

水を液体の状態から水蒸気（気体）に変化させ、自身の体をいくつにも分裂させた。

この時点で九十九白は一度彼女の能力を勘違いする。

「最初は分裂を操る程度の能力、だと思ったんですけどね。」

それでもさきほどの現象を起こすのは可能だった。

「でも伊吹さん、貴女『巨大化』しましたね。それで解りました。」

「……………」

伊吹萃香は無言のままだ。しかしそれが彼にとっては明瞭な答えだった。

なぜなら、肯定をすれば八雲紫に嘘を吐いたことになり、否定をすれば九十九に嘘をついたことになるからだ。

「いい加減、元の大きさに戻ったらどうです？。それじゃあ、家に入ることでできませんよ。（訳…負けたら一晩酒に付き合う約束でしたね。）」

彼の言葉を聞き萃香は元の大きさに戻る。

「…なんだか勝った気がしないね。」

彼女はかなり不満そうだ。

「自分の一番の目的はそれでしたし、最初から『万』に一つでも鬼に喧嘩で勝てるとは思っていませんよ。」

「喧嘩に負けて、勝負に勝ったってかい？」

「その通りです。」

彼は大きく頷く。

「…でも、どうして私の能力なんて知りたかったの？」

「教えてもいいですけど、一つだけ条件があります。」

「何かな？あまり無茶なのはやめてよ。」

「自分の能力を教えた後一言、それを許可する発言をしてもらえればいいですよ。」

男の話に疑問を感じながらも萃香は応えようとする。

「…？別に構わ「ダ」メ。」…どうしたんだい紫？いきなり出てきて。」

八雲紫がスキマから突如姿を現す。

「貴女に頼まれていた外のお酒を届けに来てみれば案の定ね。」

「おや？八雲さんじゃないですか。そのただけにわざわざここに来るなんて案外幻想郷の管理者って暇なんですね。：いや、それともそれは愛しい僕に会いに来るための口実？」

「あんたって奴は：本人の前でそんなこと言ってどうなっても知らないよ。」

萃香は心底呆れた表情で九十九に忠告した。一方紫はそんなセリフを吐いたソレに目も向けない。

「その気色悪い木偶人形と話す気はないわ。：出てこないなら私が引きずり出すわよ。」

「紫？何を言って…。」

彼女の言葉の意味が分からず萃香は九十九に目をやる。

すると、萃香が九十九だと思っていたソレはただの人の形をした木に変わり、彼が生やした木は『裂け』そのスキマから男が出てきた。

「やれやれ、貴女って女性はどこまでも鋭いですね。浮気をするとうすぐばれそうだ。」

：パンツ一丁で。

「え！？な、どうしてあんたが！？ってか何で下着のみ！？」

ワケが分からず混乱状態になる萃香。

「ちゃんと説明します。」

九十九は彼女を落ち着かせるために肩に手を置こうと近づく。

…だが逆効果。

「へ、変態！こっちに来るな！」

「傍から見ると、半裸で幼女に詰め寄る犯罪者ね。」

「べ、別に悪いこと（肩に手を置く）はしないから、ハアハア。お、お兄さんのい、言う事（説明）聞いてくれるかな？ハアハア。」

明らかにこの状況を面白がっている紫に悪乗りする彼。

「！？…し、死ねえ！！」

萃香はパニックを起こしており、先ほどの手加減とは比べ物にならないほどの威力が籠ったパンチを彼に繰り出した。

九十九はそんな彼女の様子を見て楽しみながらも、このままじゃ殺されてしまうので分厚い木の板を生成し、パンチを防ぐ。

…ミシッ

「な！？どうして私の拳がそんな板で防げるの！？」

「それはこの板の『密度を操って』固くしてるからですよ。」

「それって…。」

「そう相手の能力を模倣する、それが彼の能力らしいわ。ちなみに相手の許可をもらうことでより精度が高くなるみたいよ。」

二人に説明されて、多少冷静になった萃香。

「なるほど、だから紫は止めたんだね。でも、模倣するぐらい私は構わ「彼は貴女をからかったわよ？」…やっぱりダメ。」

紫の言葉に彼女は頬膨らまし、拗ねる。

「面白がって見ていた貴女も同罪だと思いますけどね。」

「そこはほら、萃香、これで私『は』許してくれるわね？」

紫はスキマからお酒を取り出し、萃香に手渡す。

「……許す。でも九十九は許さない。」

「八雲さんせこいです。あとそのニタリ顔やめてください、イラッときます。…伊吹さん、僕はどうしたら許してくれますか？」

若干、涙目の彼女は見る人が見たらかなり加虐心を擲られるだろう。

「……いつ？」

「え？ すいません、聞き取れませんでした。もう一度お願いします。」

「あんたはあの勝負でいつ木の人形と入れ替わったの？ ってかなんで脱いだのよ。」

「勝負って何かしら？」

つい先ほど来た紫は知らなかったので二人に尋ねる。

「ケンカだよ。私が負けたら能力を教えて、勝ったら一晩酒に付き合ってもらおう勝負をしたんだ。…結局、私は勝ったけどその途中で能力を知られちゃったけど。」

「萃香が能力を知られた経緯はそういうわけだったのね。」

「そういうことがあったのですよ。ちなみに入れ替わったのは勝負をするためにこの岸辺に移動する道中ですよ。貴女、途中でなんだか物憂げな表情で何か考え込んで歩いていたらその間にね。」

「……気づかなかったのは私の落ち度か。」

萃香は少し落ち込む。だが彼はそんなことは気にしない。

「そしてえー！！服を脱いだのは……。」

九十九は一旦言葉を区切り、何か重要なことを言う雰囲気醸し出す。

「脱いだのは？」

紫と萃香がゴクリと唾を飲む。

「趣味です♪」

裏十五回目（後書き）

萃香は密度を操って水を液体から気体にしました。状態変化ってやつですね。

何故か萃香が子供っぽく：イメージは大人な女性って感じだったのですがなんでだろう？

表十六回目

「趣味です♪…………おっと。」

「はぁ。そうよね、貴方はそういう人よね。」

「避けるな！一発殴らせろ！じゃないと私の気が済まない。」

片方は呆れ、もう片方はキレる。

「やめてくださいよう。そんなの喰らったら死んじゃうじゃないですか。八雲さんも止めてください。僕が死んだら困るでしょ？」

怒りで動きが単調になっている萃香の動きは彼にとって避けやすかった。

「貴方は死なないわ。私は守らないけど。」

「この！この！ちょこまかと！」

萃香は能力を使うという発想が浮かばないほど頭に血が上っている。

「そんなこというなら、逃げちゃいます。」

九十九は木のスキマを開き、そこに逃げ込む。

「っち！紫！」

彼女の怒号をスルーして紫は質問する。

「……さっきもそうだったけど、貴方いつの間にスキマで移動できるようになったの？（訳…スキマで移動するのは難しかったはずよ。それなのにどうして模倣できるのかしら？）」

「タダで教えるだけでも？（訳…教えてもいいが、それなりの見返りを貰わないと。）」

地面から造形も何もない木の人形が生えてきてしゃべり始める。

「…そうねえ。こんな物でどうかしら？人里で『しか』手に入らないものよ。（訳…人里に行けない貴方には貴重なものよ。）」

人形の目の前に袋や瓶に納められた砂糖、胡椒、塩、醤油、味噌、油、蜂蜜、香辛料が大量に積まれる。

「調味料ですか。生野菜のまま食べるのは飽きがきますから、これは有り難いですね。」

「ついでに萃香、また外のお酒を持って来てあげるから怒るのをやめなさい。長く生きているのに大人げないわよ」

紫に窘められ、萃香は反省する。

「……分かったよ。私もあんなので怒るなんて子供すぎたしね。」

身の安全が保障され再び姿を現す九十九。

「ちょっとからかい過ぎました。わざわざありがとうございます。何故スキマが使えるようになっていたかでしたね。それは…僕の能力の『応用』ですよ。別に貴女的能力を完全に模倣できるようになったワケじゃないです。（訳…できてたらとつくに外の世界に帰ってます。）」

「『応用』？なんだいそれは？」

萃香が尋ねる。が九十九は首を横に振る。

答えるつもりはないようだ。

「いい男なら教えてくれるだろう？」

「…いい男には秘密がつきものですよ。（訳…どれだけ見返りがあるっても教えません。）」

チツチツチ、と1本人差し指を立てて振る。

「いいのかい？紫。（訳…返ってきた情報があまりに少ないと思うけど。）」

「構わないわ。むしろかなり譲歩したんじゃないかしら。彼、自分の事については口が固いから。」

「そんなことないですよ。貴女方みたいな美しい女性に攻められたな僕はもう…。っあ、ダメですよこんな所で…、そ、そこは…ダ」
聞いている通りそれ以外は基本軟派な感じを『装っている』けどね。
「ええええ。」

「装っている、ね。：紫でも本性は分からないんだ。」

「分からないわね。：というか相手にするのが疲れるから解りたくないわ。」

特に彼の言動に反応せずに妖怪たちは会話を続けた。

「……無視ですか、そうですか。まあ、別にいいんですけどね。」

いい加減服着ましようかね。：そう言って彼は落ちているズボンとシャツを拾い身につける。

「あらあら、随分前衛的なファッションセンスをしているのね。」

「つてうわぁ、さすがにシャツはドでかい穴を空けられましたからもう着れませんね。」

紫と九十九は穴をあけた原因である萃香を見つめる。

「わ、私は悪くないよ。偽物に服を着せた九十九が悪いんだ。」

「だって俺の能力じゃ服まで再現できないし、できてたとしても服に付いている血と匂いがないと疑問を与えますし。」

先ほどの明るく軽い感じの声ではなく、ゆったりと落ち着いた声で音を発する。

「え?。」

萃香は彼の突然の声のトーンの変わりように驚く。

「それにあれだけ自分に似せた人形を生成するのにはかなり時間が掛かるんだ。」

「あら？どれ位掛かるのかしら？」

「半日くらい。」

「まさか…あんだ…。」

「だから、ちゃんと言いましたよ。『脱いでも良いですか？』ってか脱ぎます』ってね。」

表十六回目（後書き）

能力の応用（同時に別の能力を発動すると得られるメリットのことなんです）については最初の異変前までに1話取って説明します。
幻想郷に海ないのに塩…こまけえことはいいんだよ！

裏十六回目

Side 伊吹 萃香

「えー、それじゃ、新築祝い兼伊吹さんとの勝負の約束と言う事で、乾杯の音頭は私、九十九 白が取らせていただきます」

あれから九十九邸に移動した私達は今、それぞれ彼が造った杯さかずきを手
に持っている。

もちろん、それらには私の瓢箪から注がれた鬼のお酒がなみなみと
入っており今にもこぼれそうだ。

「思えばつらい時もありました、苦しい時もありました。だけど！
私はようやく夢のマイホームを手に入れることができました。これ
もひとえに皆様のおかげでもあります。」

「音頭が長いと気分が冷めてしまうわ。…さっさと乾杯して頂戴。」
紫がアイツのセリフに割り込み文句を垂れる。

「そうだ、そうだ。大体この家を造ったのは私であんたは何も苦勞
してないじゃないか。」

調子の良い事をいつてるんじゃないよ。

「何やら、外野が五月蠅いので私の話はこの辺で…。では、かんぱ
い。」

「乾杯。」

彼女らは杯を互いに合わせ、口に運ぶ。

「……ゴクッ。……鬼の酒ってのは外の世界とは違ったキツさがありますね。」

若干、顔をしかめさせ九十九は感想を述べる。

「そりゃそうよ。……だけどうまいだろ？」

すでに私の杯は空っぽだ。

「おいしいです。けどストレートだとさすがに……。伊吹さん、瓢箪をこちらに。」

「……とすまないね。わざわざ注いでもらって。」

再び満たされた杯に口をつける私。

「この家を造ってくれた一番の貢献者ですからこれ位はしないと。家具も一通り造ってもらいましたし。」

私がついでに造ったテーブルやタンスに目をやると、九十九は新しい木製のコップを生成し杯の中の酒を移す。そこに空気中の水蒸気の密度を操り氷、水に変換し中に入れる。

「それはいったい何をしてるの？」

彼は何やら棒状のものを造りだし、それをグラスに突っ込んでいる。

「お酒を水で割って、飲みやすくしているんです。今、かき混ぜるのに使っているのはマドラーっていう物です。これでグラスの中のお酒の濃さを均等に行っているんですよ。」

鬼には関係の無い話みたいですね、そう言いながら彼は、カランカランと氷と酒と水が混ざり合う音に耳を傾る。

「へえーそういう飲み方もあるのか。私はお酒の密度を操って濃くできたり薄くできたりするから知らなかったよ。……だけど、なかなか良い音だね。」

私もその音に耳を澄ます。

「そう言えば、八雲はどんな外のお酒を伊吹さんに贈ったんですか？」

今まで黙って私達の様子を見ていた紫が、スキマを開く。杯の酒はあまり減っていない。

「…これよ。」

そこから何本か一升びんが出てくる。

「どれどれ、…へえーかなり良い焼酎ですね。しかも芋、米、麦、蕎麦一通りそろってる。」

「飲んだことあるの？」

紫が質問する。

「いえ、知ってるだけです。高いのでとてもじゃありませんが手が
でません。」

私はそれを聞いて閃く。

「だったら、今開けてみんなで飲もう！」

「……いいんですか？」

「…それでいいの？」

「いいよ！だってその方が楽しく飲めるだろ？やっぱりお酒は楽し
く飲まなくちゃね。」

……そう、みんなで萃って飲んだ方が楽しい。

私の顔を見たあと二人とも一瞬だけアイコンタクトを取っているよ
うに見えた。

「だったら遠慮なく飲ませてもらいましょう。」

「実は私もそのお酒の味が気になっていたわ。」

どうやら賛成してくれたみたい。

九十九が大きな容器と細長い筒を造りそれぞれに大量の水と水を入
れ、さらにコップをもう二つほど生成する。

そして、彼はスキマから出てきた酒瓶を側に寄せ、私達に尋ねる

「伊吹さん、八雲さん、お酒の種類と飲み方はどうなされます？」

いきなりで私は少し戸惑ってしまったが、紫はすぐに答えた。

「：私の分も作ってくれるのね。だったら、芋の水割りで割合は半々でいいわ。」

なんだか声色が少し嬉しそうに聞こえたのは気のせいだろうか？

：多分そうだろう紫はあまりそういうのを表に出さないだろうし。

「えっと、良く分からないし私もそれで。」

私も答える。

「解りました。」

九十九は慣れた様子で水割りを作っていく。

「：はい、芋の水割りですね。どうぞ。」

……きれいな木目。

透明なガラスとはまた違った美しさがある。

受け取った木製のコップを眺めてそんなことを思う。

「ありがとね。」

「わざわざ悪いわね。」

紫と私は九十九に礼を言い、そのお酒を飲む。

……おいしいね。

人間に作ってもらおうお酒がこんなにおいしいなんて知らなかったよ。

彼はただ黙って私達が飲んでいるのを見ていた。

……どうして。

「……どうして人間は嘘を吐くのかな？」

私は自然とそんなことを呟いてしまった。

昔を思い出す。酒盛りの最中人間に騙され、退治されそうになったことを。

あれ以来、私は人間とは酒を飲もうとしなかった。飲みたくなかった。

なのに今、九十九（人間）と飲んでいる。

紫は私を一瞥したが何も言わない。

「……随分と難しくて簡単なことを聞きますね。」

九十九が私にではなく、独り言のように話し始めた。

「嘘を吐くのは簡単です。…難しいのはその嘘をつき続けること。だけどそれが難しいから騙し、騙される関係ができてしまう。もし、その嘘がばれずに吐き続けることができたなら、それは本当になります。それが『人間』っていう生き物です。」

……簡単で難しい。

…簡単だから難しい。

紫が彼に問う。

「貴方にとって嘘は『簡単』？それとも『難しい』？」

彼はニタリと笑い、答える。

「僕ほど『人間らしい人間』はいません。」

それはケンカの時、私に言った言葉だった。

しばらく無言で見つめ合う二人。

沈黙を破ったのは九十九だった。

「…こういう哲学的な話はやめましょう。酒が不味くなります。」

「そうね。せっかく萃香が分けてくれたお酒なんだから、美味しく飲みましょう。」

「伊吹さんもそうしましょ。過去は過去、何があったか詳しくは知りませんが過ぎたことです。今を楽しく生きましょう。」

…今を楽しく…か。

「それもそうだね。九十九、酒のお代りを頼むよ。」

それは簡単なのかな？

「私もお願いね。米ロックで。」

難しいのかな？

「私もそれで頼むよ。」

…まあどっちでもいいさ、『鬼は鬼らしく』酒を飲むことを楽しむ
としよう。

こうして私達3人だけの宴会は太陽が顔を出すまで続いた。

裏十六回目（後書き）

前話ですが何も主人公は全てを解って人形を用意したわけではありません。あくまで、念のためにです。

今回は意図的に訳をしませんでした。

ちょっとした豆知識…水割りを作る時は先に焼酎を入れます。理由は対流を起こすためです。焼酎より比重が重い水が下に沈み、焼酎は上に上がるので上手く混ざり合います。お湯割りの場合は逆になってお湯を先に入れたほうがいいです。

…ってか鬼の酒って日本酒になるのか？だったら水で割るのはおかしいのですが…まあ、人間には割らないとキツイってことで。

主人公の能力の応用＋補足説明＋使える能力（裏16回目まで）

主人公の能力…『あらゆる能力を模倣する程度の能力』

使用条件――――

？ 相手の能力の『名前』を知らなければ使えない。

？ ？を満たしたうえで、自身がその能力を『五感』等（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、e t c :）で感じなければならぬ。その機会が多ければ多いほど能力は使えるようになる。但し、最大で相手の限界の6割となる。

？ 相手の『許可』をもらえれば限界値は8割となる。

？ 能力は『同時』に3つまでしか使うことはできない。

？ 相手を自身の手で『殺した』場合限界値はなくなり、同等もしくはそれ以上の能力を発揮できる。

補足

？については特にありません。

？についてですが、能力を模倣できるようになるための感覚には、マネする能力に対しての有効的な物があります。基本的には、視覚＜触覚＜その他の感覚 となります。有効度が高いほどその能力をマネできるようになります。例…人面樹の能力の場合 視覚＜触覚＜痛覚 味覚 こんな感じです。

作者のさじ加減なので都合主義と呼ばれる覚悟はできています。

？『許可』を貰っても相手の能力の8割まで使えるようになるわけではありません。ちゃんと？の手順を踏んでいるか、貰った後踏むかしないといけません。

？については少し特殊です。これは？さえ満たしておけば大丈夫です。なのに何故わざわざ人面樹に許可を取ったかと言うと紫に対して許可を取った後でないと殺せないという誤認識を植え付けるためと、単純に人面樹に対しての仕返しです。

応用

？についてです。

主人公は能力を同時に模倣することでメリットを得ることができません。彼が何故スキマの中に入り移動できるようになったのかもこれで説明します。

彼はまず100%模倣できる能力（あらゆる植物を操る程度の能力）を使い木を生やすと同時にその木の境界を操り、彼が操った植物に『限定』することでスキマに出入りでき、移動できるようになります。これは設置すればいつでも使えるようになるので移動手段（ゲームで言うワープゾーン）になると思います。これが得られるメリットです。メリットがあるということは当然デメリットもあるはずなんです。：まだ秘密。（言えない、まだそこまで考える事が出来ていないなんて絶対言えないorz）

◇16回目終了時時点で主人公が模倣できる能力

『あらゆる植物を操る程度の能力』（100%）

『境界を操る程度の能力』（30%）

- ・スキマに物を出し入れできる。
- ・人に直接触れることで意識を奪える。

『密度を操る程度の能力』（30%）

- ・水の密度を操ることができる。（他の物質は不可能。）

◇応用能力

- ・自身が操る『植物』の『境界』を開き移動できる。
- ・自身が操る『植物』の『密度』を操ることができる。

主人公の能力の応用＋補足説明＋使える能力（裏16回目まで）（後書き）

異変が起こる前に後書きか何かで主人公が模倣できる能力だけでも書くと思います。本当はこういうの作中で説明するべきなんだろうけど：あいにく文章力と構成力がががが：いつも通りお昼の12時にも投稿します。

表十七回目

宴会が終わり、リビングには多くの空瓶が転がっていた。

「飲むだけ飲んで、帰っていったな…。」

そこに紫と萃香の姿は無く、九十九一人が佇たたずんでいた。

彼は部屋をザッと片付け、今日これから何をするかを考える。

（今一番欲しいのは火を熾おこす手段だな。…これは恐らく香霖堂とかいう店で手に入るだろ。服と寝具もそこで手に入れるか…。）

魔法の森の入口にある古道具屋。店主の名前は森近 霖之助、妖怪と人間のハーフ。外の世界の物に興味がありそれを集めている。

人里で聞いた情報をツラツラと思いだし、彼はスキマに入れておいた物を取り出す。

（音楽プレイヤーに腕時計、結局壊されずに回収した携帯電話。これだけあれば、そこそこ良いものと交換してもらえらるだろう。）

九十九はそれらを仕舞い、外に出て顔を洗うために近くの川へ歩いて向かおうとする。

能力で移動したり、空気中の水蒸気を水に変えて洗わないのには理由があった。

（慣れていない能力を模倣するとひどく疲れる。）

昨日さんざん能力を模倣してしまい、さらに2日連続で不眠不休となってしまうた。

萃香が家を建てている間も彼は気づかれないように自身を模した人形を造っていたからだ。

（いい加減風呂に入りたいが…まず川に行って水をスキマに入れて、その後店に行ってマッチか何かを交換してもらって、家に戻って、風呂を焚かないといけないのか…。）

少しだけ溜息を吐く。

（香霖堂へ行くためには『木のスキマ』を使って移動しないと時間が掛かり過ぎるな…。疲れるが歩いて行くよりはマシだな。）

彼が顔を洗いついでに川の水をスキマに保存し、家の前に戻った。

突如凄まじい風が吹き荒れる。

九十九は砂塵が目に入らないように片腕で顔をかばい、目を薄める。

風が止むと、そこにはカメラと手帳らしきものを持った妖怪がいた。

「幻想の伝統ブン屋と言えはこの私。お初にお目にかかります、射命丸文と申します。」

そう言って礼儀正しくお辞儀をする射命丸。

「これはこれは、ご丁寧にどうも。射命丸さん、それじゃ、私はこの後用事があるのでまた今度。」

彼はお辞儀を返してその場を去ろうとする。：が彼女はそんなことお構いなしに話し始めた。

「本日はこの人面樹の森の主が変わったとの情報を入手したので、その新しい主について取材に来ました。貴方がこの森の新しい主でよろしいですか？（せっかく、八雲紫と天魔様が話をしているのを盗み聞きして掴んだ情報、そう簡単に逃がしませんよ。）」

「その質問の答えなら、『はい』です。：それじゃこれで。（その事を知っているのは十中八九、八雲紫が情報を意図的に漏らしたからだろうが：記者ね：これを利用しろってことか。）」

彼女は歩き出した九十九の手を掴み引き留める。

「ちょっとお待ちを。何をそんなに急いでいるんです？（まさかとは思ったけど、この人間が新しい主？これならすごい新聞が書けるかもしれないわ。）」

「実はこれから歩いて香霖堂という古道具屋に行かなければならぬのです。聞いた話によると魔法の森の入口にあるそうで。（訳…遠いなーきついなー道分かんないなー。）」

射命丸は彼の言葉にすかさず反応する。

「でしたら、私が連れて行ってあげます。その道中に取材を…。（これだけじゃ良い返事は聞けない、そんなことは解ってる。：だけ

ど貴方が断った瞬間がチャンス。」

「…でも歩きながら取材が余計疲れるから遠慮したいんですが。（訳…それに付き合ってやる理由がない。）」

男は嫌そうな顔をしている。

「（釣れた!）おや? 誰が歩いて連れていくと言いましたか。風を操る能力をもった私なら人間の一人や二人、浮かすことなど容易です。これなら文句はないですよ。（訳…私が運んであげますから取材を受けてください。断る理由はないはずです。）」

「なんと! それなら大丈夫ですよ。ぜひぜひお願いいたします。」

笑顔を浮かべた彼に射命丸も満足げだ。

「交渉成立ですね。……それじゃ行きますよ!」

再び風が吹き始め、二人は空に浮かんだ。

裏十七回目

Side 射命丸 文

第一印象は…ごく普通の人間…と。

…強いて言うならちょっと情けない感じかな。

空に浮かび、怖がっている彼の表情を見て私はメモ帳に記録する。

「…そう言えばまだ貴方の名前を窺っていませんでしたね。教えてくださいませんか？」

私が尋ねるとしどろもどろになりながら彼は答えた。

「な、名前ですね。綿受^{めんじゅ} 仁^{じん}って言います。」

……へえ。

「随分と変わった名前ですね。並びかえると前の森の主、人面樹^{じんめんじゅ}になります。」

…こちらを試した？

「へ、へえ。射命丸さんは頭の回転も速いみたいで…記者に向いますね。」

相変わらず顔は強張ったままだ。

でも解らないわね。何を思ってそんなことをしたのか。

「ありがとうございます。それでは本当のお名前を教えてください。」

「九十九 白です。九十九って呼んでください。」

「それでは九十九さん、質問させていただきます。まず最初に貴方は人間で間違いないでしょうか？」

「ええ、間違いないですよ。」

彼は頷きながら答える。

「∴では一体どういった経緯で人面樹の森の主になったのですか？」

私の質問に少し困った顔をしてみせる九十九。

「正確には『ならされた』と言った方が正しいですね。」

「ならされた？ いったい誰にですか？」

「八雲紫という妖怪です。知ってますか？」

「ええ、もちろん。∴でもどうして貴方だったのでしょうか…。思い当たる節はありますか？」

「なんでも僕有能力、果物と野菜を生やす程度の能力っていうのを知って貴方しかないと言われました。」

なるほど…最近、人面樹が調子に乗っているという話は妖怪の山にも入ってきていたけど、扱いやすい人間が現れたことでそっちに乗り換え、人面樹を切り捨てたワケね。

ご愁傷さま…逆らう相手をきちんと見分けないからそうなる。

「…だったら新しい主が人間だって新聞に書くわけにはいかなかったね。」

「えっと、どうしてですか？」

この人間は不思議そうな顔をしている。

…そんなことも解らないなんて、コイツなら八雲紫も上手く手のひらで動いてくれると判断したのかしら？

「もし、新しい主が人間だって書いたとします。すると前の主、人面樹に恨みを持っていた妖怪が貴方を襲いに来ます。八つ当たりだと分かってもそれなりの数がね。人里の人たちも同じ人間が珍しい野菜や果物を管理していると知ったら、いままでその森を訪れるのは2週間に一度、という規則は守られなくなるでしょうね。」

貴方にそれを防ぐ知恵、実力、威厳はないですよね？

「そもそも、そんなの無理です。お願いですから僕が人間だって記事は書かないでください。」

うろたえ、必死に懇願する彼、取材相手じゃなかったらとつくに話すのをやめてるわね。

「書かないから安心してください。というかそんな事を書いたら私が八雲紫にひどい目に合されます。」

幻想郷の秩序を乱すことを嫌う彼女ならその可能性は高い。

「だからと言ってこんなに面白いネタを他の天狗に渡すのはもったいないですから、その事だけを秘密にして記事にします。主になって他に何かありましたか？」

「そうですねー、昨日、鬼の伊吹さん、八雲さんと一緒に酒を飲みましたね。といっても僕はほとんどお酒を注いだり、作ったりしただけですけど。」

「鬼ともですか！？それはなかなか良い事が聴けました。見出しは『新しい森の主は妖怪の賢者と鬼と仲が良い！？』に決定。これで大抵の妖怪は貴方に近づこうと思わないわね。」

「ホントですか！射命丸さん、ありがとうございます。これで身の危険を心配しなくて済みます。」

「……まったくどうして私がコレ（九十九）のために動かないといけないのよ。盗み聞きはするもんじゃないわね。」

「いえいえ、こちらこそ良いネタを提供してくださってありがとうございます。新聞ができたら届けに行きますよ。初回は特別に無料で差し上げます。定期購読はそれを読んでから決めてくださって結構です。」

「ぜひお願いします。今から楽しみです。」

まあこれで一人、私の新聞の読者が増えてくれるならトントンとしましょう。

香霖堂が見えてきたわね。

彼も私の新聞を定期購読してくれる数少ない妖怪だけど…

「あつ、あれが香霖堂ですか？」

私達は降下し始める。

「そうですよ。…ところで最初から気になっていたんですけど。」

聞きたくてもあまりにも堂々としているから聞けなかったわ。

「…？　なんででしょうか？」

なんで…

「…なんで上半身裸なの？」

地面に着地する。

「ああ、これですか。気にしないでください。単なる趣味です。」

何の事も無いように言いきった…。

しかも、思いのほかいい笑顔で。

「そ、そうですか。風邪を引かないように気をつけてくださいね。それじゃ私はこれで…。」

知り合いと思われたくないのでこの場を早々と立ち去る私。

「本当に色々ありがとうございましたー！」

大きな声で手を振り見送るアレ。

……記事には変態という言葉も使おう。

裏十七回目（後書き）

主人公への射命丸の言い方の変化
彼↓九十九↓コイツ↓コレ↓アレ

表十八回目（前書き）

誤字修正に加筆しました。

表十八回目

射命丸文が素晴らしい速度で去っていった。

（『風を操る程度の能力』か、思わぬ収穫だったな。）

風を身にまとい、地面から浮かんでいる事を確認する。

（後、模倣できる事はせいぜい突風を起こすことくらいか。）

九十九は新しく使える能力については考えることをやめ、目の前の建物、香霖堂に足を向かわせる。

（森の主が変わっても大丈夫なように画策しようと思ったが…射命丸文、頭の回転が速くて助かったな。）

彼自身、新聞の内容を誘導したり変更させたりしなくて済んでしまった。

店の近くに木を1本生やし…

カラン コロン カラン

ドアを開け、中に入る。

そこには大中小様々な大きさのものが置かれており、店主は一番奥の勘定台らしき所で椅子に座って本を読んでいる。

「や……いらっしやい。服ならそっちに置いてあるよ。」

本から顔をあげ、客が半裸の男だと気づくと彼はそう言った。

（「やあ」って言いかけたが誰かと会う約束でもしてたかな？…それとも単に繁盛していなくて常連客が来たと思ったか…まあどちらでもいいさ。）

「わざわざ教えてくれてありがとうございます。だけど僕の買い物のメインは服じゃないんです。いや、もちろん懷と相談して服も買うつもりですけど。（訳…あんまお金ないよ。）」

「その格好を見ればわかるよ。いったい何をお求めで？」

「簡単に火を熾せる手段お求めで。」

あまり愛想がいいとは言えない店主に向かって答える。

「…火を熾せるね。だったらちようどいいモノがある。これなら懷にも優しく提供できるだろう。」

彼がさらに店の奥から取り出したのは手のひらに収まりそうな小さな八角柱だった。

「これは…一体なんですか？」

「僕が以前造ったミニ八卦炉…の失敗作だ。だけど火を熾すだけなこれでいいだろう。このスイッチを入れれば勝手に君から魔力を吸

い取り、火に変換してくれる。もちろん失敗作だから安くしてあげるよ。」

「その魔力ってのは私にもあるものなんですか？」

「さあ？君が魔法使いの素質があるなら使えるんじゃないかな？もしあったとしても修業をしないとその魔力の量が多いとは言えず、増えもしないけどね。」

（魔力にその量…ねえ。まるでゲームの世界だな。）

「成功作は今どこにあるんですか？」

九十九はそれを手に取り、スイッチを入れる。

「手くせの悪い魔法使いの友人に贈ったよ。」

するとミニ八卦炉から火がでてきた。どうやら火力調整できるツマミもついているらしい。

「そうなんですか…どうやら僕にも使えそうなのでコレ、買わせてもらいます。できれば予備が2つほどあると嬉しいんですけど…。」

男の言葉を聞き霖之助はさらに2つ失敗作のミニ八卦炉を取り出す。

「これでいいかな？…3つ合わせての値段なんだけ「これと交換でいいですか？」…ん？」

九十九は勘定台の上に携帯電話を置く。

霖之助はそれを取り感嘆の声をあげる。

「ほーこれは携帯電話っていいのか。連絡を取るために使うもの。……だがどうやって？見たところトランシーバーとあまり変わらないみたいだが……ぶつぶつ……ポケベルも似たような用途だったな……ぶつぶつ……。」

急に一人で考察を始めてしまった彼に戸惑う。

「あのー店主さん？」

「おっとすまないね。店の品物を見て分かるだろうけど、僕は外の世界のモノに興味があつてね。この携帯電話という物は初めて見たから取り乱してしまった。」

「それで交渉は成立ということでもいいんですか？」

「もちろんだよ。何なら服も好きなだけ持って行ってもらって構わないよ。必要な物があるならそれも。僕が売りたいくない外の世界のものは別に取ってあるから。」

「太っ腹ですね。それじゃ遠慮なく貰って行きますよ。」

九十九は店内にある服と寝具を見て回る。

そんな彼の様子を見て霖之助は質問をする。

「もしかして……これ（携帯電話）は無縁塚で拾ったものじゃないのかな？」

「無縁塚という場所は知りませんが、それは僕の持ち物でした。
(訳…僕は外人ですよ)」

(そこで外の世界のモノが拾えるのか…。)

九十九は適当に選んだ上着を着る。

「生きている外人人は初めて見たよ。」

驚きの表情を見せる霖之助。

「そうみたいです。服はこれ位でいいとして、ベットのするか敷布団にするか…悩むな。」

「両方持っていたらどうだい？外の世界の話を聞かせてくれるならいいよ。」

彼は外の世界についても強い興味を持っていた。

「お安いご用で。」

「ありがとう。だけどそれだけの量、持ち帰るのに苦労するんじゃないかな？……へえ、それは君の能力かい？」

霖之助はスキマに押し込まれていくモノを見て思う。

「まあ、そんなところです。外の世界の事についてですか…何から話しましょうかね。漠然とし過ぎて悩みますが、店主さんはどうやら電気製品のことに興味があるようですから、それについて話しま

しょうかね」

「ぜひ頼むよ…っとその前に自己紹介をしておこうか。いい加減君を君と呼ぶのがめんどくさくなってしまった。僕の名前は森近 霖之助、一応この店、香霖堂の店主をしている。よろしく。」

霖之助は相手に握手を求める。

「九十九 白が僕の名前です。こちらこそヨロシク。」

彼もそれに応えようと手を伸ばす。

カラン コロン

しかし、それは叶わず、二人は店に入ってきた人物に目をやる。

「いらっし…やあ、魔理沙。今日は何の用だい？」

「用が無いという事を伝えるのが用だぜ。」

そこには白黒のいかにもな魔法使いの恰好をした少女が立っていた。

裏十八回目

S i d e 霧雨 魔理沙

私が店に入ると珍しい事にそこには客がいた。

「いらっし…やあ、魔理沙。今日は何の用だい？」

「用が無いという事を伝えるのが用だぜ。」

いつものやり取りをする私達。

「それにしても香霖、客がいるとは珍しいじゃないか、こりゃきつと明日は雨だな。」

「それはちょうどいい。ここの所晴れが続いていたからね。」

私は勘定台にたっている彼らの側による。

すると、見知らぬ男が私の恰好をチラ見するとしゃべりだした。

「店主さん、こちらが先ほど会話に出てきた手くせの悪い魔法使いさんですか？」

「それは酷いぜ、名も知らない客人さん。私には霧雨 魔理沙っていうちゃんとした名前があるんだ。ただ死ぬまでものを借りる普通の魔法使いだぜ。」

私の言葉に目の前の男は仰々しく一礼をし、話し始めた。

「これはこれは失礼いたしました。まるで聖母のようなお名前をお持ちで、私は九十九 白と申します。以後お見知り置きを…。」

…なんとも胡散臭い奴だな。

「白々しいぜ、態度も名前も。…というか息子を磔はりつけにされた母親に似ているなんて言われても嬉しくないな。」

九十九って奴は軽く肩を竦すくめる。

「それじゃ、霧雨さんと呼ばせてもらいます。私の事は九十九と呼んでください。」

わかった、と返事をした後、私は香霖の方を向き話を再開する。

「ところで香霖、さっき私の話題が出たみたいだけどなんのことなんだ？」

「ああ、それかい？何、彼にちよつとミニ八卦炉について教えてあげたんだよ。」

……ミニ八卦炉、そういえば今日は本当に用事があつて香霖に会いに来たんだった。

「すっかり忘れてたぜ。香霖、八卦炉の調子が悪いから見てくれ。必要なら修理も頼む。」

私は勘定台の上に八卦炉を置く。

「珍しいね、君が用があってうちに来るなんて。明日は本当に雨かもしれないね。」

香霖は呆れた顔を見せながらもそれを手に取り、調べ始める。

「……随分無茶な使い方をしているようだけど、何に使ったんだい？」

中身を開けて部品を取り換えながら私に聞く。

「霊夢がスペルカードルール？っていうのを造っていてそれに付き合ってたらそうなった。」

「仲のよろしいことで。」

「霧雨さん、そのスペルカードルールってのは？」

九十九が私に質問してきた。

「よく知らないけど、妖怪と人間が対等に戦うための決闘法みたいだぜ。」

「へえー、この幻想郷にはそんなものもあるのか。」

彼は感心したような声をあげ、頷いている。

「…なんだかこの幻想郷の住人じゃないみたいな発言だな。」

「…はい、これで修理は終わり。魔理沙、彼は外来人だよ。」

そう言って香霖から八卦炉を渡される。

…思いのほか早かったな。

もう少し掛かっててもよかったんだが…っていうか

「九十九、おまえ外来人なのか!？」

「そうですよ。珍しいみたいですわね、けど雨は降りませんでしたよ。」

…よく妖怪に襲われて死ななかったな。

「まあ、死ぬような体験はしましたけど。」

あれ? 今、声出してたっけ?

「出してませんけど、そんな顔をしていますよ。さっきも何やら少女らしい顔をしてましたね。」

……………。

…まさか。

「いいですよね〜恋す「九十九、おまえ外来人なら魔法見たことないだろ?」せっかくだから取って置きのをみせてやるよ。ささっ、外に行こうぜ! 香霖もまたな。」……………。

私はこちら見てニヤニヤ笑っている九十九の手をひっぱってドアに向かう。

「店主さん、どうやら外の世界の話はまた今度時間があるときになりそうです。」

「なあに、九十九とは長い付き合いになりそうだからね。気にしないよ。」

互いに手を振り合っている二人。

カラン カラン

店を出てもしばらく早歩きを続ける私達。

……。

… …。

…よし、ここならさすがに大丈夫だろ。

歩くのをやめ九十九の手を離す。

「……どうして？」

「何ですか？」

…やっぱり白々しい奴だ。

「どうして私が香霖の事を好きだって分かったって聞いてるんだ！」

「聞きたいんですか？」

……霊夢にも香霖にもバレてないはずなのに、初対面のコイツがどうやって…。

「……魔法の森にある私の家で霧雨魔法店を開いてる。今度遊びに来てもいいぜ。（訳…何かあげるから教えろ。）」

九十九はいい遊び相手を見つけた、と返事をしてその理由をしゃべり始めた。

「ただ鎌をかけたただけなので別に大したことじゃないですよ。敢て理由をあげるなら…用もないのに何度も店に尋ねているようだったし、僕と会話していてもほとんど店主さんのほうに目を向けていたこと。聖母って言われた時も彼の反応を気にしてましたよ。…それと一番の決め手なんですが…。」

すごく細かいところまで見られてた……なんだコイツ。

「……決め手は？」

九十九は片目を瞑り、人差し指を一本唇に乗せる。

妙に似合ってるのがムカつくな…。

「恋する乙女は美しい。」

「マスタースパーク！」

表十九回目

S i d e 霧雨 魔理沙

「恋する乙女は美しい。」

そう言われた瞬間私は右手にミニ八卦炉を持ち、魔力を込める。

すぐに魔力は充填され、発光 시작했다。

「マスタースパーク！」

自身が後ろに吹っ飛ばされないように左手で補助をすると、八卦炉の中心からレーザーが放たれる。

標的はもちろん私の射線上にいる九十九。

……あ、これ殺しちゃったかも。

…いやでも考えても見てほしい。

今日、初めて会った男にいきなり好きな人を言い当てられ、その上で『恋する乙女は美しい』って口説かれたんだぞ!?

気持ち悪いことこの上ないだろ!

ひょっとしてコイツ私のストーカーなんじゃないか?

…うん、そうだきつとそうだ。だったらさっきまでの言動に納得がいく。

だからこれは反射的な自己防衛なんだ。仕方ない事なんだ。

私は悪くないぜ。

それにこれで私の恋の秘密を知る者はいなくなるんだ…ちようどいいじゃないか。

「なるほど、これが取って置きの魔法ですか。」

…何普通に木の盾で防いでるんだよ。どっから出したんだよそれ。

まあ、人殺しにならなくて済んだんだけどさ。

こう…自信ってものが…。

「…思ったより凄くないですね。僕が作った盾さえ破れないなんて…。」

明らかに落胆した様子で私に言ってきた。

カチン

「その言葉、後悔するぜ。せつかく止めようと思ったのに。」

私は体内の魔力を集め八卦炉に込める。

レーザーの直径は3倍に膨れ上がる。

「おお！…これは中々。」

ミシ、ミシミシ

「どうしたんだ？ご自慢の木の盾が悲鳴をあげてるぜ。」

九十九の顔から余裕がなくなっていつてるのが分かる。

ミシ、バキ、バキバキ

「分かりやすい顔してるのはそっちも同じみたいだな。今のうちにさっきの言葉を『バキ！！』はは、残念、どうやらもう遅かったみたいだ……ぜ？」

……あれ？

どうしてまだ盾が残ってるんだ？

どうして私の右手の八卦炉が粉々に砕けてるんだ？

「いやはや、もう遅いですけど先ほどの言葉を撤回します。」

九十九が苦笑しながら私を見ている。

「な、なんで？修理したばかりなのに…。いやそもそもこんな簡単に壊れるはずが…。」

「壊れますよ。…だってそれ失敗作ですし。」

「何を言って……その右手に持ってるものは何？」

「何に見えます？」

……。

「そんな怒らなくても…ちゃんと返しますよ。ほらっ。」

アイツが投げってきた物をキャッチする。

……本物の八卦炉だな。

「いつ、盗ったんだ？全然気づかなかったぜ。」

「貴女が僕の手を握り、店を出ても『離さなかった』から僕の心は^{ハート}貴女に盗まれてしまったのでしょ。だから、貴女の大事な物を盗

み返したのですよ。」

九十九はうっとりとした声で私に伝えてくる。

「なんていうか…正直に言うが気持ち悪いぞ。その言い回し。」

…店を出たあと、思い当たらないな。

「酷い事言いますね。僕のハートは失敗作の八卦炉なんですよ。貴任にとって貴女も店主さんに告白して来てください。（訳…傷ついた私はガラスのハートの持ち主。貴女も振られてハートを粉々にしましょうよ。）」

「なんでそうなるんだ！？私の事は関係ないだろ！ってか振られる前提で話を進めるなよ！」

いきなりそんなことを言われ怒りと羞恥で顔が熱くなるのを感じる。

「残念ですね、振られて始まる恋もあるというのに……………せつかく傷心した霧雨さんを狙おうと思っ「おい、声小さくしても聞こえてるぞ。」……………なんの事かな？」

ひゅゝひゅゝと吹けていない口笛で誤魔化そうとするなよ。

……何処までが本気なんだか…。

「何処かは本気ですよ？貴女もそれは分かっているはずですけど。」

一瞬だけ無表情になってこちらを見透かすような事を言ってくる。

「…人の心を読むなよ。」

「読みやすくて弄り甲斐があるほうも悪い。」

すぐにまたニタニタ顔に戻す九十九。

「おまえとは仲良くなれそうにないぜ。」

私は右手に持っている八卦炉が本当に本物かを再度確認し構える。

「それでも良いですけど、明日貴女の店に遊びに行くことに変わりは無いですよ。（訳…何かあげるという約束は守ってもらいますね。）」

彼の前に1本の木が生えてくる。

…能力を使えるのか。

「歓迎するぜ。…但し、来る事ができたらな！」

『恋符 マスタースパーク』

再び放たれた私の魔法は九十九の姿を隠していた木ごと貫く。

だが、そこにアイツはいなかった。

……逃げたな。

まあ素直に食らってくれるとは思ってないさ。

「まったく、やっかいな奴と知り合っちゃったぜ。」

思わず一人愚痴ってしまう。

「誰と知り合ったの？魔理沙。」

振りかえるとそこには地面に着地している霊夢がいた。

「霊夢とは正反対な奴。」

「ふうん、まあなんでもいいわ。それよりも魔理沙、私はこれからスペルカードの事について霖之助さんの所に相談に行くんだけど貴女もくるでしょ？八卦炉の調子も悪いつて言ってたし。」

霊夢は興味がないのか、九十九について何も聞いてこない。

「いや、実は今日はもう行って修理してもらったんだ。明日は家に客人もくるみたいだし、私はもう帰るぜ。」

「そう。でもいつも飛ぶときに跨っている箒がないみたいだけど？」

「……香霖の所に忘れた。」

特に何も言わず私達は並んで歩きだした。

裏十九回目（前書き）

ちよい修正しました。

裏十九回目

森には男が一人、湯船に浸かっている。

九十九は家にある露天風呂に水を入れ、八卦炉で火を熾したあとやつのことで入る事が出来た。

目の前の景観を楽しみながら彼はまったりのんびり昼間の事を思い出す。

（あの店主が使っていた『道具の名前と用途が判る程度の能力』：は模倣するにはかなり制限がつかぬ。名前を知ってさらにその道具に触らないと用途が分からない：か。）

「そして、あの魔法使いは：まんま『魔法を使う程度の能力』つと。」

手に持っている失敗作の八卦炉が光り始め、それを確認すると彼はスキマに仕舞う。

（：護身用にするか。これで彼女が『人ではなく』半人半妖の意識を奪えるかどうかの機会を無くしたことはチャラとしよう。散々からかう事も出来たし。）

あの時もし魔理沙が店に入ってきたなかったら霖之助は九十九と『手

を握った』だろう。

もし意識を奪えたなら彼はどうしたのだろうか…。

「明日は魔法の森に行くかな。霧雨さんのお店も気になりますし。」

まるで、誰かに伝えるように一人言の葉を『風』に乗せる。

（……そろそろあがろう。やっぱり風呂はいいな、疲れが流れ落ちるようだ。）

九十九は立ち上がり、脱衣所に戻ろうとする。

「今日の夕食はきんぴらゴボウに冷製トマトスープ、炊き立ての白米、食後の果物デザートも山盛りです。」

……なんなら名も知らぬあなたをお相伴しましょうか？

森には彼の声だけが空しく響く。

（……まあそれでもいいさ。）

体を拭き服を着替え、台所に向かう。そこには香霖堂でついでに貰

った、調理器具が洗って置いてある。

テーブルに炊いていたお米とすでに作って置いた料理を茶碗と皿によそって並べた。

「いただきます。」

彼は手を合わせた後、箸を使い食べ始める。

（……今はいいがやっぱり調味料で誤魔化すにしても飽きがくるかな。この森にある川には魚がいないようだったし。明日、ついでに魔法の森の近くにあるらしい霧の湖に行つて魚でも釣るか。）

人面樹の森には本当に彼以外の生き物が暮らしていない。

九十九は食事を済ませ、ご馳走様と言うと食器を片づけた。

自室に入ると彼はベットに寝転がり、最後にもう一つ大事なことに
ついて考えを巡らせる。

（木のスキマで逃げる時、少しだけ視界に入つた紅白の巫女っぽい
衣装を着ていた少女……あれが博麗 霊夢だろう。彼女に外の世界に
戻れるよう頼んでも……八雲紫が何かしてるだろうか意味ないな。か
といって能力の名前を知つたあと殺したとしても、結界が壊れてこ
の幻想郷の世界も壊れる可能性がある。それじゃ自分の身が危ない
な。……そもそもあの巫女が結界関係の能力なのかも確実じゃない。）

…今のところ、どんな関係にするために行動するかは保留だな。

そして…何より自分にとってあの巫女は恐らく………。

そんなことを思いながら彼は眠りについた。

S i d e 八雲 藍

「……なんなら名も知らぬあなたをお相伴しましょうか？」

…！？

…待て、動揺するんじゃない。『少しでも動いたら』私の存在を確
実としてしまう。

前に一度失敗したのにまた気づかれてしまったら、紫様にもっとひ
どいお仕置きをされてしまう。

九十九は紫様の行動を予測して自分の行動を監視する存在を派遣す

る、だが確定はできない。

だから鎌をかける、いるかないか分からない存在に…私もそれを予測していただろう！

………行っただか。

私の存在はばれていないはず。最初から最後までアイツの前で『動いていない』のだから。

気づいていたなら見逃すことに意味は無い。

…家の中までは見ることはできないな。

私は『葉』の姿から元の姿に戻る。

なぜ木の姿ではなく葉なのか…それはもちろん地面に足は付けないためでもある。

それだけではない。恐らく九十九ならこの森に生えている木の数、場所くらいなら把握できるはずだ。

それなのにいきなり『根』が繋がっていない木が現れたなら、まずバレてしまう。

だが、葉っぱならどうだ？

一つの木に何千枚という枚数があり、根にも繋がっていない。さすがにこれらを完璧に覚えることは不可能だ。

故に気づかない、いや絶対に気付けなかったはずだ。

私は心を落ち着かせて報告しにその場を離れた。

「紫様、九十九は明日魔法の森に行くと洩らしていました。」

「そう、ご苦労さま。引き続き様子が見れる状態なら監視を続けて頂戴。」

「了解しました。…ですが何故そこまで彼にこだわるのですか？」

確かに人間の中では油断ならない相手と思うが、そこまで脅威になるとは思えない。

なんだったら私の美貌の虜にしまってもいい。傾国の美女と呼ばれた私が…。

紫様は私の質問に答えずただ妖しく微笑んでいる。

その視線先には花瓶に活けてある1本の白い薔薇があった。

裏十九回目（後書き）

小説の中に出てくる「絶対」という言葉ほど信用ならない物はないと思います。

そもそも絶対なんて絶対ないです。：あれ？ならそれはすでに絶対で（ryみたいな終わりのない思考を始めて時間を無駄にしています）うのは誰多くの人が通る道ですね。

まあ、何が言いたいのかというと、主人公は藍の存在に気づいています。そのヒントはこの話の『』の中に：そして気づく理由が少々強引です。目良すぎだろ！絶対ないよ！っていうツツコミは無しの方でお願いします。

答えは本文にもいつか書きますが次話の後書きにも書きます。なので気になる人は次話の後書きまで読んでください、そうでない人は飛ばしてください。

表二十回目

早朝、九十九は目を覚まし部屋の窓を開け新鮮な空気に入れ替える。

（今日も晴れ、出かけるには丁度いい。）

彼が外の景色に目をやると射命丸 文がこちらに飛んで来ていた。

「窓から失礼！清く！正しく！射命丸です！おはようございます、九十九さん。」

「おはようございます、射命丸さん。朝からご苦労様です。…まさかもう新聞を書き終えたんですか？」

互いに挨拶を交わした後、九十九は質問をする。

「記事のネタは鮮度が命、1日も無駄にはできません。（訳…もちろん書き終えましたよ。）」

射命丸はそう言って彼に新聞を一部渡す。

「…仕事も早いなんて憧れちゃうな。えっと…何々…」

記事に目を通し始める九十九。

大まかな概要はこうだ。

『文々。新聞　××号　記者　射命丸　文』――

人面樹の森の主が交代！？いや変態！！新しい森の主は妖怪の賢者と鬼と仲が良い！？

先日私、射命丸　文は独自のコネによりある情報を掴んだ。それは驚くべき事に人面樹の森の主が変わったという情報だ。さっそく私はそれが真実なのか調べるために森に向かった。

森に入り、暫く探索すると私はある生物と出会ったので、すぐソレに取材の許可をもらい開始した。

射命丸（以下　射）「貴方のお名前を窺っていませんでしたね。教えてくれませんか？」

相手「綿受　仁っていいいます。」（以下　仁）

綿の回答に私は脳を回転させ、ある可能性に気づいた。

射「随分と変わったお名前ですね。並びかえると人面樹になります。」

綿受　仁という漢字をあて変えてみる：免樹　神。森の主、人面樹が樹を免れ神まぬがとなった。そういう可能性に…。

姿は変われど人面樹と思われる相手の取材を私は続けた。

仁「そうですねー、昨日、鬼の伊吹さん、八雲さんと一緒に酒を飲

みましたね。」

多くの妖怪の間に知れ渡っている人面樹と妖怪の賢者の不仲説。

それを否定する言葉が出てきた。おまけに鬼との仲が良い発言も…。

取材が終わり記事を書いている途中私はある仮説を立ててみることにした。

恐らく、先ほど記述した不仲説は正しかったものであろう。では何故この関係が変わったのか…それは人面樹がさながら、蝶という種族の虫のように幼虫から成虫へ華麗なる完全変態をしたからなのだろう。

これならばあて漢字の説明もつく。

つまり人面樹の森の主は変わったという情報は変態したという情報の方が正しく解釈できているだろうと私は思いこのような見出しにした。

取材の終わりに定期的な独占取材を取り付ける事ができたので新しい事が判明次第新聞に載せていくつもりだ。

その記事を読み終わり九十九は射命丸にお礼を述べる。

「ありがとうございます。これなら色々な妖怪がこの森に来ることはないですね。安心しました。」

（ちゃんと独占取材を取り付けたって示すことで他の記者を寄せ付けないようにしてるな。）

「成り行きだから気にしなくてもいいですよ。…それよりも定期購読はしていただけますか？」

すると彼は泣きそうな顔で射命丸に謝る。

「ごめんなさい！記事もおもしろいですし、そうしたいのは山々なんですが生憎とお金を持っていないんです…。」

「…：…そうですか。でしたら貴方の能力で育てた果物や野菜で構いませんよ。」

「本当ですか！それならぜひお願いいたします。」

彼女の提案にまだ若干涙目であるが九十九は満面の笑みを浮かべる。

「…え、ええ。それなら新聞ができたらまた届けに来きますね。私はこれからこの新聞を配らないといけないので今日はこの辺で。」

「また、射命丸さんに会えるのを楽しみにしています！」

彼は大きく手を振りながら射命丸が再び空へ舞い戻るのを見送った。

（定期読者が増えたのはいいことね。……関係ない事だけど少し、ほんの少しだけ彼の事をかわいいと思ってしまったわ。）

表二十回目（後書き）

前話の説明…主人公は射命丸の能力で風を吹かせ視界に入っている木々の葉を揺らしました。その中で不自然に揺れていない葉が藍だったわけです。

…きっと彼は外の世界で何か武道でもやっていたんでしょうだから動体視力もパナいのです。門番を気絶させようとしたときもそれらしい動きしてましたしきつとそうです。

裏二十回目（前書き）

短いです。ってなわけでお昼にも上げます。

裏二十回目

九十九が射命丸から記事を受け取り適当に朝食を済ませた後、木のスキマで香霖堂の入口まで移動した。

そして彼が魔法の森に入っておそよ一時間が経過していた。

あたりは随分湿気ており、外に世界では見たことのない茸が多く生えている。

瘴気や胞子が体内に侵入しないよう風を纏まといながら奥へと進む。

(……あれか？見たところ洋館みたい建物が建ってるが。)

九十九の視界にはきれいなレンガ造りの建物が建っており、近付くと庭に何やら人影らしきものが見えた。

「……僕は夢でも見ているのでしょうか？人形のように美しい女性が人形を作っている。もし、夢でないなら貴女のお名前を教えるてもらえますでしょうか？」

彼は椅子に座っている彼女の前で片膝を付き頭しうべを垂れる。

「…アリス・マーガトロイド。珍しいわね、人間がこの森にやって来るなんて。」

男の態度を怪しみながらもアリスは答える。

「ウサギは追いかけていないのですが、どうやら外来人である僕は
ワンダーランド
不思議の国に迷い込んでしまったらしい。：残念ながら夢である
ことには変わりませんが。」

「ここには気の狂った兎はいないわ。だけど幻想郷を夢と例えるの
は言いて妙ね。……偶には人間とおしゃべりするのも悪くないわ、
座ってちょうだい。（外の世界の人形の事も聞きたいしね。）」

彼女の周りに置いてあった完成した人形が動き出し、新しい椅子と
カップを持ってくる。

さらに別の人形がテーブルの上のティーポットを持ちあげ紅茶を注
ぐ。

それらの動作はスムーズで一見すると彼女が動かしているようには
見えない。

「…人形を作るのが好きみたいですけど、操るのもお上手で。僕
も木の人形は作れるのですが上手く操れるかというところでもない
んですよ。」

九十九は立ち上がり、地面から木偶が出てくるがソレの動きはぎこ
ちない。

「良かったら教えてくれませんか？精一杯マネしたいんですが？僕
が茶受け…ではありませんがその代りを。」

椅子に座ると林檎を生成し、スキマから包丁を取り出し皮をむき始
める。

「（能力を持っているのね）別に構わないけれど魔法を少しは使えないと無理よ。外来人の貴方にそれができる？」

「つい最近、模倣^{まか}えるようになりましてね。…はい、どうぞ。」

木の皿にいくつもの兎の形をした林檎が並べられた。

「…なら大丈夫そうね。手先も器用みたいだし。それじゃ、さっそく教えてあげましょうか……えーつと貴方、名前は？」

「九十九 白。 九十九と呼んでください。Mysterious（不思議な）マーガトロイド。」

彼は片手を胸に当て、軽く頭を下げた。

裏二十回目（後書き）

ワンダーランド…幻想的な架空の場所や、現実のなかで夢が実現する場所を指し示す言葉

最後のMysterious（不思議な）はMistress（女性の敬称のミス・ミセス

を省略していない語句）という意味も含みます。不思議の国のアリスの原作でHistory（歴史）とMystery（謎）をかけた言葉遊びがあるのでそれを少し変えて書きました。……今に始まったことじゃないですが分かりにくく！！

あと萃香と勝負する時、動かさなかったのはこういう理由もありました。

…気を狂わせる兎ならいますがね。

表二十一回目

Side アリス・マーガトロイド

九十九に人形の操り方を教えて4、5時間になる。

彼は私が一度見せたり教えた人形の動きをあっという間に習得していった。

……外人ってみんなこんなのかしら？

「とりあえず一通りは教える事ができたわ。普通はここまでできるようになるのに数カ月、下手すれば数年はかかるんだけど……。」

「Ms・マーガトロイドが教えるのが上手いんですよ。…それに貴女みたいな美女に教えられたら余計頑張っちゃいますよ。」

ありがとうございます、そう言いながら彼は操っている3体の木偶にお辞儀をさせた。

その動きによどみは無い。

「そろそろお昼ご飯の時間ね。ついでだから、貴方も食べていきなさい。」

彼を鍛えている間に私は別の人形を使ってカレーを用意しておいた。

「…本当に何から何まですみません。そう言っていただけなら有り難く食べさせてもらいます。」

私と九十九は運ばれてきたカレーをスプーンを使い口に持っていく。

「そういえば貴女は最初、幻想郷を夢に例えるのは言いえて妙だっ
て仰っていましたがどんな意味があったのですか？」

食事を進めながら彼が私に話しかけてきた。

だから、私は答える。

「どんな意味があると思う？」

質問を質問で返す、そんなことは普段の私なら絶対にしないだろう
けど、この目の前の外来人ならなんとなく答える事が出来そうな気が
した。

「そうですね、外来人である僕に聞きたい事があるから貴女はこ
んなにも親切にしてくれた。それと関係はありそうですね。」

ニコニコと笑顔を浮かべながら私を見つめる彼。

…やっぱり気づいていたのね。

「人形が好きな貴女の事だ。きっと外の世界の人形ついて聞きたか
ったんですね。」

それも正解。

九十九は目を瞑り何かを考えているようだ。

「しかも『夢』…ですか。人形に対して何か夢を叶えたいことがある。」

ゆったりとしてそれでいてとても落ち着く声で彼は話し続ける。

「あれほど見事に人形を作り、操れる貴女がまだ望む事…となると限られてきますね。それは…。」

自分の意志を持ち、自分の意思で動く、完全な自立人形…ですか。

「…そう、それが私の夢。」

他人には無関心な私が

「九十九には何かある？」

あまり会話をしたがない私が

「叶えたい夢が。」

初めて会った人間に興味を持ち、話しかける。

目をゆっくり開き、九十九は私と目を合わせる。

……人形のような瞳をしてるのね。

私を見ているのか、別のところを見ているのか、それとも何も見ていないのか…

分からないから人によっては怖く感じてしまうかもしれないわね。

彼は一瞬口を開きかけた…だけど何も言わずに優しく微笑む。

……。

無言の時間が暫く流れる。

「さあ？ どうでしょうね。ただ、一つ自分の考えを述べるなら…。」

沈黙を破ったのは彼だった。

「夢と言うのは誰かに見せてあげるもの、そして…貴女のソレは目標とするべきだと思います。」

…夢ではなく目標…ね。

「そうすることで手の届く距離に感じる事が出来ると思います。…
だけどそれでも辛い時は。」

「…ツライ時は？」

「僕が慰めてあげますよ。」

甘い、それこそ私がカレーの隠し味に使ったハチミツよりも甘い声
で彼は囁く。

そして私の頭に手を置き、髪を撫でてくる。

「…え？ いや？ その？ え！？」

いきなりの事に状況を理解できていない私がいる。

「…そして二人で意思を持つ子供という名の…危険ですね。」

全部言い終わらないうちに思いっきり顔面に殴りかかる。

…が簡単に避けられてしまった。

まるで私がそう行動するのが分かっていたかのようなね。

「そんなに照れなくてもいいじゃないですか。」

彼はニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべ、私の体を舐めまわすように見てくる。

気持ち悪い視線に思わず彼から距離をとる。

「黙れ、喋るな、口を開けるな、そして今すぐ私の視界から消えて頂戴。」

…ホント台無しね。

そう言うのと九十九はそそくさと私の庭から出ていった。

本当に何もしゃべらずに!!

…結局、私は外の世界の人形についても知ることなく、アレにただ親切を働くだけとなってしまった。

裏二十一回目

Side 霧雨 魔理沙

昼食を済ませても私は珍しい事に外には出かけずに店（家）にいる。
それというのも客が来るからだ。

カラン コロン

店の扉が開き、招いてしまった客が姿を見せる。

「…いらっしやい。」

やる気がないのが自分でもわかる。

「ただいま、愛しい」「やめろ、気持ち悪い。ここはお前の家じゃないぞ。」……なんと!？」

九十九は驚きを体全体で表現しながら私の傍に寄って来る。

「…で何が欲しいんだ？」

「その前に…道中で見つけたんですがこれ、どんな茸か分かりますか？」

彼は机の上にマダラ模様が付いた紺色の茸を置いた。

私はそれを手に取り調べる。

「へえ、珍しいモノを手に入れたな。この茸は魔法の森にだけ生えてるんだが滅多に見つけることはできないんだ。これを煎じて飲むと喘息がかなり良くなるだぜ。その副作用として急激な睡眠欲が襲ってくるが使い方を間違えなければ不眠症にも効果的だ。」

「さすがこの森に住んでるだけあって詳しいですね。」

「それほどでもないぜ。」

九十九に茸を返す。

「これで恋の病を罹ってしまいい夜も眠れずに過ごすことは無くなりそうですよ。何なら霧雨さんにも「いらない。」：そうですか。」

私が有無を言わず断るとコイツは店内を物色し始めた。

……暇だ。

「：…そう言えば霧雨さん、昨日、貴女最後に『恋符』がどうか仰っていましたか？あれは何だったんです？」

「あああれね。……（暇つぶしに）丁度いいか。お前と別れた後霊夢：私の友達なんだが、ソイツがスペルカードルールについて大体決めたみたいだから教えとくぜ。」

「……でこれが技名を契約書形式で記した契約書だぜ。これがスペルカード。」

「なるほど…中々おもしろいですね。くくく、それにしても『恋符』…ですか、なかなかいいセンスですね。」

「…うるさい。別にどう名づけようと私の勝手だ。」

「御尤も。それじゃ、霧雨さん。これを作る道具を一式ください。」

……。

「そんなものでいいのか？もっと店にはいい物が置いてあるぜ？」

これらは少し『魔力を込めた』、墨と紙に過ぎないんだが…。

「僕が欲しい貴女の心はすでに売約済みですしね。……それとも返却されるであろうソレを予約してもいいんですか？」

反応したらダメだ。こいつを喜ばせてしまうだけ。

「…ほら、これでいいんだろ？」

一式が入った箱を少々乱暴に手渡す。

「どうもありがとうございます。作り方は先ほど説明してくださったようにすればいいんですね？」

九十九は中身を確認しながら私に尋ねる。

「そうだけ。けどまだこの決闘法が流行るか分からないから使う機会があるとは限らないぜ。」

彼は確認し終わると店を出ていこうとする。

引き留める理由もないので私はただその背中を見つめる。

カラン コロン カラン

九十九がいなくなり、店内には私しかない。

「……やっぱり、気持ち悪いな。」

小さく呟く。

気障なセリフを吐かれたから？

…違う。

上手く言えないが、アイツの『在り方』が気持ち悪いんだ。

「……なんだか無性に霊夢に会いたくなっただぜ。」

箒を手に取り、私は博麗神社へ向かうことにした。

表二十二回目

霧雨魔法店を出発した九十九は魔法の森を抜け、霧の湖までやってきた。

能力で適当な釣り竿を作り、糸は人形遣いに教えてもらった魔法の糸を、餌は地面に埋まっていたミミズを使っている。

（さすがにこの夏の時期の昼間からはなかなか釣れないな。）

彼が糸を垂らし、かれこれ数時間になる。

その成果は良いとは言えず、ツタで作った魚籠ぎくには食用とは思えない魚が一匹と大きなカエルが数匹入っているだけだった。

（カエルはいいとして…この見たこともない魚は食べる気がしないな。）

彼はそろそろ見切りを付け、その魚を逃がした後家に帰ろうかと腰をあげた。

その時…

「おい、その人間！あたいの縄張りで勝手に何してる？」

九十九の目の前に水色のワンピースのようなものを着た少女が現れた。

「…何してるように見えますか？」

ただ、普通の少女と違うのはその背中には羽のような物が付いている事だ。

「そんなもの決まってるわ！あたいの玩具おもちゃの蛙を独り占めしようとしてるんですよ！」

彼女は彼の手を持っている魚籠を指さす。

すると九十九は何を思ったのか少女に頭を下げ、それを差し出し懇願し始めた。

「それは違います！…実は私はこの湖の主である貴女にお願いがあつてここに来たのです。これはお願いを聞いてもらうための贈りものなのです。」

彼女は魚籠の中身を確認すると予想以上に蛙が入っている事に喜びの表情を見せる。

「おお！いっぱい！…ん、それなら今回は特別に聞いてあげない事もないわ。言ってみなさい。」

両手を腰に当て精一杯胸を張る少女。

「先ほどこの幻想郷に新たなスペルカードルルと言う物ができました。それは妖怪と人間が対等に戦う決闘法なんです、その戦い方を一緒に考えてもらいたくて…。」

「あたいは妖怪じゃない！妖怪にも負けないさいきょーの氷の妖精、

チルノよ！」

「これは失礼しました。チルノさん、いえもし手伝ってくれるのなら師匠と呼ばせてください！…そして今なら妖精の中で一番最初に遊ぶ事が出来ますよ？」

「ししよー…いちばん。」

チルノはほわわんとした顔になる。だが見られているを思い出すと再び胸を張る。

「いいわ！手伝ってあげる！今からあんたは弟子一号ね。名前は？」

「？十？（つくも）といいます。ありがとうございます、師匠！」

「ツクモね、覚えてたわ！あんたはあたいの一番弟子なんだから二番目にさいきよーじゃないといけないわ。だから手伝うついでに鍛えてあげる。覚悟はいい？」

「はい！自分、どこまでもししよーについて行きます！」

男はそれはもう素晴らしい返事を蛙、いや返す。

「よろしい！だったらまずは蛙を凍らせるわよ。それができないと話にならないわ！」

そういつて氷の妖精は魚籠から蛙を取り出すと氷漬けにした。

「次はツクモの番！やってみなさい！」

「……は？え？あ、はい！ですがししょー、自分にはししょーのマネをするなどおこがましくてとてもとてもできません！（氷を操る？…違うな、彼女の空気自体が冷たいから正確には冷氣…か。）」

「そんなことは関係ないわ！あたいがいいって言ったらいいの！できないなら破門よ！」

「厳しいですししょー。でも自分負けません！おおー！ー！ー！」

九十九も蛙を手に取り氷漬けにする。

チルノはそれを手に取り観察する。

「……ぜんっぜんダメね！時間かけすぎ、形が悪い、中の蛙が動いてる！こうするの！」

彼女はもう一度氷漬けにするとソレを彼に渡す。

「はい！もう一回！」

「サー！イエッサー！」

傍から見るとそれは大人と子供が楽しく遊んでいるにしか見えなかった。

……結局、九十九がソレを完璧にマスターするまでに二時間、弾幕ごっこの説明に一时间、チルノのスペルカードを完成させるまでに

二時間、弾幕の練習に一時間費やした。

すでに太陽は沈んでおり、湖にはすっかり疲れ切った二人がいた。

「や、やっと終わりましたね。ししょー。」

「……そ、そうね。」

「そろそろ自分、家に帰りますね。今日は本当にありがとうございました。」

九十九は木のスキマを開き、中に入ろうとする。

「……まだ！ まだ一番弟子はさいきょーの二番目になれてないわ。」

チルノの声は少し寂しそうだ。

「そうですね。自分なんてまだまだししょーの足元にも及びません。」

「だったら「だから、また今度、自分を鍛えてもらえるとうれしいです。」……あ、当り前よ！ 弟子の面倒は最後まで見る。それが師匠っていうものなんだから。」

最後もやっぱり彼女は胸を張り、九十九を見送った。

裏二十二回目

S i d e チルノ

大ちゃんとケンカした。

きっかけはなんだっただろう…すごく些細なことだったと思う。

だけどお互いに謝る事ができず、意地を張り別れてしまった。

あたいがふてくされて湖の上を飛んでいると図々しい人間を見つけた。

氷漬けにしてあげようと思ったけど蛙をたくさんくれたので弟子にしてやった。

ソイツを鍛えてあげている間はとても楽しかった。

一緒にすべるかーどっていう奴を作った。

弟子がそれらはとてもキレイだと褒めてくれた。

でも心のどこかで大ちゃんを気にしている自分がいた。

あたいがさりげなく友達と仲直りする方法聞くとツクモは素直になるのが一番だと言った。

どうやったら素直になれるの？と聞いたら、『自分の心』に聞くとなれると答えてくれた。

だから、自分の心って何？って聞くと『あたいがあたいで在る』ために必要なモノって教えてくれた。

なんだか難しい…だけど、大ちゃんがそう在るために必要な存在って考えたら納得できた。

気がつくと辺りは暗くなっていた。

仕方なくししょーの責任として弟子をまた今度鍛えてあげることにした。

弟子が帰った後、あたいは大ちゃんを捜しに行った。

湖の近くで膝を抱えて座り込んでいる彼女を見つけた。

「大ちゃんみーっけ！」

「…チルノちゃん。」

今なら仲直りできそうな気がする。

裏二十二回目（後書き）

驚くほどチルノ視点が難しかった。

これでとりあえず2章は終わりです。読み返してみると、いくら紅霧異変で使うための能力を回収するためとはいえ露骨過ぎたと自分でも思います。少し後悔orz

閑話等を挟んで3章に移ります。最初の異変ですね。ここまで付き合ってくださった皆様に感謝を。

表二十三回目

Side 藤原 妹紅

慧音の様子がおかしいわ…。

一昨日久しぶりに私に会いに来た彼女だが、どこか様子がおかしかった。

何か相談したい事があるようだったが彼女は特に言い出さない。

なので私がその事について言及してみると……

「いや、何でもないんだ。本当に何もなかったよ。」

としか答えない。

仕方ないから人里にいる人間に最近何か事件があったのか尋ねに行ったが何もなかったらしい。

奇異な目で見られるのは慣れてるけど気持ちが悪いい事には変わりなかったわね。

今度、慧音が来た時もまだ悩んでいるようだったら無理にでも聞き出すつもり。

慧音には随分世話になったし、何より大切なただ一人の友人だから。

私はそう心に決め、いつも通り迷いの竹林を歩いている。

目的はもちろん、生涯の敵に会うため。

そうだったんだけど……

「こんな所をほっつき歩く人間だなんて……道にでも迷った？」

目の前には見知らぬ男が一人、竹林を探索しているようだった。

「人生という名の道には迷っていますね。……生涯導いてくれる伴侶募集中ですよ？」

私の声にソイツは振り返り、そんな事を言った。

「そうなの、だけど残念ね。私にはすでに夢中の人がいるわ。」

「それはそれは、九十九髪そんなになるまで思われている相手が羨ましいですね。」

「アイツは私に素敵な歌なんか詠んだ事はないわ。もちろん私もね。それで、貴方がここにいる本当の理由は何かしら？」

詠もうと思へば詠めるんだろうけど、アイツも私も。

「筍狩りに。」

「こんな季節に？」

今は夏、筍の旬は春ね。

「肝試し。」

「こんな時間に？」

太陽が真上にあるわ。

「それじゃ、筭試し。」

「どうやって試すのか教えてほしいわ。」

「……肝狩り？」

「一気に血なまぐさくなったわね。」

真面目に答える気はなさそうね。

ソイツは少し困った表情を見せる。

「……本当に道に迷ってるだけですよ。」

「それは嘘。ただの人里の人間ならこんな奥まで来ることはできないわよ。（訳…お前は人里に住んでいないし、普通の人間でもないでしょ。）」

アイツらが住んでいる家が近くにあるのに、それを見逃すほどあの兎達は怠けていない。

「ただの外来人ですよ。そしてそのセリフそのままそっくり返しますが、貴女はなんでこの竹林にいるんですか？（訳…貴女も人里に住んでいないし、ただの人間ってワケでもないみたいですわね。）」

彼の問いかけに私は肩を竦め、ふざけて答える。

「お姫様に会いに。」

「素敵な事で。私も変な兎を追いかけていたら気づいたらこんな所に、今度こそ不思議な国ですか？」

どっちの兎かしら？：アイツらが苦勞したならどっちでもいいけど。

「いいえ違うわ。ここはお伽噺の中ね。伴侶を募集しているなら五つの難題に挑戦してみたら？解く事ができたら絶世の美女を娶る事が出来るわよ。」

彼は首を横に振り、溜息を吐く。

「月には手が届かないのでやめておきますよ。」

おもしろい人間ね、私の髪や目の色を見てもなにも動じずに会話してくる。

どうやら、輝夜が送り込んできた刺客ではないみたいね。

「私は藤原 妹紅。貴方、名前は？」

「九十九 白。貴女の髪と同じ、九十九と呼んでください。」

コイツとなら少しくらい仲良くしても良いかもしれない。

表二十三回目（後書き）

九十九髪…老女の白髪、白髪、老女のこと。

正しくは夢中ではなく、意中の人。ですがこれだと意味が少し…ねえ。

伊勢物語（六十三段）

百年に一年たらぬつくも髪

我を恋ふらし面影に見ゆ

訳…あの白髪の老女が私を恋しく思っているらしい私の目にまるで幻のやように見えてくる

では行ってあげよう

本文で短歌うんぬんいつてるのはこれについてです。もちろんこれに対する女性の返事の歌もあります。

主人公と兎の話は…いつか書けたらいいなあ。

裏二十三回目

九十九と妹紅は互いに向き合うように適当な竹に寄りかかったまま会話をつづけていた。

「そう言えば、どうして貴女は人里に住んでいないんですか？」

「私の髪と目を気色悪がる人間もいるからね。それがうつとしいのよ。」

「個性的で羨ましいですがね。それに人里には変わった姿をしたモノもいますよ。（訳…本当にそれだけが住んでいない理由ですか？）」

彼の言葉に妹紅は顔を歪ませ話す。

「羨ましいなんて嫌味にしか聞こえないわね。実はね。私には死が無いの。死なないって事は、生きてもない。死と生という余計な状態が無くなり、純粋な人間に近い人間。」

ある意味幽霊みたいなものかもね、と小さく彼女は付けくわえた。

「……お姫様に五つの難題、藤原って名字でまさかとは思っていましたが、本当にそんなものがあつたんですね。」

「だから『妖怪ではなく人間』である私が一か所の場所に留まるワケにはいけないの。」

「なるほど……なら何故飲んだんですか？」

「きっかけは父親がアイツに恥をかかされたからなんだけど、つい魔がさして…ね。その結果が1000年以上の馬鹿な殺し合い。」

妹紅は自虐の笑みを浮かべた。

「よく気が狂いませんでしたね。その生き方…辛くないですか？」

「狂わないために殺し合うの。」

彼女の言葉に納得がいかず、さらに九十九は尋ねようとした。

「それで「それでも、辛くて辛くて辛くて、幸せなんてなくて。一度何も考えたくなくなって自棄になったこともあったわね。……だけど唯一無二の親友が支えてくれた。あの時は思いつきり頭突きをされて、『お前は友達を悲しませるのか!？』って泣きながら言われて、とても痛かったわ…体も心も。」

額に手を当てさすり、懐かしそうに笑っている。

「……………」

九十九はただそれを見つめて無言でいる。

「いつか、彼女とも別れの時がくるわ。それは死ねないのが死ぬほど辛いと思う。だけど私は私として生きる。それが慧音が私に望んでいる事だから」

決して燃え尽きる事のない赤い瞳がそこにはあった。

表二十四回目

Side 藤原 妹紅

慧音以外に自分の過去をしゃべったのは初めてだった。

何故こんな話を話してしまったのかしら…。

きつと九十九は私の事（不老不死）を気持ち悪がり、離れてしまいわ。

…何を落ち込む必要があるの？ こういう事には慣れてるでしょうに。

「……あの先生はどこまでも優しいですね。」

しかし、彼は空を見上げ、ボソツと言葉を吐く。

私が彼の反応に注意して耳を傾けていなかった聞き取れなかったと思うわ。

「九十九、お前外来人なのに慧音の事を知っているのか？」

「ええ、まあ。最近、幻想郷（こくま）に来たんですがその時お世話になりましたね。頭突きをされるほどの仲ですよ。」

あれは痛かったと苦笑しながら彼は人差し指でトントンと軽く額を叩いている。

「ふふふ、そうね。」

穏やかな雰囲気が一瞬に漂う。

私は殺し合いに行く途中だったけど……たまにはこんなのも悪くないわ。

先ほどの心配は杞憂に終わったらしい。

素直に良かったと思う。

私達はこちら最近の天気がいいとか、慧音授業はおもしろくないとか、暫くの間そんなくだらない事を話し続けた。

そして、私が気になっている事も彼に相談した。

「……ねえ九十九、一昨日、久しぶりに彼女が私に会いに来たんだけど、悩んでいるようだったわ。何か知らない？」

「…人里で何かあったんじゃないですか？」

「そう思って人里の人間に尋ねただけど、小さな事件も特になかったって言われたわ。」

目を閉じ、少しの間唸った後彼は答える。

「そう…ですか。すみませんが僕はそのワケを『教える』事はでき

ませんね。（訳：知ってはいますよ）」

「…どうしてかしら？ 慧音にお世話になっ…痛！」

強烈な痛みが右足に走り、そこに目をやると鋭い杭が太ももを貫いていた。

「貴女とは仲良くなれそうにないから。」

裏二十四回目

「貴女とは仲良くなれそうにないから。」

そう言いながら九十九は、何が起きているか理解できておらず片膝をついている妹紅に近寄り、彼女を貫いている杭を引き抜いた。

「え……？つく！」

当然、杭を引き抜くそこからは夥^{おびただ}しい血が溢れだす。

しかし、不老不死である彼女の傷口は瞬く間に治っていった。

「……へえー、すごいですね。でも痛覚はあるんですね。知らなかったとはいえ、刺して引き抜いてすみません。」

これは九十九の仕業だと妹紅は理解する。

「なんで……『気でも狂った』のかしら？」

それは妹紅にとっての願いであつた。

彼があゝの兎の能力のせいでこんな行動を起こしてしまったのだという。

「……さあ？どうでしょうね。そうかもしれませんし、そうじゃないかもしれません。」

九十九はそのワケを明確にしない。

彼自身分かっていないのか、それとも分かりたくないのか。

「私が……こんな体（不老不死）だから？」

妹紅は泣きそうだった。

何百年か振りに仲良くなれる相手を見つけ、実際に仲良くなったと思ったその人からいきなり傷つけられたのだ、無理もない。

「……。」

彼女の問いかけには答えず彼は竹林に竹を生やし、そのスキマから姿を消した。

「……どう、して、な……の？」

ポタリ、ポタリと雫が地面に落ちていった。

◇
◇
◇
◇

家に戻った九十九は何も食べず風呂にも入らず寝室へ直行した。

(……最近、きつい事が多かったが、今日のあれは完全に八つ当たりだった。どうせなら今日も最後まで演技してやればいいのに、我慢できなかったな。)

ベットに倒れこみ、言葉を吐きだす。

「…感情だけは一丁前にあるから性質が悪い。いや、あるからまだ救いようがあるのか? ……もしかしたらこれさえも…はあゝやめよう。」

眠れない事が分かっていた彼は魔法の森で採取した茸を煎じて小さな粒に固めた物を飲む。

生理的ではない猛烈な眠気が彼を襲う。

その夜、九十九はやっぱり昔の夢を見た。

裏二十四回目（後書き）

閑話終了。：後味悪いですね。

次話は一話だけ主人公の過去のお話を入れます。

表裏二度目（前書き）

一度目は表5回目と裏の間に上げています。

表裏二度目

薬で強制的に眠ってもこの夢を見るか…。

九十九の正面には幼いころの自分と小学生の自分がいる。

彼は右側に体を向けた。

中学生の『オレ』がいる。

大企業の社長である父は会社を継がせるために兄に色々な事を習わせている。

絵描き、ピアノ、水泳、空手、ボクシング、英会話、茶道、料理、他にも沢山。

興味旺盛だった兄はそれらを喜んで学んでいった。

オレもそれらを習う事にした。

兄を観察し模倣^{マネ}をする、人との付き合い方も喋り方も仕草も何もかも。

それはとても上手くいったし、なにより楽だった。

『俺』は高校生になり、兄と同じ学校に通い、兄が務めた生徒会長にも選ばれた。

両親はとても嬉しそうで、俺を褒めてくれている。

ただ、兄だけは俺を心配しているようだった。

「白、お前本当にそれでいいのか？」

…何がだい？兄貴。

「いや、白がそれでいいならいいんだ。いつかそれは破綻してしまうだろうけど何、その時は俺と一緒に側にいて支えてやるさ。」

……？良く分からないけどその時はお願いするよ。

兄はすぐに女性を口説いたり他人をからかうのが好きで

軽い人のように見えて

偶に何もかも見透かしたような事を言っ

て一見すると何を考えているか分からない人

…だけど本当はとても優しい人だって俺は知っている。

そしていつも俺の前を歩いてくれた。

……本当は薄々感じてはいた。

自分には『白^{じぶん}』がない事を。



「…という事が竹林でありました、紫様。」

藍は頭を垂れ、紫に今日の出来事を報告している。

「そう、御苦労さま。引き続き監視『だけ』をお願いするわ。もしバレテも気にしないで続けてちょうだい。」

長年仕えてきた従者は主人の声色に珍しく若干の喜びを感じ取ることができた。

「紫様…何か良い事があったのですか？」

「今日ね、外の世界に行って彼の過去を調べてきたの。」

紫は一枚の紙を藍に手渡した。

「これは……。」

そこには九十九の過去がびっしりと書かれている。

「つい夢中になって調べてしまったから、幻想郷に勝手に入り込んでしまった新しい妖怪を見逃してしまったみたいだけれど。」

彼女が外に目をやると幻想郷が何やら紅い霧に包まれているところだった。

表二十五回目（前書き）

後書きに主人公の能力を載せてます。

表二十五回目

紅い霧が幻想郷を覆い尽くして約2週間が経過した。

その霧の影響は外の世界にも拡大してしましそうなほどである。

時刻は夜、世界を照らしているのは紅い月だけ。

普通の魔法使い霧雨魔理沙はそろそろ博麗の巫女がこの異変の解決に乗り出すかもしれないと思い、自分が解決するために湖に浮かぶ霧中の島を目指しているところだった。

「：何とか霊夢^{あいつ}だったら『夜の境内裏はロマンティックね』なんてのんきなことをいうんだろうが私は夜は嫌いだな。変な奴しかないし。」

箒に跨り空を飛びながら彼女は妖精を魔法の弾幕で退治している。

「変な奴って誰のことよ。」

魔理沙の目の前に現れたのは赤いリボンをした小さな女の子だった。

「誰もあんたのことって言ってないぜ。」

「それはまあ、当然。」

彼女はもちろん人間ではなく妖怪だ。

「で、何でもそんな手を広げているのさ。」

「『聖者は十字架に磔られました』っていつてるように見える？」

「なんだか少し前にもそういうネタを振られた気がするぜ。（九十^{アイ}九ならこんな夜でもロマンティックなセリフを吐くんだろな。）」

そんな会話をしながら魔理沙と闇の妖怪ルーミアは弾幕ごっこを開始した。

星の弾幕が夜空を駆け巡る。



紅魔館 門前

「こんな霧で美しい星達も見ること叶わないと思っていましたが
どうやら違うようです。」

「あゝなぜでしょうか？」

門の近くにある木の中からいきなり現れた男を紅美鈴はかなり警戒している。

「なぜなら、美しい貴女とその帽子にはこれまた美しい一番星が輝

いているのですから。」



バルコニーにはその館の主と従者がいた。

「お嬢様、紅茶をお持ちいたしました。」

お嬢様と呼ばれた彼女、レミリア・スカーレットはカップを受け取り、その表面に映っている紅茶よりも紅い月を見て顔を綻ばせる。

「ありがとう、咲夜。なんだか今夜はとても面白い事が起きるみたいよ。」

紅茶を一口啜り、意味深な事を言う。

「それは誰にとってでしょうか？」

「今宵、この館にいるもの『全員』ね。」

彼女の言葉には本当にそんな事が起きてしまうかのような不思議な重みがあった。

「……全員ですか。」

咲夜は思考する、その意味するところを。

しかし、それを遮るかのようにレミリアが言葉を発する。

思考に気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。
言葉に気をつけなさい、それはいつか行動になるから。
行動に気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。
習慣に気をつけなさい、それはいつか性格になるから。
性格に気をつけなさい、それはいつか運命になるから。

表二十五回目（後書き）

- 『あらゆる植物を操る程度 of 能力』 (100%)
- 『境界を操る程度 of 能力』 (30%)
 - ・スキマに物を出し入れできる。
- ・人に直接触れることで意識を奪える。
- 『密度を操る程度 of 能力』 (30%)
 - ・水の密度を操ることができる。(他の物質は不可能。)
- 『風邪を操る程度 of 能力』 (40%)
 - ・身にまとった空を飛べる。
- ・突風をおこせる。
- 『道具の名前と用途が判る程度 of 能力』 (30%)
 - ・道具の名前を知り、触ることで用途を知ることができる。
- 『魔法を使う程度 of 能力』 (60%)
 - 『冷気を操る程度 of 能力』 (80%)
 - 『人形を操る程度 of 能力』 (80%)
 - ・ただし魔法を使う程度 of 能力と同時に使わなければならない。
- 『死なない程度 of 能力』 (50%)
 - ・切り傷、殴打の怪我は治るが脳、心臓を潰されると死亡する。

妹紅の能力はどうなのと思いましたでしたが結局マネできる事にしました。
じゃないと主人公殺されそうなので…。

裏二十五回目

Side 紅 美鈴

「なぜなら、美しい貴女とその帽子にはこれまた美しい一番星が輝いているのですから。」

そう言いながら男は私に近づく。

私はさらに警戒を強めた。

この霧の中で出歩けるのは普通の人間じゃないと分かっていたし、なによりその動作。

おそらく何か武術を身に付けているのだろう、それも達人と言っても良いレベルで。体重移動の仕方が違う、軽い雰囲気を持っているがこちらに一分の隙も見せていない。

逆にこちらの一挙一動を観察されているのを感じる。

「……何かご用があつてこの紅魔館いらっしゃたんですか？」

私が尋ねると男はわざとらしく、何かを思い出したかのように両手を合わせる。

「おつといけませんね、ここ三日飲まず食わずでお人形さんを作ってたのに加え、貴女に見惚れてしまって忘れてましたよ。実は今日ここに参ったのはですね、紅い霧の事についてなんですが……この霧の原因はこの館か館の主にあると思うのですが……違いますか？」

「まあ、私達がこの幻想郷と言う場所に現れてから発生したんですからその考えは当然ですよ。それで、もし原因が私達だしたらどうするんですか？」

「実はちょっと困った事がありましたて……。できれば霧を止めてもらいたいなとお願いしに来たんですよ。」

「困った事なら私が聞くだけ聞いてあげますよ。（訳…止めることはできません。）」

男はまるで親の敵のような目で私を見つめた。

まさかこの霧のせいで親しい人が死んでしまっただけでその復讐に来たのか？

思わず臨戦態勢に入ってしまう。

「……洗濯物が」

「え？」

「洗濯物が乾かないんですよ！」

「……は？」

「いや、だから太陽がでてないから洗濯物がですね、もう溜まりに溜まって。室内干しにも限度がって部屋もカビ臭くなりますし。分かりますかこの気持ち。僕はね、一言原因である奴にね、文句を言うためにね、ここに来たんですよ、中国さん！」

なんか警戒しているのが馬鹿らしく思えてきましたよ。

構えを解いても良いだろうか…。

「思いのほか小さいことで……。後、私の名前は中国ではありませんせん！人を見かけで判断しないでください、人じゃないですけど！私の名前は紅 美鈴。紅魔館の門番をしています。」

「これは失礼しました、紅さん。私の名前は九十九 白です。九十九と呼んでください。一応森の主なんかもしています。キを操る程度の能力なんかも持っていますよ。」

「キ？ああ、木ですね。私の気を使う能力とは似ていてまるで違いますね。」

「気を遣う？門番よりも従者の方が向いている気がします？」

「遣うじゃなくて使うですよ。それにこの館には完全で瀟洒な従者

さんがいますから。」

咲夜さんなら太陽がなくても洗濯物なんて乾かしちゃうんだろうな。

「ふむ、その人ならこの溜まりたまった気持ちを分かってくれそう
だ。主に家事的な意味で。」

九十九と名乗った男は門を通り抜けようとしたので私はそれを防ぐ。

「ダメダメ、何ちゃっかり館に入ろうとしてるんですか。ここは誰
も通すなと命を受けているんですよ。」

「え？でもさっき空から白黒の魔法使いが館の中に入っていきました
けど。」

……。

「具体的にはいつですか？」

「紅さんが構えて、僕が文句を言ったあと貴女が少し気を緩めてい
る間に。」

……やってしまった。

「そのやってしまったって顔が素晴らしいですね。」

九十九はニヤニヤと笑みを浮かべ、面白がっているようだ。

「教えてくれてもいいじゃないですか、迎撃しましたよ。（訳…そ
の魔法使いを倒している間は門が空きでしたよ。）」

「いや先に行って貰った方が何かと楽ですし、僕にも色々しなければならぬ事があつたんですよ。……これは本かな？　どうやら紅魔館の地下には大きな図書館があるみたいで。そしてもうひとつは……良く分かりませんね。」

「何故それを？」

私は疑問に思う。それらのことは館の中に入らないと知ることはできないのに……特に妹様のお部屋は。

「庭には何がありますか？」

もうダッシュで庭に向かうとそこには私が管理している花壇……に見たこともない木が生えている。

九十九も彼女の後に続きその木に触れる。

「今日の教訓を一つ。」

彼はまた木の中に消えていきながら私に伝える。

捕まえようとしたがもう遅かった。

キをつけましょう。

裏二十五回目（後書き）

弾幕ごっこしろよ！

表二十六回目

根を伸ばし、開けた空間まで貫通させた木から九十九は降り立った。

（空気が悪いな。）

そこにあっただのは本、本、本。

人間が一生かかっても読み切れないほどの大量の本だった。

外の世界で見た事がある雑誌もあるが中には見たこともない言語で書かれていたり、彼の身長ほどある本もある。

周りは図書館だけあってとても静か……なわけがない。

「水符 プリンセスウンディネ」

魔理沙と全体的に紫色の魔法使い、パチュリー・ノーレッジが弾幕ごっこの最中だった。

水符と名のつく通り、魔理沙に3本ほど細長い水鉄砲が連続して襲い、パチュリーはさらに直径1mほどの水滴をランダムにばら撒きはじめた。

魔理沙はそれを器用に避けている。

九十九はそれが終わるまで暇をつぶすためにジョジョの奇妙な冒険

が表紙を飾っている週刊少年ジャンプを手に取り読み始めた。

彼女らの近く何故か悪魔っぽい恰好をした少女が倒れているが気にしたら負けだ。

「木符 シルフィホルン」

「つち 魔符 スターダストレヴァリエ」

これは避ける事が出来ないと判断した魔理沙は己のスペルカードを発動させ大量の木の葉を打ち消し反撃する。

九十九はその次の週のジャンプに手を伸ばす。表紙は北斗の拳。

「水&木符 ウォーターエルフ」

パチュリーは反撃を反撃するために新たなスペルカードを使用。

（合併号……か。やれやれ、嫌な事を覚えているもんだ。）

どうやら彼は合併号だと知らず間違って同じジャンプを買った事を思い出したらしい。家に帰って気づいた時のガッカリ感はとてつもない。そのジャンプほど邪魔になる物はないだろう、だって超分厚いし、毎週買ってるなら置き場に困るのは当然だ。どうせ捨ててしまいうなら、よし、これが俺の本気だ的な事を思ってそれを破ろうとし、全然もしくは少ししか破れなくて思いのほか自身の非力さに打ちひしがれてしまった者も多いだろう。いや、これジャンプ愛が知らず知らずのうちに俺のパワーセーブしちゃっただけだからみたいな言い訳はどうでもいいとして、そんなことよりこんなことならち

よっと贅沢をしてハーゲンダッツ（キャラメル）でも買えばよかったと心底思うのは仕方ない。いやでも敢て、ガリガリ君（ソーダ味）を2本買って風呂上がりに食べるというのもなかなかいいかもしれない。後、個人的にはジャンプは3カ月周期で捨てるのがいいと思う。だって単行本がジャンプに追いついてしまうから。

（……スペルカードを合わせるのも面白いな。）

九十九はパラパラと新年号を読みながらそんな事を思う。

「これで止めよ。金&水符　マーキュリポイズン　ごほっゴホッ。」

「それはこっちのセリフだぜ。恋符　マスタースパーク」

いつの間にか佳境に入ってる彼女らの対戦。互いにスペルカードが激突する。

勝者は……魔理沙だ。

「しくしく、喘息ででスペルが唱え切れないの。」

「知らないぜ、そんなこと。こんな所に引きこもっているからそうなるんだ。」

「うるさいゴホッ、わね、ゴホ。」

「お大事に。」

咳が止まらないパチュリーを気にすることなくウィングを飛ばして彼女は先に進んでいった。

「おおごとにく。」

九十九も彼女の後に続こうとする。

「ゴホッ、ちよつと待ちなさい。何しれつと通ろうとしてるのよ。」

いきなり現れた人間に多少驚きつつも声をかける。

「行けませんか？ どうせ、今の貴女は戦える状態じゃないでしょ。」

「なめないで頂戴。これ位なんともないゴホッ！ ハアー、ハアー。
レミィの所には行かせない。」

何やら息をするのも苦しい様子だ。

「あまり無理はしない方が……。」

九十九の言葉に聞く耳は持たないようで彼女はスペルカードを構える。

「ハアー、火水木金土符 賢者のゴホッ、ハッ、ハッーハッハッ」

カードは発動せず飛ぶ事さえできなくなり、地面に膝を付けてしま
う。

ますます息が荒くなり、ほとんど呼吸ができていない。

九十九はパチュリーの様子を見て近寄り、呼吸がしやすいよう服を緩め楽な姿勢にして、トントントントと軽く背中を叩き始める。

「逃げませんから落ち着いてください。腹式呼吸を意識して、痰が
タシ
吐きだせるならそうしてください。」

「ハッーハッーハッー。」

彼の声が聞こえていないのかそれでも彼女は戦おうとする。

「……これ飲めますか？喘息に効くらしいですよ。お水をどうぞ。」

九十九は水の入ったコップと錠剤を渡そうとする。

しかし、パチュリーは彼の方を見向きもできないのか荒く息をしているだけだ。

「……………ふむ。（霧雨さんも厄介な事を押しつけてくれたもんだ。）」

何を思ったのか九十九は自分の口に水と錠剤を含む。

そして、片手でパチュリーの顎を上に向かせ、もう片方の手で彼女の鼻をつまみ……

口と口を合わせた。

表二十六回目（後書き）

ズキユウウウウウウウウウウウウン！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635w/>

東方表裏録

2011年11月7日13時10分発行